



Title	集団疎開児童の医療問題 : 女子医学専門学校「学徒医療隊」の無医村動員
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 128, 67-129
Issue Date	2017-06-23
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.128.67
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66771
Type	departmental bulletin paper
File Information	060-1882-1669-128.pdf



集団疎開児童の医療問題

—女子医学専門学校「学徒医療隊」の無医村動員—

逸 見 勝 亮*

【要旨】 政府は、1944年7月22日、東京都・横浜市など13都市の国民学校児童約40万人を集団疎開させるよう決定した。学童集団疎開を円滑に遂行するうえで、宿舎・食糧・日常生活用品の確保などともに、保健衛生問題は重要な課題であった。そして、1944年10月26日現在、東京都（区部）・横浜市など8都市から1,751市町村に集団疎開していた児童35万4,937人のうち、5万2,006人（14.65%）の疎開先354ヵ所（20.22%）は無医村であったが故に、疎開児童の医療問題はたちどころに困難な課題として立ち現れた。文部省・厚生省は疎開先都府県医師会・歯科医師会に無医村診療への協力を要請するとともに、集団疎開先無医村に東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）・帝国女子医学薬学専門学校（現東邦大学）の生徒を、東京都・神奈川県からの学童集団疎開先無医村46ヵ所へ動員した。

本論文は、以下の諸点を究明しつつ、学童集団疎開先無医村へ出動した女子医学専門学校生徒は、疎開児童・地域住民にとって紛う事なき医師であったことを証する。

- （1）学童集団疎開先無医村の医療状況と政府・都府県の対応策
- （2）女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員計画
- （3）女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員
- （4）女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村における「診療補助・健康指導」の実態

【キーワード】 学童集団疎開、無医村、女子医学専門学校生徒、水上小学校、加藤淑子

はじめに

政府は、1944年6月30日の閣議で「極秘 学童疎開促進要綱」「帝都学童集団疎開実施要領」⁽¹⁾を決定し、7月8日には防空総本部が「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」⁽²⁾を決定し、東京都（区部）からの学童集団疎開の推進をはかった。文部省は、1944年7月22日には、疎開地方長官宛に次官通牒「学童集団疎開並ニ之ガ経費ニ対スル国庫補助ニ関スル件」⁽³⁾を發し、「帝都学童集団疎開実施要領」「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」に準じて、神奈川県（横浜・川崎・横須賀市）、愛知県（名古屋市）、大阪府（大阪市）、兵庫県（神戸・尼崎市）、福岡県（門司・小倉・戸畑・若松・八幡市）においても、「疎開ハ直ニ之ガ実施ニ着手シ一日モ速ニ之ヲ完了セラレ度コト」を指示した。政府は、東京都をはじめとする13都市から国民学校児童40万人を集団疎開させる方針を打ち出したのである。

集団疎開児童40万人を送り出し、また受け入れるために、関係都府県・市町村は対応を急がなければならなかった。20万人を割り当てられた東京都は、1944年7月18日ないし19日に国民学校の父兄会を開催した。集団疎開申告書提出期限は7月20日であった。国民学校長は集団疎

* 北海道大学名誉教授・北海道大学大学文書館研究員
DOI: 10.14943/b.edu.128.67

開先宿舎の確定、引率教員・寮母・作業員の確保に、学級担任は集団疎開参加を躊躇する父母の「勸奨」に奔走した⁽⁴⁾。

「勸奨」の結果、1944年8月4日に東京都板橋区立上板橋第三国民学校から113人が群馬県北甘楽郡妙義町へ、品川区立城南第二国民学校から173人が東京都西多摩郡瑞穂町へ出発したのを嚆矢⁽⁵⁾とし、東京都（区部）・横浜・川崎・横須賀・名古屋・大阪・神戸・尼崎市は学童集団疎開を順次実行し、9月25日には疎開児童数は41万6,946人、疎開先は36都府県におよんだ⁽⁶⁾。

学童集団疎開を円滑に遂行するうえで、宿舎・教育（卒業後の進路）・食糧・日常生活用品の確保・冬季対策とともに、保健衛生問題は重要な課題であった。そして、少なからぬ学童集団疎開先が無医村——医師不在の町へ集団疎開した例も散見されるが、無医村と一括する——であったが故に、保健衛生就中医療問題はたちどころに困難な課題として立ち現れた。

文部省の調査によれば、1944年10月26日現在、東京都（区部）・横浜・川崎・横須賀・名古屋・大阪・神戸・尼崎市から1,751市町村に集団疎開していた児童35万4,937人のうち、5万2,006人（14.65%）の疎開先354ヵ所（20.22%）は無医村であった⁽⁷⁾。

この事態に対処するために、文部省・厚生省は集団疎開先の都府県医師会・歯科医師会に無医村診療への協力を要請するとともに、集団疎開先無医村に東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）・帝国女子医学薬学専門学校（現東邦大学）の生徒を動員した。

管見の限り、学童集団疎開体験者の回想記録や自治体教育史が、女子医学専門学校生徒の集団疎開先無医村への動員に言及したことは皆無に等しく、学童集団疎開に関心あるひとびとの間においても事実の共有にはほど遠い。先行研究も乏しく、下記のような例（拙著『学童集団疎開史——子ども達の戦闘配置』大月書店、1998年）があるに過ぎない。

文部省総務局長・厚生省衛生局長は、一九四四年年十一月五日付で「女子医学徒勤労働員要領ニ関スル件」を通牒し、東京女子医学専門学校・帝国女子医学薬学専門学校学生にたいし、勤労働員の一環として、集団疎開児童の診療・健康指導業務に従事するよう命じた……「女子医学徒勤労働員要領」「東京都及神奈川県学童疎開地ニ対スル学徒医療隊派遣計画」によれば、学校報国隊特技隊として東京女子医学専門学校・帝国女子医学薬学専門学校学生を「学徒医療隊」に編成し、東京都と神奈川県からの集団疎開先各二五ヵ所合計五〇ヵ所へ動員するという計画であった。動員学生数は両校から第三学年各一五〇人合計三〇〇人、期間は一九四四年十一月一〇日から一九四五年二月末日までで、一ヵ所に二人を二〇日交替で派遣する予定であった。……学童集団疎開の酷薄な条件に抗して事態を打開できるほどの措置ではなかった⁽⁸⁾。

拙著では「重田文書」（国立教育研究所、現国立教育政策研究所）にもとづいて、集団疎開先無医村にかかわる統計を作成してはいるが、動員の実際を示す資料を見出すにはいたらぬまま、「学童集団疎開の酷薄な条件に抗して事態を打開できるほどの措置ではなかった」と結論づけた。

当該女子医学専門学校沿革史における、「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員に関する記述も確認しておく。

東京女子医科大学が編纂・発行した『東京女子医科大学小史一六十五年の歩み』（1966年）、『東

京女子医科大学八十年史』(1980年),『東京女子医科大学百年史』(2000年)には、東京女子医学専門学校「学徒医療隊」に関する記述はない。

加藤恭亮『東邦大学三十年史』(東邦大学, 1955年), 加藤恭亮『東邦大学四十年史』(東邦大学, 1965年)には、「学徒医療隊」に関する記述はない。東邦大学編『東邦大学50年史』(東邦大学創立50周年記念事業委員会, 1978年, 79～81頁)は、「疎開児童巡回診療」の項で「薬学科・理学科はそれぞれ学徒動員にかり出され、学業は手につかぬという状態であった。医学科には医者のおもひによって、ぴったりの仕事があてがわれた。それは無医村の疎開児童に付添って行き診療を担当する医療班の仕事であった」と述べている。「疎開児童巡回診療」は、「学徒医療隊」の無医村動員のことである。見学玄『東邦大学60年史』(東邦大学創立60周年記念事業委員会, 1985年, 44頁)は、「疎開児童巡回診療班」の項を設けて数行を割いている。内容は『東邦大学50年史』とほぼ同一である。創立70周年記念事業準備室編『東邦大学70年史』(東邦大学創立70周年記念事業準備委員会, 1995年, 429頁)は、「年表」の1944年の項に「10. 一 医専・疎開学童診療班を24カ所の無医村に2名ずつ派遣」と記してある。創立80周年記念準備室編『東邦大学80年史』(東邦大学, 2005年, 373頁)の「年表」には、『東邦大学70年史』と同一の記述がある。

女子医学専門学校「学徒医療隊」の集団疎開先無医村への動員を、改めて俎上にのぼせるのは、東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会編『たんぼぼ 東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会文集』(東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会(昭二十会), 2007年, 以下『たんぼぼ』と略記する), 江塚笙子編『ここに道あり』(東京出版センター, 1985年)などの「学徒医療隊」体験者の回想を知ったからである⁽⁹⁾。

「疎開児のことは、すっかり忘れていたが、今回の文集を作ることで頭のすみにあったのだろう。今年二月三日の東京新聞夕刊に「疎開児の姿 絵本に」の記事をみつけ、港区役所の展示場に行った。……S.W氏に、私たち女子医専の疎開児童の奉仕活動についてお尋ねしたが、「聞いたこともない」とのことだった」との「学徒医療隊」参加者の慨嘆——加藤泰子が観たのは、全国疎開学童連絡協議会・港区共催で開催した小林義一絵・全国疎開学童連絡協議会編『絵で見る学童疎開 うちに帰りたい!』(クリエイティブ21, 2006年)の「原画展」(2007年1月22日～2月16日, 港区役所)である——は、筆者の問題意識を揺さぶらずにはおかなかった⁽¹⁰⁾。

また、東京都水上国民学校疎开学寮における「学徒医療隊」の活動を記した加藤淑子「戦中日記抄」(『たんぼぼ』)が、水上国民学校の集団疎開の記録でもあることに瞠目させられた。換言すれば、これらの記録は、無医村へ集団疎開した児童の医療問題を、女子医学専門学校「学徒診療隊」の動員を視野に入れた考察を、筆者に迫ったのである。

本論文の課題は、以下の諸点を解明することである。

- (1) 学童集団疎開先無医村の医療状況と政府・都府県の対応策
- (2) 女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員計画
- (3) 女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員
- (4) 女子医学専門学校「学徒医療隊」による疎開児童の「診療補助・健康指導」の実態

これらの課題究明を通じて、「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村動員は「学童集団疎開の酷薄な条件に抗して事態を打開できるほどの措置ではなかった」との拙著における評価の再検討を試みる。

依拠する主な資料は、国立教育政策研究所所蔵「重田文書」、東京都公文書館所蔵東京都教

育局文書，東京女子医科大学大学史料室所蔵資料，東邦大学額田記念東邦大学資料室所蔵資料，東京女子医学専門学校・帝国女子医学薬学専門学校「学徒医療隊」の回想記録などである。

以下では，東京女子医学専門学校を東京女子医専，帝国女子医学薬学専門学校を帝国女子医薬専と略記する場合がある。また，行論上引用文献に要約・注記を要する場合には □ 内に付した。

1. 学童集団疎開先無医村の医療状況と政府・都府県の対応策

管見の限り，学童集団疎開実施当時の医師が定住していない無医村数と無医村の医療状況を知りうる資料は見当たらない。判明する直近の無医村数統計によれば，1937年6月調査では2,909ヵ村，1938年3月調査では3,231ヵ村，1939年5月調査では3,655ヵ村と，増加傾向にあった。1939年5月の無医村は，全村数9,464（1939年4月現在）の38%を占めていた⁽¹¹⁾。

「村の交通機関」，「医師の居る隣村との交通機関及往診料」，「医療技術者及共同炊事・託児所」，「村の衛生状態」，「家庭薬」の項目にしたがって整理した「無医村の交通状態と医師の来訪状態」（1942年7月）（中村康『無医村報告書』大新社，1944年）によって，無医村における医療問題を端的に示すなら下記のようなのである。

福島県田村郡都路村の「交通機関」は，定期バス・自転車・馬・徒歩である。「医師の居る隣村との交通機関及往診料」は，「常葉町（五里），船引町（七里）より来診し前者より五十円，後者より八十円の往診料を要し其大部分は車代である。一般に手遅れとなること多し。一ヶ月〔間に〕医師を訪問するものは一五〇人位」である。産婆は1人在住しているが，看護婦経験者・保母は在住しておらず，共同炊事・託児所は開設されていない⁽¹²⁾。

都路村は，医師が在住する常葉町まで約20km，船引町までは約28kmに位置しており，定期バスを利用する以外の移動にとっては，容易ならざる距離であったろう。まして高額な往診料に，受診依頼を躊躇するのは想像に難くない。なお，福島県総務部編・発行『福島県第五十八回統計書』1943年，41頁）によれば，福島県田村郡都路村の1940年10月1日現在の人口は，4,123人であった。

「〔埼玉県秩父郡大滝村の〕西北隅の金山に医師一人あるも，他の部落と遠く隔つて居る為利用せられず，又本年〔1942年〕春迄は役場の所在地落合に医師があったが，東京に移住し，以後は事実上無医村の状態にある。医師の診療を仰ぐには役場からバス及び電車で一時間の秩父町へ行かねばならず，村が広いからその役場へ出るのに半日を要する部落が少なくない。産婆も居らぬ」⁽¹³⁾ とのように，有医村でも「村内の辺陬部落は，無医村同様である場合が少なくないから，実質的無医地区は寧ろ形式上無医地域より広」い事例もあったのである⁽¹⁴⁾。

このような医師と医療機関の偏在に拍車をかけたのは，医師の軍隊への召集である。高岡裕之によれば，「内地」の医師は1941年末には5万4,000人だったが，応召により敗戦前には3万5,000人に減じた⁽¹⁵⁾。

医師召集の影響をあげておこう。

山梨県は、宮内省侍従戸田康英への報告（1942年6月）において、召集の影響は明示的ではないが、「事変以来医師ノ払底ニ依リ村落ニ於ケル医師ノ補充ハ困難ニシテ無医村百三ヶ村、全然医療施設ナキモノ八四ヶ村アリ」と述べている。1941年12月末日現在山梨県は1市6町184村からなっていた。「無医村百三ヶ村」は山梨県全村184ヶ村の55.98%に相当する⁽¹⁶⁾。

山形市医師会によれば、1937年7月に2人、8月に5人、9月には1人が応召、1人が日本赤十字社救護班員として召集された。また、「少壮の医師は大陸戦線の兵員増強にともなって、戦線に動員され、あるいは時局産業関係会社に引き抜かれ、学生も医学志望学生が漸減の方向をたどっていた。山形市立病院済世館ではすでに支那事変勃発直後、内科・外科・皮膚科・泌尿器科の各医員、産婦人科の助手一名が応召従軍しており、その他、医長・医員も退職する者数名を加え、その補充難に苦しんだ」という⁽¹⁷⁾。

政府は、無医村・無医地区の増加傾向の下で、学童集団疎開を立案し実行に移した。もっとも、「帝都学童集団疎開実施要領」（1944年6月30日閣議決定）には、「疎開先ニ於ケル学童ノ養護及医療ニ関シテハ充分準備ヲ為シ支障ナキヲ期スルモノトス」とあり、学童集団疎開政策には、当初から保健衛生対策を盛り込んでいた。

「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」も、「医師看護婦ノ嘱託等ニ付地元ニ於テモ協力スルコト」、「送出学校ヨリ若干ノ救急医療材料ヲ携行セシムルコト」⁽¹⁸⁾と定め、東京都は1944年7月16日に開催した国民学校長会議における「指示事項」においても、「宿舎ニ於ケル職員」に「寮ノ嘱託医」1人を配すると謳った⁽¹⁹⁾。

東京都は、1944年7月25日付で、東京都からの集団疎開先各県（宮城、山形、福島、新潟、長野、山梨、静岡、千葉、埼玉、群馬、茨城、栃木、富山）衛生課長・日本医師会・東京医師会宛に「学童集団疎開ニ関シ医師会等ノ協力方依頼ニ関スル件」を発し、「今般本都学童ノ集団疎開ニ関シテハ万般御厄介ニ相成無辱存居候、然ル処疎開先地区ニ依リテハ医薬ノ手当少々心許ナキ箇所モ有之哉ニ及聞心痛居候」と、各県医師会の協力を得られよう依頼した⁽²⁰⁾。

その一方で、東京都は「学童疎開問答」（『都政週報』第48号、1944年7月29日）において、「学童集団疎開について、隣組内のこれに当る学童をおもちの父兄へ、趣旨の徹底をはかり、安心して進んで参加させていたゞく様、組長さんの御骨折りを願ふために、本誌を三十五区全隣組さんに贈ります。宜しく、御盡力の程をお願いします」と謳い、「疎開先で病気などした場合はどうしていたゞけるでせうか」と問いを立てた。答えでは、「お子様の病気についてのことは出来るだけ手配してあります。疎開地には医師を嘱託して置き、その上養護訓導や養護婦、又衛生に心得のある寮母等もついてゆくのですから大丈夫です」と説明していた⁽²¹⁾。

「集団疎开学童に関する緊急対策就中保健対策について 官房技監室 一九. 七. 二九」には、「日本医師会、府県医師会、医師会支部等をして組織的に学童の保健指導、医療等に当たらしむる」とあり、厚生省官房技監室には、医師会に学童集団疎開児童の医療を担当させる計画があった⁽²²⁾。

1944年7月25日付「学童集団疎開ニ関シ医師会等ノ協力方依頼ニ関スル件」によって、東京都が行った集団疎開先府県医師会へ協力要請については、『宮城県医師会史（沿革編）』に宮城県医師会が対応した事例を見出せる。

宮城県医師会は1944年8月21日に郡市支部長会議を開催した。その際の指示事項には、「(二) 医師の補習教育実施に関する件」、「(三) 保健衛生個別指導実施に関する件」とともに、

以下のような「(一) 集団疎開児童の保健対策に関する件」があった。

学童集団疎開の急速実施に伴い、疎開先における学童の保健衛生に万遺漏なきを期するのは、本事業の円滑な運営上最も緊要事であってすでに本医師会としても県当局と連絡の上適当な措置を講じている。決戦下重要な本施策の成否が保健衛生上極めて大なる点に鑑み、疎開先の医師会支部において、責任者体制を定め、特に無医地区、または医師不足の地域における疎開児童の診療に遺憾なきよう期せられたい。(保健対策別記)⁽²³⁾。

「(一) 集団疎開児童の保健対策に関する件」が、「特に無医地区、または医師不足の地域における疎開児童の診療」とあるとおり、無医村に集団疎開した児童の保健対策であることに多言は要しない。

「(保健対策別記)」は、以下に掲げる「集団疎开学童保健確保ニ就テ」である。

集団疎开学童保健確保ニ就テ

- 一、毎週一回宛嘱託医ヲ出張セシメ健康診断並ニ治療ヲ行フコト
 - 二、嘱託医ハ正副二名ヲ決定シ置クコト、人選ハ支部長ニ一任スルコト
 - 三、緊急ノ往診ヲ必要トスルトキハ正嘱託医ニ連絡ヲトラルルコト、若シ正嘱託医不在等ノ場合ハ副嘱託医ニ連絡ヲトラルルコト
 - 四、入院診療ヲ必要トスル場合ハ嘱託医ヨリ病医院ニ連絡入院セシムル様手配セラレタキコト
 - 五、緊急往診ノ場合ノ乗合自動車又ハ「トラック」利用等ニ就テハ県当局ニ於テ地元警察署ニ充分ナル連絡ヲ取り置クコト
 - 六、医師ハ警察署ニ連絡ノ上往診ニ遺憾ナキヲ期スルコト
 - 七、嘱託医以外ノ一般医師ニ対シテモ疎开学童ノ保健医療ニ特ニ協力セラルル様徹底セシムル為ニ医師会支部長会議ヲ開催シ県医師会長ヨリ其ノ旨ヲ指示スルコト
 - 八、診療費ハ国民健康保険ニ準シ計算収受スルコト
 - 九、健保、政共済等ノ家族タル児童ハ其ノ制度ニ依ルコト、其際ノ家族負担分ノ支払ニ付テハ学校当局立替払ヲナスコト
 - 十、嘱託医手当ニ付テハ県教学課ノ斡旋ノモトニ東京都ノ委託ヲ受ケ県医師会ニ於テ土地ノ情况ヲ勘考シ嘱託料ヲ決定給スル
 - 十一、緊急ノ備品トシテ簡易ナル薬品等ヲ配付シ置クコトヲ県ニ於テ考究スルコト
- 〔受入地、現在数、追加見込、合計からなる「疎开学童人員調」は省略した〕⁽²⁴⁾

1944年8月22日、文部省は体育局長名で地方長官宛に「疎开学童ノ保健衛生ニ関スル件」を通牒し、学童疎開開始後によく「受入側地方庁ニ於テ考慮スベキ事項」において、「地元ノ診療所、保健所等ノ施設ヲ組織的ニ活用スルコト、特ニ医療ノ便宜尠キ町村、部落等ニアリテハ医療ニ関シ具体的計画ヲ樹立シ置クコト」を指示した。また、「疾病予防等ニ関スル事項」では、「医療機関トノ連絡、患者運搬ノ方法等ニ関シ予メ検討シ学童ノ健康状態ニ異常ヲ発見シタルトキハ直ニ適切ナル処置ヲ執リ医療ノ時期ヲ失セザルヤウ留意シ特ニ夜間ニ於ケル準備ノ万全ヲ期スルコト」を求めた⁽²⁵⁾。

1944年8月29日、文部省・厚生省は疎開先地方長官宛に「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ニ関スル件」を通牒し、医薬品を9月10日までに都府県卸売機関に発送すると伝えた⁽²⁶⁾。本通牒の「(別表) 配給品一組内容表(集団学童一〇〇名ニ対シ一組ト)」には、「家庭薬」(解熱剤・鎮痛剤・胃腸薬・下剤・皮膚薬・外傷剤・目薬など21種類)、「医薬品」(消毒剤・下剤・駆虫剤)、「衛生材料」(ガーゼ・包帯・脱脂綿)、「医療衛生用品」(氷枕・氷嚢・油紙)が載っている。

厚生省・文部省は、1944年9月6日、「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」をもって、疎開学寮嘱託医、あるいは学童疎開先の巡回診療に従事する医師に対して、「主トシテ集団疎開学童ノ医療向」にアスピリン・リゾールなど58種類の医薬品と、「応急用トシテ」100名単位で家庭薬・衛生材料・医療衛生用品を配給する旨通牒した⁽²⁷⁾。

厚生省は、1944年9月6日、日本医師会長・日本歯科医師会長宛に「疎開学童ニ対スル医療及保健指導ニ関スル件」を通牒し、学童集団疎開先無医村における診療を要請した。以下はその全文である。

疎開学童ニ対スル医療及保健指導ニ関スル件

学童ノ疎開先ニ於ケル医療及保健指導ニ関シテハ地方ニ依リ疎開先ガ無医地域ナル為疎開学童ノ保護者等ヲシテ不安ノ念ヲ生ゼシメ居ル向モ有之斯クテハ疎開ノ円滑ナル遂行ヲ妨グル虞有之候ニ付テハ特ニ左記事項御留意ノ上関係医師及歯科医師ヲシテ急速且適切ナル挺身診療ヲ実施セシムル様格段ノ御配慮相成度
追而疎開側都府県ヨリ疎開寮舎最寄医師又ハ歯科医師ヲ寮嘱託医ニ嘱託セントスル場合ハ極力之ニ応ジ常時学童ノ医療及保健指導ニ当ラシムル様御指導相成度申添候

記

- 一 疎開先ニ於ケル学童ノ医療及保健指導ハ其ノ県医師会員及歯科医師会員ヲシテ之ヲ行ハシムルコト
- 二 関係県医師会及歯科医師会ハ疎開学童ノ医療及保健指導ニ関シ支部毎ニ責任者ヲ定メテ部内全疎開学童ノ医療及保健指導ノ統制指導ニ当ラシムルコト
- 三 学童疎開先ニ対シテ巡回診療ヲ為ス場合ハ其ノ中間期間ニ於ケル急患者発生等ノ際ニ於ケル診療ニ付テモ及ブ限り考慮シ置クコト
- 四 支部責任者ハ部内疎開寮舎ニ医師多数ノ派遣ヲ必要トスル事態発生セル場合急遽多数出勤セシメ得ル態勢ヲ整ヘ置クコト
- 五 本診療ニ必要ナル医薬品衛生材料ニ付テハ別紙写(イ参照)ノ通関係地方長官宛指示済ナルコト
- 六 以上ノ医療及保健指導ニ要スル経費ニ関シテハ受入側県ヲ通ジ又ハ其ノ指導監督ノ下ニ疎開側都府県ト密接ナル連絡ヲ保持スルコト⁽²⁸⁾

「中間期間ニ於ケル急患者発生等ノ際ニ於ケル診療」とは、学童集団疎開先無医村巡回診療の際に、集団疎開学寮以外における診療を認める措置である。無医村に出向いた医師が、集団疎開児童だけを診るというのでは巡回診療は体をなさない。「別紙写(イ参照)」は、医薬品・衛生材料などの配給を指示した1944年9月6日付厚生省・文部省通牒「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」である。

巡回診療に要する医薬品は、1944年8月29日付疎開先地方長官宛文部省・厚生省通牒「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ニ関スル件」によって措置するとした「集団疎開学童用医薬品」である。事実上使途は融通無碍という医薬品の配給は、開業医を学童集団疎開先無医村診療へ「動員」するためにも必要な方策であった。

東京都荏原区長は、1944年10月8日付で上記「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ニ関スル件」と同趣旨の「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ニ関スル件」⁽²⁹⁾を発しており、医薬品「特別配給」手続きは進捗していた。

「疎開学童ニ対スル医療及保健指導ニ関スル件」(1944年9月6日付通牒)発送後には、学童集団疎開先に無医村が含まれていることは「おおっぴら」となり、1944年9月7日付『朝日新聞』は、「学童疎開の現地報告／雪に勝て“決戦児”／試練の冬によいか対策」と見出しを掲げて、冬季対策の必要を報じた。

同記事は、「雪の冬になれば交通難と関連して早急に当局の措置を望まれるのが医療問題だ、(福島・宮城)両県当局の話では、大ざっぱにみて疎開児童の約三割近くが無医村またはそれに近い状態におかれてゐる、問題は宿舎から医師のゐる町までの交通である」と、無医村における早急な措置を主張した。また、熱塩温泉(福島県耶麻郡熱塩村)学童疎開宿舎寮母の「冬の病院通いは思いやられます」との談話を載せたうえで、若松市医師会は東山温泉(福島県北会津郡東山村)へ出張診療を行い、宮城県知事は無医村往診に警察車輛の出動を言明したと記している。

宮城県知事が述べたという、無医村への出張診療、警察車輛の出動は、先述した宮城県医師会「集団疎開学童保健確保ニ就テ」の内容そのものである。

上記「学童疎開の現地報告」が紹介した福島県耶麻郡熱塩村には、9軒の旅館に東京都下谷区金曾木・竜泉・東盛国民学校児童629人が、同県北会津郡東山村には17軒の旅館・ホテルに下谷区台東・入谷・西町・谷中・山伏・大正・桜丘・根岸国民学校児童1,267人が集団疎開していた⁽³⁰⁾。

ややさかのぼるが、福島県警察部衛生課編・発行『福島県に於ける乳児の出生、発育、栄養方法並に死亡原因等に就て』は、1935年12月末日現在の福島県における無医村の状況は、「福島県三市、四七町、三五七村中無医村は二一四にして、実に其の半数以上を占め、全国中斯くの如き事例を見ず。殊に伊達郡の如きは三六ヵ村中実に三二ヵ村殆んど其の大多数に医師なく、耶麻郡の三三ヵ村中二二、相馬郡の二三ヵ村中一九等之に次ぎ悲惨なるの事例なり」と記している。「悲惨なるの事例」に、福島県における1935年中の出生児36,668人中生後1日以内に142人、2～3日以内に159人、4～7日以内に179人、8～14日以内に224人、15～21日以内に130人、22～30日以内に171人、31～50日以内、51～100日以内に410人、201～365日以内に485人、366～730日以内に485人、すなわち生後満2ヶ年以内に3,300人(8.99%)が死亡したとの統計をあげておく⁽³¹⁾。厚生省衛生局調査では、1939年8月現在の福島県の無医村は225ヵ村であった。1935年(214ヵ村)よりは増加し、且つ全国で最も多い。1944年の統計は見当たらないものの、事態が改善したとは考えにくい。ちなみに、次いで多いのは茨城県156ヵ村、長野県148ヵ村、岐阜県146ヵ村、新潟県143ヵ村、富山県142ヵ村であった⁽³²⁾。

なお、野間正秋は、全国の無医村は、1927年6月調査では2,909ヵ村、1930年3月調査では3,231ヵ村、1936年5月調査では3,243ヵ村、1939年5月調査では3,655ヵ村との統計を掲げている⁽³³⁾。無医村の増加傾向は顕著であった。

『日本医事新報』（第1145号，1944年9月16日）は、「学童疎開と保健対策」を特集した。

田中守（厚生省衛生局事務官）は、先述した医師会・歯科医師会に対する無医村巡回診療要請を敷衍して、「今次学童の集団疎開に際し、其の教育及び食糧の問題と共に、最も関心を払はるべき問題が医療保健に関する事柄である事は、改めて言を俟たない。殊に地方に依つては疎開先が所謂無医地域である為め一部疎开学童の保護者等に不安の念を生ぜしめて居る向もあつて、疎開の円滑な遂行を期する上からも、固より此の儘には放置し得ぬところである」⁽³⁴⁾と述べている。

1944年9月14日、文部省体育局は局長名で関係地方長官宛に、下記の「学童集団疎開ノ冬期ニ於ケル保健施設ニ関スル件」を照会した。

学童集団疎開ノ冬期ニ於ケル保健施設ニ関スル件

今般学童集団疎開ノ実施ニ伴ヒ疎开学童ノ保健衛生ニ関シテハ格段ノ御配意相成居ルコト存ズルモ地方ニ依リテハ冬期間ニ於ケル氣候風土ガ疎開側都市ニ比シテ著シク相違セルタメ学童ノ保健養護上特別ノ施設ヲ要スル地域モ有之カト存ゼラルニ付テハ左記事項ニ関シ貴管下ニ於ケル受入地域ノ実情ヲ御調査ノ上本月末日迄ニ文部省体育局宛ニ御回答相煩此段及照会

記

一 調査事項

（一）地域名

冬期間ニ於テ特別ノ保健施設ノ要ヲ認ムル集団疎开学童受入町村（以下其ノ地域ト称ス）ノ名称

（二）学童数

其ノ地域内ニ受入タル学童数又ハ受入予定ノ学童数

（三）施設ノ種類

其ノ地域ニ於テ冬期間特ニ必要ト認ムル施設ノ種類（例ヘバ暖房設備ノ種類竝ニ燃料トシテ「木炭」「薪」等、マタ防寒具ノ種類トシテ雪国ニ於ケル「ゴム長靴」等ノ如ク其ノ地ノ実情ニ即シテ之ヲ掲ゲ要スレバ其ノ説明ヲ備考トシテ述ブルコト

（四）統制物資ノ名称

其ノ地域ニ於テ最も入手困難ニシテ特別配給ノ要アリト認ムル各種統制物資アラバ其ノ名称

（五）医師ノ現在数

其ノ地域内ニ現ニ在住スル開業医師ノ員数

（備考）右ノ調査事項ハ二ノ様式ニ依リ報告スルコト⁽³⁵⁾

「二ノ様式」は、「学童集団疎開冬期保健施設関調査」である。同調査は、集団疎開児童数、受入町村数、施設の種類、医師の現在数、受入無医町村数と無医町村に疎開した児童数などの項目にしたがって、都府県毎に記載することになっていた。趣旨説明では無医村に言及していないが、「学童集団疎開ノ冬期ニ於ケル保健施設ニ関スル件」は、無医村へ集団疎開した児童数を把握するための照会であった。なお、照会に対する回答は見当たらない。

文部省・厚生省は、引続き何らかの調査を行ったのであろう、「重田文書」には、2点の学

児童集団疎開先無医村調査が存在する。

その一つは、「疎開児童都府県別受入地無医村数其他ニ関スル調 一九・九・二六現在」⁽³⁶⁾である。本調査は、児童集団都疎開先府県毎の「無医村数」,「無医地トナリタル事由」,「診療医迄ノ至近距離」,「備考」からなる統計である。ただし、沖縄県集団疎開先県（大分・熊本・宮崎）は含まれていない。

同調査によれば、無医村は350ヵ村である。「無医地トナリタル事由」では、無医村350ヵ村中、「従前ヨリ」に254ヵ村、「死亡」に21ヵ村、「転居」に4ヵ村、「応召」に26ヵ村、「其他」に4ヵ村を区分してある（合計307ヵ村）。「診療医迄ノ至近距離」は、「十町以内」に33ヵ村、「半里以内」に56ヵ村、「一里以内」に151ヵ村、「二里以内」に64ヵ村、「二里以上」に9ヵ村を区分してある（合計329ヵ村）。なお、1町は109.09m、1里は3,927.2mである。「診療医迄ノ至近距離」は、無医村では近隣の医師を「当て」にするしかなかったことを示している。『朝日新聞』が報じたように「問題は宿舎から医師のゐる町までの交通」であった。宮城県・東京都については、無医村はそれぞれ5ヵ村・11ヵ村とある以外は空欄で、「備考」には「不詳」とある。

さらに一つは、「疎開児童都道府県別受入ニ関スル調 一九・一〇・二六現在」⁽³⁷⁾である。本調査は、児童集団疎開先都府県毎の「学校数」,「市町村数（有医、無医）」,「学童数（男、女、計）」,「教員数（男、女、計）」,「其ノ他附添員（養護訓導、寮母、其ノ他）」,「収容ノ状況（旅館、温泉旅館、寺院、道場、其ノ他）」,「其ノ他附添員（養護訓導、寮母、其ノ他）」,「現在診療ニ従事スル医師」に関する統計である。また、本調査によれば、1944年10月26日現在、35都府県1751市町村に集団疎開していた児童総数は35万4,937人、そのうち302,931人（85.34%）は有医市町村（1,400カ市町村）へ、52,006人（14.65%）は無医村（351ヵ村）へ疎開していた。しかし、「学童数（男、女、計）」,「教員数（男、女、計）」,「養護訓導」,「現在診療ニ従事スル医師」は空欄が目立ち、集団疎開先に無医村が含まれていた大阪府は空欄である。また、沖縄県集団疎開先県は熊本のみで大分・宮崎は含まれていない⁽³⁸⁾。

先述したように、1944年の無医村に関する統計と無医村における医療状況を示す資料は見当たらないので、ここでは無医村における医療の困難な状況を知る一助として、後に児童集団疎開先となる無医村の、1940年あるいは1942年当時の無医村の状況を、把握できた範囲で掲げることとする。○)には1944年に集団疎開した学校名を掲げた。

① 神奈川県中郡成瀬村（横須賀市前沼国民学校）

村長さんの話によれば、九つの部落からなっている人口二八四〇人のこの村に、たつた一度だけ、一度だけ医者が開業したことがあったが、それも五六年前のはなしで、そのひとは村出身のひとであつたが開業後まもなく亡くなり、それ以前にもそれ以後にも一人の医者さえ無かつたのだと言ふ。……疫痢や腸チフスの率も高いといふことも想い合されて、「でも、急に村に患者さんが出来たときはどうしてゆかれるのですか」と私共はきいたのであるが、隣り町の伊勢原のお医者さんが自動車で十分もかかれば駆けつけられるといふ答えであつた。喚びにゆくには、ときくと電話があると言ふ。電話は村にいくつあるかと言へば、役場にひとつだけあるとの答へ。夜の急病でも小使さんを起こして電話をかけることが出来るといふのである⁽³⁹⁾。

② 東京都南多摩郡川口村（東京都品川区鮫浜国民学校）

〔川口村〕東部に位せる犬目橋原区は八王子市に隣接し実質上無医村たるの不便少けれど、西部殊に山入区は全く交通途絶せる山間部落にして医療に恵まれざる所なり。直接病氣に対

しては売薬を使用し、其の価格年額二千円を下らずとは村長の言なり⁽⁴⁰⁾。

③ 東京都西多摩郡檜原村（東京都品川区城南国民学校）

村役場の所在地たる本宿は週一回の出張診療所あれども、余等の診療所を設置せる地区小澤並びに其の周囲は交通の便全くなく医療の恩恵に浴せざる地域なり。

④ 神奈川県津久井郡佐野川村（川崎市中原国民学校）

最も近い医師より里余、その間坂を登り、峠を越えて一・五・三・〇時間、医師を迎えるのに五十三円の往診料を要し、急を要する患者は窮屈な山駕籠に乗るか、戸板に乗せて〔山梨県北都留郡〕上野原まで担つて行く。斯る程度でないものは富山の売薬を各戸に備えてありそれで間に合わせる。

⑤ 神奈川県中郡北秦野村（横浜市滝頭国民学校）

北秦野村は四年前迄医師が存生してゐた所であり、また秦野町の日赤診療所迄徒歩一時間余である。村には助産婦が一人居るけれ共、初産、難産の時以外は余り頼まず隣近所の慣れた婦人が助産婦の役をすると云ふことである。

⑥ 群馬県利根郡池田村（東京都板橋区板橋第一国民学校）

発地新田に診療所の設備はあるが医師の在住者が無い為め、何の役にもたつて居ない。疾病の際は最も近い所で八キロを距つ沼田町から医師を迎へるの外ない。此際に要する費用は三円五十銭乃至五円の外、自動車代として五円乃至八円を要するから、一回十円以上で冬期には其倍額を必要とする。場所に依りては更に以上の費用を要する許りでなく、容易に往診をして呉れない。朝依頼して夕方に来ればよい方で翌日になることも少くない。

⑦ 山梨県南都留郡中野村（東京都麹町区富士見国民学校）

交通は富士吉田町迄十二軒（バスにて四〇分）を要す。医療は吉田町の医師に負ふ所大にして、往診を依頼すると交通費を合せて一回三十円乃至五十円を要す。

⑧ 奈良県磯城郡多武峰村（大阪市東成区今里国民学校）

〔産婆は2名在住〕

⑨ 大阪府南河内郡千早村（大阪市東住吉区田辺国民学校）

村役場には簡単な診察設備があつて、大阪府立富田林保健所から週に一回保健技師が出張し、村民児童の診療、健康相談に当つて居る。学童のマンツ－氏法反応〔ツベルクリン検査〕は年に一回之を行ひ、学童には寄生虫検査を行ひ、学童には毎月一度、海人草煎を与へ、家庭に於て定期的に十二指腸虫保持者には駆除を行ひ、保健問題等に関しては従来より無医村としては相当なる処置を行つて居るものである。然しながら夜間特に急患の場合は矢張り無医村としての不便を甘受している。

⑩ 大阪府南河内郡東條村（大阪市東住吉区南田辺国民学校）

千早村の西北に位置する隣接村であつて南北一里の細長い村である。佐備、龍泉、甘南備の三字がある。最南端の甘南備から村を縦貫して『バス』が通じ、大鉄沿線〔大阪鉄道〕の龍谷不動駅に出る。交通は比較的便利であるが、全くの無医村であつて、千早村同様に医療方面は富田林、長野町に依存する。

ところで、牛込区鶴巻国民学校から無医村である福島県安達郡岳下村岳温泉へ集団疎開した経緯は、多少明らかになるので、関連する資料を掲げておく。

『新宿区教育百年史』（東京都新宿区教育委員会編・発行、1976年）は、「鶴巻国民学校では、

後援会長が保護者の意見をまとめ、縁をたどって福島県嶽温泉に出向き、旅館組合長と面談のうえ交渉し、疎開学童の受入れ受諾に成功した。牛込区当局はそれを後援することになり、区内の希望者も収容することにし、鶴巻国民学校児童を主体とした学童疎開を、六月一七日に出発させた。しかし、八月一四日以降集団疎開は学校ごとに寮が割当てられた。このため嶽温泉寮は牛込区に割当てられ、改めて鶴巻国民学校の集団疎開寮となった。けれども、それまでの区内各学校から数名ずつの児童はそのまゝ継続収容することになった⁽⁴¹⁾と述べている。

1944年3月14日付「秘 疎開施設調」には「高原学園」（神奈川県足柄下郡仙石原村、牛込区教育会所有）、5月18日付「疎開学園教職員傭員調」には疎開学園名称欄に「嶽」、5月31日付「都立飯坂戦時疎開学園調書」に、福島県信夫郡飯坂町湯野町旅館に300人を分宿させる旨の記載、6月9日付「東京都国民学校戦時疎開学園設置予定調」の牛込区欄には「鍊成道場」（福島県飯坂町、牛込区教育会所有）とあり、経緯は未詳だが牛込区戦時疎開学園開設には紆余曲折があったのであろう⁽⁴²⁾。

そして、1944年6月7日、牛込区長の「開設方斡旋」要請を受けた福島県知事が、岳戦時疎開学園は、「適地調査ノ結果管下安達郡岳下村岳温泉ヲ最適地ト認メ学園開設ヲ地元当事者ニ命ジ決定致シ候……学園開設ニ関シテハ岳下村長並ニ岳温泉組合長ト協議相成様牛込区長ニ示達相成度」と、東京都長官に回答した⁽⁴³⁾。

東京都教育局長が1944年6月30日付福島県知事宛礼状で、「実地調査、関係方面との打合せも至極順調に進捗諸般の準備を了へ去る十七日第一陣として六十余名出発開園の運びと相成候、尚近日中に更に約百四十名収容の見込に有之候」と述べていた⁽⁴⁴⁾。

「区内の希望者も収容することにし、鶴巻国民学校児童を主体とした学童疎開」（『新宿区教育百年史』）とは、都立牛込区戦時疎開学園のことである。

東京都視学官野口彰は、1944年6月28日付東京都長官宛「復命書」（東京都立牛込区岳戦時疎開学園視察報告書）において、「牛込区内十一校ヨリ選定セラレタル一七四名ノ児童ヲ扇屋外六旅館ニ分宿セシメ少年団組織ニヨリ旅館名ヲ冠シテ扇分団ノ如ク夫々呼称ス、但学習ノ際ハ学年組織ニヨリ、比較的広間ヲ開放シタル旅館ニ分レテ集合ノ上指導ヲ受ク」と述べたうえで、岳下村が無医村であることへの危惧を記している。

医療施設ニ付テハ将来大イニ考慮ヲ要ス、即チ嶽下村ハ無医村ニシテ約三里隔リタル二本松ニ嘱託医ヲ設クル外ナク、学園トノ交通並ニ通信連絡ニツキ急速ニ施設スベキ事項少ナカラズ、コノ点ニツキテハ県及二本松警察当局ニ於テ考慮中ナリ、但冬季交通機関ノ停止期間中ニ於ケル医療施設ニ付テハ特ニ研究ヲ要ス

野口彰は、「所見」でも「無医村ニ疎開学園ヲ設置スル場合ノ医療施設、嘱託医設置等ニツキテハ特ニ考慮ヲ払フ要アリ、要スレバ医学生或ハ女子医学生ノ勤労働員ヲ当局ニ申請スルモ可ナルコト、又ハ同地ニ設ケアル健民修練所ニ常置医ヲ嘱託シソノ経費ノ一半ヲ都ニ於テ負担スル等ノ方法モ研究ニ値ス」と医学生・医師の常住を求めた。

「復命書」は、福島県内政部長・経済部長・教学課長・地方課長・経済部総務課長・警防課長（疎開主管課長）・経済部配給課長等と戦時疎開学園運営協力方について懇談した際に、内政部長・教学課長は、「疎開学園ノ冬季経営ハ如何ニスルカ、暖房・医療施設等ニ於テ頗ル困難ナ事情ニアル」と述べたと記している⁽⁴⁵⁾。

「困難な事情」を打開するための措置の有無を示す資料は見当たらない。牛込区が岳戦時疎開学園を学童集団疎開先に充てた1944年8月以降に、「復命書」が指摘した諸点が改善されたかどうかは未詳である。

「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」が、「医師看護婦ノ嘱託等ニ付地元ニ於テモ協力スルコト」と定め、文部・厚生両省が、日本医師会長・日本歯科医師会長宛に、「極力」応じるよう要請した疎開学寮嘱託医師の全国的配置状況は未詳だが、大阪市については以下のような事実を確認できる。

経緯を詳らかにし得ないが、大阪市は、東京都と同様に集団疎開先府県・医師会に協力を要請したのであろう、大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」に「嘱託医」あるいは「寮医」の記載欄がある。これによれば、68学寮の「寮医」欄には「空欄」、「なし」、「無医村のため未定」、「選定中」、「無」、「未定」、「交渉中」、「県医師会より最近に指示ある筈」などとあったが、1,660の学寮に嘱託医715人を配していた。1学寮に1人の事例もあるが、ほとんどの医師に複数の学寮を割当てていた⁽⁴⁶⁾。

他方で、島根県内政部長は、1944年10月16日付「集団疎開児童保健担当医委嘱方ノ件」を送付し、大阪市長宛に、「貴市国民学校中本県下へ集団疎開セル児童ノ保健衛生ヲ担当スル医師ヲ決定シ保健指導ハ勿論医療ノ万全ヲ期スベク之ガ人選ヲ行ヒタル結果各市町村疎開学童収容所ノ担当医師別紙ノ通ニ有之候条担当医委嘱方御取計相煩度此段依頼候也」と、委嘱手続きを行うよう求めた。別紙「集団疎開児童保健担当医師調 昭和一九・一〇 島医」には、市町村別の「収容ヶ所数」と医師名を記載してある⁽⁴⁷⁾。「島医」は島根県医師会の略記である。

「堀江国民学校疎開現地寮舎」（大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」）には、同校疎開先である島根県簸川郡莊原村（5学寮）・直江村（1学寮）・伊波野村（2学寮）の「寮医」欄には「県医師会にて銓衡中」、「未定」⁽⁴⁸⁾とあるが、「集団疎開児童保健担当医師調 昭和一九・一〇 島医」の莊原村「医師名」欄には永松蔵十郎・吉岡亮、同様に直江村には高田令造、伊波野村には梶谷吉郎と記載してある⁽⁴⁹⁾。大阪시가嘱託医を委嘱した時期は特定し難いものの、「大阪市堀江国民学校疎開地（島根県） 昭和二十年五月十五日調」（「昭和二十年五月十五日 学童集団疎開地一覧 大阪市教育局」）の「嘱託医」欄には「五名」とある⁽⁵⁰⁾。

聖和・五條・真田山国民学校「現地寮舎」（奈良県吉野郡吉野町）（大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」）では「寮医」欄は「なし」か空白である⁽⁵¹⁾が、1944年10月26日付大阪市長宛奈良県医師会長「集団疎開学童並ニ職員等ニ対スル嘱託医任命ニ関スル内申」添付名簿には、「嘱託内申医」として吉野町在住西村順蔵の名が載っている⁽⁵²⁾。ところが、「昭和二十年五月十五日 学童集団疎開地一覧 大阪市教育局」では上記3校には嘱託医は配置されていない⁽⁵³⁾。島根・奈良両県から大阪市長に宛てた文書は、大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」における嘱託医の配置が確定的ではないことを示している。

無医村近隣在住医師の診療活動の事例として、宮城県荊田郡小原村へ集団疎開した東京都浅草区新堀国民学校引率教員野口茂夫の回想をあげておく。

疎開地は白石から二里半の小原村。当時は無医村でした。しかし、十二月から二月までバスもトラックも通らないという話でした。が、実際は話以上で、十一月になると、雪が毎日降り、根雪は三月までとけませんでした。そういった自然の厳しい環境にもかかわらず、一週間に一ぺん、必ず藤本（純二）先生はお見えになりました。前もって、「今日は

行くぞ」という電話があって、長靴を荒なわでそれぞれ二ヶ所むすび滑らないようにして歩いて来られました。それはやさしいお医者さんで、「今日はどこが痛い？」って、子供に聞くんです。藤本先生は酒の好きな方で、診察が終ると、桂屋のおばんちゃんはよく心得た人で、「先生！すんだら、こっちゃこい」といって炬燵たで酒をもてなしました。先生は、その晩は桂屋にとまり、翌朝かえって行かれました。あるとき、保健婦が診たところ、盲腸らしいという急患のときも、電話をかけると、先生は他の用事を断って提灯をぶら下げて、二里半の道を急いでやってこられました。戦争の嵐のなかで、このようにヒューマニズムあふれる佳話があったことを、平和な今、忘れられません⁽⁵⁴⁾。

これは、先述した「毎週一回嘱託医ヲ出張セシメテ健康診断並ニ治療ヲ行フコト」、もしくは「嘱託医以外ノ一般医師ニ対シテモ疎開学童ノ保健医療ニ特ニ協力セラルル様徹底セシムル為ニ医師会支部長会議ヲ開催シ県医師会長ヨリ其ノ旨ヲ指示スルコト」（宮城県医師会「集団疎開学童保健確保ニ就テ」）の具体例である。「集団疎開学童保健確保ニ就テ」を知らなかったであろう、野口茂夫は「佳話」とであると述べている。

大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」によれば、養護教諭配置集団疎開先は、東淀川区大隅国民学校（大阪府三島郡見山村勸農農場、衛生婦2人）、東住吉区喜連国民学校（島根県邑智郡出羽村羽住屋旅館、衛生婦1人）、浪速区敷津国民学校（滋賀県甲賀郡水口町6学寮、衛生婦1人）、西区明治国民学校（島根県簸川郡平田町妙寿寺、養護訓導1）である⁽⁵⁵⁾。養護教諭としての任にあたったのであろう、敷津国民学校では6学寮のいずれにも属していない。他は寮母の任に就いていた。これらに後述する東住吉区田辺国民学校（大阪府南河内郡長野町・天見村・千早村、6学寮）の森本政子を加えても、数えてわずかに6人である。

無医村への集団疎開を余儀なくされた結果、いかなる事態が出来たであろうか。

1944年11月21日付『毎日新聞』（茨城県版）は、東京都中野区北原国民学校5・6年生200人が疎開していた福島県岩城郡江名町大字上神白では、「一月程前に六年生の女の子が急性腎臓炎で死亡したため父兄の間に総引揚げとまで騒いだこともある」と報じている。

東京都では、疎開先を無医村から移転しようとした事例がある。

1944年11月7日に東京都教育局が作成した「学童集団疎開宿舎移転計画案」は、「学校経営上甚シキ困難アリト認メラル、左記地域ノ宿舎ハ其ノ一部又ハ全部ヲ他ニ移転シ以テ食料、燃料等生活必需物資ノ確保、保健衛生対策、特に冬季対策上遺憾無キヲ期」し、宿舎移転を11月中に完了することとした。同じく東京都が作成した「移転又ハ分宿ヲ要スル疎開学寮調（二）」では、移転対象学寮は569ヶ所、児童数は3万9,653人であった。そのうち荒川区から296人が4学寮に疎開していた福島県信夫郡庭坂村高湯温泉は、「交通途絶、無医村、飯坂温泉ニ十一月一日移転決定」、杉並区新泉国民学校から110人が1旅館2学寮に疎開していた長野県北佐久郡大里村は「交通途絶、無医村、要移転又ハ分宿」と、移転理由に無医村を挙げている⁽⁵⁶⁾。福島県信夫郡庭坂村からは計画通りに移転したのであろう、「市町村別学寮調（昭和20年6月末現在）」に庭坂村は載っていない。長野県北佐久郡大里村の場合には、杉並区新泉国民学校から123人が同村の1旅館に疎開している旨記載がある⁽⁵⁷⁾。移転あるいは分宿は実現しないまま推移したのであろう。

大阪市東住吉区田辺国民学校児童416人の疎開先となった大阪府南河内郡千早村（6学寮）に、大阪市の「寮医」（嘱託医）を配した。古川権蔵に3学寮、小柴竹虎に1学寮を担当させるこ

としたが、千早第一寮（西恩寺，児童54人）・千早第二寮（天理教千早分教会，児童35人）には「寮医」配置はかなわなかった⁽⁵⁸⁾。1945年5月15日現在では，疎開児童は505人（9学寮）に増加したが，嘱託医は従前同様2名であった。千早第一寮・千早第二寮は，依然嘱託医を欠いたままの状態にあったとの推測は許されるだろう⁽⁵⁹⁾。

田辺国民学校養護教諭森本政子が記録した「養護日誌」から，1945年4月に急性盲腸炎（虫垂炎）に罹った千早第二寮児童に関する記録を摘記しよう。児童氏名はイニシャルとした。なお，森本政子の勤務先を□に記した。

◇4月18日〔千早第二寮〕A.S 2・3日以前ヨリ床ニツイテキルトイルトノ事ニ付キテ見ルモ症状等ヲ視察シテ急性盲腸炎ノ様ニ想ワレルヲ以テ患部冷罨法施シ，疼痛激シキヲ以テ鎮痛剤服用セシメ……午前1時頃ロンチリン2cc 2本静脈内ニ注射シオムニン2cc下熱ノ意味テ注射施行スル

◇4月19日〔千早第二寮〕午前6時50分ノバスニテ長野ニ下リ三日市ノ古川医師宅訪問，A.Sの容態ヲ話シ往診シテ戴ク様ニ取計フ……

古川医師雨激シキ為ニ往診出来ヌト電話アリ向井訓導ニA.Sノ保護者呼ビニ行ツテ戴ク

〔天見寮・汐ノ宮寮での勤務を経て〕午後5時ノバスニテ千早寮ニ移動勤務シA.Sノ処置シ，西恩寺寮宿泊スル

◇4月20日〔千早第二寮〕午前十時頃古川医師往診シテ下サル

六年男子A.S診察ノ結果急性盲腸炎ナリ

患部冷罨法施行 アクチゾール5cc注射 20%の葡萄糖 ビタミンB₂注射施行

約1ヵ月安静ニセヨトノ事タリ

◇4月21日〔千早第二寮〕六年男子A.S 患部冷罨法三時間毎ニ施行スル

保護者，看護シテ下サル アクチゾール5cc注射 20%の葡萄糖，ビタミンB₂注射施行，疼痛時々激シキヲ以テオピスタチン朝夕2回2cc注射施行

◇4月22日〔千早第二寮〕六年男子A.S，経過良好ナリ前日ヨリヤ、疼痛オサマリ朝一回オピスタチン2cc注射施行スル 患部冷罨法三時間毎ニ施行スル

保護者一日中看護シテ下サル アクチゾール5cc注射 20%ノ葡萄糖，ビタミンB₂注射施行

◇4月23日〔千早第二寮〕六年男子A.S，経過良好

患部冷罨法施行 アクチゾール5cc注射 20%ノ葡萄糖 ビタミンB₂注射施行 オピスタチン2cc注射ス

◇4月24日〔千早第二寮〕六年男子A.S 本日疼痛殆ンドナク，粥食卵黄1個 百合根ヲ食ベサス 患部冷罨法施行 アクチゾール5cc注射 20%ノ葡萄糖 ビタミンB₂注射施行

◇4月27日〔千早第二寮〕六年男子A.S 其ノ後ノ経過状況良好ニシテ粥食ニナリ 副食物モ，馬鈴薯，卵黄等与エル 20%ノ葡萄糖ビタミンBC注射施行

◇5月7日〔田辺国民学校〕六年A.S千早寮ヨリ急性盲腸炎ノ為養生ニ帰宅シテキルヲ以テ家庭訪問ス

38度以上発熱シテ居リ東先生ノ診察ヲ受ケテキラレル

◇5月8日〔田辺国民学校〕六年A.S千早寮ヨリ急性盲腸炎ノ為養生ニ帰宅シテキルヲ以テ家庭訪問ノ上御見舞スル

経過良好ナリ

◇ 5月10日 〔天見寮・田辺国民学校〕午後7時本校ニ帰ッテ雑務ス

A.S宅訪問 経過良好ナリビタミンBC注射ス⁽⁶⁰⁾

森本政子は、1945年4月18日にA.Sの虫垂炎発症を疑い、冷罨法を施し、解熱剤・葡萄糖液・ビタミン剤・鎮痛剤を注射した。南河内郡三日市村に住む医師古川権蔵に依頼した往診は、悪天候のためにならず、A.Sの保護者を呼び寄せて看護に当たらせた。医師が千早第二寮に到着したのは、発症から数日を経た4月20日であった。A.Sを帰宅させた日は記載がないが、森本政子は見舞い旁々患児宅を訪問して症状を確認し、ビタミン剤を注射している。「経過良好」と記した5月10日以降に患児への言及は見当たらない。

森本政子は、疾病と治療方法を判断して実行し、医者を訪問して往診を依頼し、家族を呼び寄せる手配も行い、帰宅後の患児を見舞ってもある。

とはいえ、A.Sとその家族・引率教員は、千早村に暮らす人々と同様に「夜間特に急患の場合は矢張り無医村としての不便を甘受」(『昭和十七年度 医学徒報国隊 農村班報告』)したのである。

2. 女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村動員計画

東京女子医専生徒は、1943年7月21～31日に、「陸軍省大臣官房祭典係事務室に於て、大東亜戦争並びに支那事変に関し死歿せる軍人軍属等の靖国神社の合祀手続事務手続の補助」⁽⁶¹⁾に従事している。

帝国女子医専では、1943年7月1日～9月6日の「行事予定」(「昭和十八年四月 学校日誌 帝国女子医学薬学専門学校」)に、1943年8月8日に「医学科勤労作業始マル」、8月23日に「医学科第二学期授業開始」とあり、次のように記している。

八月中

◇勤労協力出勤先

各学年、二週づゝ各方面に出勤

大いに協力の実を挙げた。

出勤先次の通り。

下谷	} 凸版印刷株式会社。
板橋	
小石川	

陸軍省大臣官房

三共製薬株式会社

宮城前御苑整備

蒲田、大森、警防団液型検査(2万人)

……

十一月十二^マ、三^マ、十九、二十日

医四の中五十名 陸軍第一造兵廠にて一万名に対し、マントウ氏反応〔ツベルクリン検査〕の検査に出向く。奥谷助教授、谷治助手指導。

成績よろしく更にBCG予防接種の皮下注射をたのまれ二十名あまり来週出向の筈⁽⁶²⁾。

帝国女子医学薬学専門学校「昭和十九年度 日誌 教庶務課」から、勤労働員関係記事を摘記しておく。

四月六日（火）

◇医学科教授懇談会

1. 通年動員の件

出動命令割当ハ未到着なるも、将来高学年ハ通年動員さるゝ事となるにつき研究所、日赤、軍病院等に出動したい。

額田本部長より説明あり。

（7月）十二日

理二 日立航空機株式会社羽田機体製作所出動壮行式（後二時ヨリ）

（7月）二十一日

全

全前出動 十三日－十六日－二十一日ト延ビニナツテ出動、会社ノ機構変動ノタメ

（7月）二十四日 薬三 三共製薬所午前十時二十五分

（7月）二十五日 全前出動⁽⁶³⁾

「将来高学年ハ通年動員さるゝ事となるにつき研究所、日赤、軍病院等に出動したい」とは、「遠からず軍需工場などへの通年動員を命ぜられるのであれば、せめて医療に関係する機関への動員を望んでいる」との謂である。

学童集団疎開先無医村への動員は、1943年以降の勤労働員の一形態である。

以下ではその経緯をたどる。

岡田信六（東京都教育局技師）は、「東京都学童集団疎開と保健対策」（『日本医事新報』（1145号，1944年9月16日）において、「集団疎开学童保健対策として現在までに執り来たつた処と、併せてこれよりの計画並希望を项目的に記」すと、「無医地域における対策」に以下の諸点をあげて、医師会の協力を求めた。

（イ）県医師会巡回診療班の強化

県医師会の無医村診療班組織を一層強化して少なくとも月二回以上疎开学寮に対し巡回診療並指導を実施願ひたい。

（ロ）県医師会隣組制度の活用

前項巡回診療班の巡回日以外の日に発生せる無医村学寮の事故に際し、最寄りの医師会隣組より直に応援し得る方法を定め、学寮と聯絡をとり置かれたい。

(ハ) 官公私立医療施設の協力

保健所、健康相談所、或は日本医療団所管施設の如き各種の団体施設の協力を仰ぎ、医師、保健婦等の派遣応援方を切望し期待している。

(ニ) 養護訓導・養護婦の重点的配置

都内三十五区の養護訓導、養護婦を其の所属校に拘泥せず重点的に無医地区に配置せしむる様考中である。

(ホ) 女子医学専門学校生徒の動員

以上の措置によつても尚医療施設に完璧を期し難い場合を考慮し、女子医学専門学校の高学年を動員し診療補助員として配置せしめ得るやう、文部当局の御配慮を得べく目下申請してある⁽⁶⁴⁾。

東京都は、女子医専生徒を学童集団疎開先（無医村）へ動員するよう、文部省に申請しているというのである。

「重田文書」中の「疎开学童医療衛生対策協議会懇談事項 昭和十九年九月十七日」には、「二、将来措置すべき事項」として「(6) 上級医学徒ノ動員」なる項目がある。そこには、「教養ヲ生カス一環」、「補助者」、「適当ナ指導者（勤労学生ト絡ンデ考ヘル）」と鉛筆による書込がある。「上級医学徒」は大学医学部・医学専門部・医学専門学校の高学年、「勤労学生ト絡ンデ考ヘル」は「学生の勤労働員と同様に」との謂であろう。さらに余白には、「一、疎开学童ノ無医村（都）約二〇〇位、密集地帯（一千人以上）二五ヶ所。都デハ常駐サセタイ」、「一、学徒動員ハ職員モチケテヤレル。一月位ヤリ一週間ニ一度先生ガ出カケル、区域的ニ責任ヲ持タセル」との書込がある⁽⁶⁵⁾。

疎开学童医療衛生対策協議会は、厚生省が「疎开学童ノ医療衛生ノ連絡緊密化ヲ図リ以テ其ノ完璧ヲ期スル」ことを目的に設置した。委員長は厚生次官、副委員長は衛生局長である。委員は厚生省健民局長・保健局長・技監・官房総務課長、文部省国民教育局長・体育局長、防空本部総務局長、東京都教育局長・民生局長、日本医師会長、日本歯科医師会長、医薬品統制株式会社社長、家庭薬統制株式会社社長である⁽⁶⁶⁾。

「女子医学専門学校生徒の動員」（岡田信六）との文言こそ用いていないが、疎开学童医療衛生対策協議会においては、「医学徒」を「適当ナ指導者」のもとで、医師の「補助者」として学童集団疎開先（無医村）へ動員する方策を検討した。

一方で、東京都は1944年9月18日、教職員・児童を慰問激励し、地元関係者に謝意を表すために、学童集団疎開現地視察官の派遣を決定した。視察官には、10月10日までに報告を求めた。調査項目には、宿舎・教育設備、食糧・燃料事情、児童生活・職雇員・地元の協力状況とともに、「有医村、無医村ノ別」、「有医村ナルモ間ニ合ヒ居レルヤ」、「無医村ナルトキハ其ノ対策」も含まれていた⁽⁶⁷⁾。この調査は、疎开学童医療衛生対策協議会の動静と無縁ではない。

文部省は、上記疎开学童医療衛生対策協議会直後の1944年9月20日、「㊦ 集団疎开学童ニ対スル保健指導関係学徒ノ動員要領（案）（昭和一九・九・二〇）」（文部省用紙）を作成した。以下はその全文である。

㊟ 集団疎开学童ニ対スル保健指導関係学徒ノ動員要領（案）（昭和一九・九・二〇）

一、方針

学童集団疎開地ニ於テ主トシテ保健指導救急看護等ノ作業ニ従事セシムルタメ学徒ヲ動員セントスル

二、要領

甲、女子医学専門学校学徒

（一）組織

教職員及高学年生徒ヲ以テ組織ス

（二）作業

無医村，多数（概ネ千人以上）ノ学童密集シテ集団疎開セル為医師ノ不足ヲ来セル町村等ノ所謂無医地域ニ生徒ヲ班別ニ教職員ノ指導監督ノ下ニ一定期間（原則トシテ一ヶ所一ヶ月間）駐在セシメ保健指導ニ従事セシム

（三）部班ノ編成

部長 一名（教授ヲ以テ之ニ充ツ）

班長 若干名（教授，助教授，講師，助手等ヲ以テ之ニ充ツ）

班員 六名乃至八名（生徒）

但シ二名ヲ以テ一組トシ同寮舎ニ出動スルモノトス

（四）作業ニ必要ナル資材

医薬品，衛生材料，医療衛生用品ニ関シテハ受入側地方庁等ニ於テ斡旋スルモノトス

（五）本作業ニ要スル経費

疎開側都府県ニ於テ支弁スルモノトス

（六）備考

本動員ハ受入側府県ノ申請ニ基キ疎開側府県ト協議ノ上文部省ニ於テ出動先ヲ決定スルモノトス

参考	女子医学専門学校生徒（最高学年）数	四九四人
	（内訳）東京女子医学専門学校	一七〇人
	帝国女子医学薬学専門学校医学科	一五一人
	大阪女子高等医学専門学校	一七三人

乙、女子専門学校学徒

（一）組織

主トシテ家政科系女子専門学校ノ教職員及低学年生徒ヲ以テ組織ス

（二）作業

疎開先宿舎ニ於テ生徒ヲシテ一定期間（原則トシテ一ヶ所一ヶ月間）宿泊シテ教職員ノ指導監督ノ下ニ保健指導ノ臨地訓練ヲ行ハシム

（三）部班ノ編成

部班ノ編成ハ甲ニ準ジテ之ヲ行フ

（四）作業ニ必要ナル資材

保健指導ニ要スル資材ニ関シテハ受入側地方庁等ニ於テ斡旋スルモノトス

(五) 本作業ニ要スル経費

疎開側都府県ニ於テ支弁スルモノトス

(六) 備考

本動員ハ受入側府県ノ申請ニ基キ疎開側都府県ト協議ノ上文部省ニ於テ出動先ヲ決定スルモノトス

参考 家政系私立女子専門学校第一学年生徒調

東京	十三校	四,〇五七人	大阪	四校	五九四人
神奈川	一校	六六人	兵庫	一校	二二〇人
愛知	三校	五三四人	岡山	一校	八〇人
京都	三校	四五三人	広島	一校	八〇人
計				六,〇八四人	

尚女子高等師範学校, 師範学校女子部, 公立家政科系女子専門学校ニ付テハ該当生徒数調査中⁽⁶⁸⁾

女子医専教授を責任者とし, 若干名の教員と6~8人の生徒を, 無医村あるいは疎開児童多数のために医師不足をきたした地域に, 1ヶ月間駐在させて「保健指導ニ従事セシム」との計画である。

その後の経緯は未詳だが, 1944年11月5日, 文部省・厚生省は各地方長官・警視總監・各地方行政協議会長・各女子医学専門学校長宛に通牒「女子医学徒勤労働員要領ニ関スル件」を發した。以下にその全文を掲げる。

女子医学徒勤労働員要領ニ関スル件

今般学童集団疎開ニ関スル冬季対策ノ一環トシテ女子医学徒ヲ医療業務ニ動員シ集団疎开学童ノ診療ノ補助並ニ健康指導ニ従事セシムルコトトシ不取敢東京都及神奈川県関係学童疎開地ニ対シ実施致スコト相成タルニ付テハ左記要領御了知ノ上右措置ヲ必要トスル向ニ在リテハ本省ニ御協議ノ上実施相成度

女子医学徒勤労働員要領

- 一, 集団疎开学童ノ診療ノ補助並ニ健康指導ニ関スル業務ニ従事セシムル為本要領ニ依リ女子医学専門学校第二学年以上ノ学徒ヲ動員ス
- 二, 女子医学徒ヲ動員スベキ期間ハ一年ヲ通ジ六十日以内トス
- 三, 本動員実施方法ハ当該学校ノ学校報国隊ノ特技隊トシテ学徒医療隊ヲ編成セシメ予メ選択セル学童疎開地ニ之ヲ派遣スルモノトス
- 四, 学徒医療隊ヲ派遣スベキ疎開地ハ予メ文部, 厚生両省ニ於テ協議ノ上当該地ニ於ケル医療施設ノ有無, 医療隊派遣ノ緊要性等ヲ勘案シ之ヲ選択ス
- 五, 学徒医療隊ノ編成ハ一隊ノ人員ヲ二名トシ出来得ル限り適当ナル派遣責任教職員ヲ附ス
- 六, 学徒医療隊ノ派遣ニ関シテハ予メ当該疎開地府県ト緊密ナル連絡ヲ取り当該疎開地ノ囑託医ニ協力シテ作業ニ従事セシムルモノトス
- 七, 本動員ノ実施ニ付テハ当該学校長ヲシテ受入側ト協議ノ上教育ノ計画的実施ニ支障ヲ来サザル限度ニ於テ具体的ニ学徒医療隊派遣計画ヲ作成セシメ文部大臣ハ右具体的計画

ニ基キ学徒勤労令ニ依ル出動ヲ命ズルモノトス

八、医療隊ノ作業ニ対スル報償其他本要領ニ規定ナキ事項ニ関シテハ「工場事業場等学徒勤労働員受入側措置要綱」「工場事業場等学徒勤労働員学校側措置要綱」及「工場事業場学徒勤労働員ノ報償等取扱細目」ヲ適用又ハ準用ス

備考 本要領ニ依ル女子医学徒ノ動員ハ差当り東京都及神奈川県ノ学童疎開地ニ付昭和十九年十一月ヨリ昭和二十年二月末マデノ期間ヲ日途トシテ之ヲ実施ス

参考

東京都及神奈川県学童疎開地ニ対スル学徒医療隊派遣計画

一、学徒医療隊ヲ派遣スベキ疎開地ハ東京都及神奈川県関係ヲ合せ概ネ五〇ヶ所トシ東京女子医専学校報国隊及帝国女子医薬専学校報国隊ニ於テ各二五ヶ所宛ヲ分担スルモノトス

二、学徒医療隊ヲ編成スベキ学徒ハ東京女子医専及帝国女子医薬専第三学年学徒各一五〇名宛合計三〇〇名トス

三、東京女子医専及帝国女子医薬専各学校報国隊ハ一班二五隊、一隊人員二名宛ノ学徒医療隊三班ヲ編成シー班二十日間宛交代シテ所定ノ疎開地ニ至リ業務ニ従事スルモノトスル

四、学徒医療隊ヲ派遣スベキ期間ハ昭和十九年十一月十日ヨリ昭和二十年二月末日迄ノ約四ヶ月間トス

五、各学校報国隊ノ派遣責任教職員ハ学徒医療隊派遣中ナルベク広汎ニ現地ニ於ケル巡回指導ニ当ルモノトス⁽⁶⁹⁾

文部・厚生両省は、東京女子医専・帝国女子医薬専生徒を、東京都・神奈川県からの学童集団疎開先無医村50ヶ所—1944年10月26日現在、東京都の集団疎開先中無医村は158カ所（児童数約2万8,600人）、同様に神奈川県のそれは23カ所（児童数約8,600人）であった—へ動員すべく、「女子医学徒勤労働員要領ニ関スル件」を定めた。

「学校報国隊ノ特技隊」は、「特技隊ハ時局ニ必要ナル特技ヲ有スル教職員及学生生徒ヲ以テ編成スルモノトス」（1941年8月8日付文部次官通牒「学校報国団ノ隊組織確立並其ノ活動ニ関スル件」）にもとづいている⁽⁷⁰⁾。学校報国隊は、「国家的要請ニ基ヅク各種ノ要務ニ服シ有効且敏速ナル活動ヲ為サシメン」ための、学校報国団の動員体制である。

女子医専「学徒医療隊」は2名で1隊、25隊で1班として3班を編成し、1班は動員期間20日毎に交代することとした。1944年11月10日～1945年2月28日は111日間であり、3班編成で2巡させる計画である。動員先は文部・厚生両省で協議し、「医療施設ノ有無、医療隊派遣ノ緊要性等ヲ勘案シ」て選択するとあった。動員先が無医村であることは、「医療施設ノ有無」に含意されている。

「本動員ノ実施ニ付テハ当該学校長ヲシテ受入側ト協議ノ上教育ノ計画的実施ニ支障ヲ来サザル限度ニ於テ具体的ニ学徒医療隊派遣計画ヲ作成セシメ文部大臣ハ右具体的計画ニ基キ学徒勤労令ニ依ル出動ヲ命ズルモノトス」とあるとおり、女子医専「学校報国隊」の動員は、学校長が受入側と協議して作成した具体案に従って文部大臣が命令することになっている。

「国家総動員法」第5条にもとづいた「学徒勤労令」（1944年8月23日、勅令第518号）は、その第6～9条に学徒報国隊動員手続を以下のように定めていた。

第六条 学校報国隊ニ依ル学徒勤勞ニ付其ノ出勤ヲ求メントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ文部大臣又ハ地方長官ニ之ヲ請求又ハ申請スベシ……

第七条 前条ノ規定ニ依ル請求又ハ申請ハ厚生大臣又ハ地方長官（東京都ニ在リテハ警視總監）ガ割当テタル人員ノ範囲内ニ於テ之ヲ為スモノトス但シ命令ヲ以テ定ムル特別ノ場合ニ於テハ此ノ限リニ在ラズ

第八条 文部大臣又ハ地方長官第六条ノ規定ニ依ル請求又ハ申請アリタルトキハ特別ノ事情アル場合ヲ除クノ外学校長ニ対シ学徒勤勞ヲ受クベキ者、作業ノ種類、学徒勤勞ヲ為スベキ場所及期間並ニ所要人数其ノ他必要ナル事項ヲ指定シテ学校報国隊ノ出勤ニ関シ必要ナル措置ヲ命ズルモノトス

第九条 前条ノ措置ヲ命ゼラレタル学校長ハ命令ノ定ムル所ニ依リ学校報国隊ニ依ル学徒勤勞ヲ為スベキ者ヲ選定シ其ノ選定アリタル旨ヲ本人ニ通知シ学徒勤勞ニ関シ必要ナル事項ヲ指示スベシ⁽⁷¹⁾

「学徒勤勞令施行規則」（1944年8月23日、文部・厚生・軍需省令第1号）第5条第2項は、「医療ニ関スル業務」に関連する専門学校・専門学科生徒を動員する場合には、「学徒勤勞令」第7条但書によって「文部大臣ノ割当テタル人員ノ範囲内」で措置することとしていた⁽⁷²⁾。

出勤を命じた「学徒医療隊」員への報償金は、「工場事業場等学徒勤勞動員受入側措置要綱」（1944年5月3日付地方長官学校長宛文部省総務局長厚生省勤勞局長軍需省総動員局長通牒）など3件の通牒にもとづき措置することとした。これらによれば、報償金は1人月50円で一括して学校報国隊に、学校報国隊（隊長は学校長）は授業料などを差し引いて生徒へ渡すことになる⁽⁷³⁾。

新聞各紙は1944年11月8日付で、「冬を迎へた学童疎開地へ女子医学徒の医療動員が行はれる。これは学童疎開問題の中心となつてゐる保健対策の一環」（『朝日新聞』）、「無医村や山間僻地など医療施設に恵まれない地方に集団疎開してゐる学童の保健のため」（『読売新聞』）、「厳冬時期を目前に控へ医療施設に恵まれない地方に集団疎開した学童の保健対策の一環として女子医学徒を動員して巡回医療、健康指導に当たらしめる」（『毎日新聞』）と、女子医専「学徒医療隊」を学童集団疎開先無医村へ動員すると報じた。いずれの報道も、先述した文部省・厚生省通牒「女子医学徒勤勞動員要領ニ関スル件」の概要であった。

『毎日新聞』は他紙と異なつて、通牒中の「東京都及神奈川県学童疎開地ニ対スル学徒医療隊派遣計画」のほぼ全文を報じ、東京女子医専・帝国女子医薬専「学徒医療隊」を動員する東京都国民学校42校の集団疎開先無医村42ヵ村（東京女子医専22ヵ村、帝国女子医薬専20ヵ所）の一覧を載せた。同記事は、「疎开学童の保健管理のための女子医学徒動員に都では左の四十二ヶ所に……派遣することになり東京女子医専及び帝国女子医薬専の両校に対し十七日午後学校で壮行式を挙る、万端の準備を整へる」と、「学徒勤勞令」による「学徒医療隊」動員を東京都の措置であるかのように述べている。両校における「壮行式」に関する資料は見当たらない。

3. 女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村への動員

「女子医学徒勤労働員要領」には、文部・厚生両省が「学徒医療隊」動員先を決定し、学校長は受入側と協議して学徒医療隊派遣計画を作成したうえで、文部大臣は「学徒勤労令」による出動を命じる、と定めていたことは先にみたとおりである。しかし、これら一連の動員にいたる手続きに関する資料は見当たらない。

加藤淑子は、「戦中日記抄」において、「〔1944年〕九月はじめより取沙汰されてゐた無医村の疎開学寮に交替で派遣される件は本決りになり、十月東京都より係官来校し種々説明」を行い、「医学徒配置要項並受入注意事項」、「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」、「帝国女子医学薬学専門学校学徒派遣場所」を配布したと記している。その後、東京女子医専においては「各学科のそれまでの系統的講義は一まず打ち切れ、現地向きの速成講義が行はれ、各自懸命にノートを取り「虎の巻」を作製した」という⁽⁷⁴⁾。

加藤淑子は、「戦中日記抄」を著した意図を、「東京及び帝国女子医専生が学童の集団疎開学寮に交替で派遣された事実は、東京都の公文書に必ず残っているものと信じ、調査に都立公文書館、都立図書館を訪れた。しかし学童疎開の記録、写真等は多々保存されているものの、我々の派遣記録は全く認められず、甚だ意外であった。公文書にも脱落した記録をこのような形で遺しておくことの必要を覚えた次第である」と記している⁽⁷⁵⁾。

以下に「医学徒配置要項並受入注意事項」全文を掲げる。

医学徒配置要項並受入注意事項

1 配置要項

- (1) 期間 昭和十九年十一月十日ヨリ昭和二十年二月末日マデ
- (2) 配置地 別表
- (3) 編成 女子医学専門学校生徒二名一隊トナシ三週間交替トシ疎開現地ニ派遣ス
- (4) 医学徒執務事項
 - イ.児童、職員健康検査
 - ロ.疾病異常児童ノ早期発見
 - ハ.伝染病予防措置並ニ監視
 - ニ.児童衛生訓練並ニ健康教育
 - ホ.疎開衛生指導並ニ調査
 - 寮舎設備衛生
 - 学童栄養、疲労、睡眠等
 - ヘ.簡易手当
 - 簡単ナル外科的処置（外傷、火傷、凍傷等）
 - 点眼、洗眼、視力検査
 - 点耳、耵聍除去、咽頭部薬液塗布
 - 軟膏類貼附、包帯交換
 - ト.応急看護
 - 強心剤・ビタミン剤ニ限ル注射
 - 解熱剤、健胃剤、ヒマシ油、腸内寄生虫駆除剤程度ノ投薬

其ノ他家庭医学的処置 温布, 吸入, 浣腸, 検温, 保温
 チ.学寮嘱託医補助並ニ聯絡
 リ.巡回指導医ノ指示事項実施
 ヌ.其ノ他学童疎開地衛生ニ関スル事項

(5) 医学徒指導機関

イ.学寮嘱託医
 ロ.医学徒在籍〔校欠カ〕教授其ノ他巡回指導者
 ハ.疎開地県並ニ東京都学童保健関係者

2 受入側注意事項

医学徒ヲ配置セラレタル学寮ニテハ受入ニ関シ, 左ノ事項ニ注意シ可及的ノ便宜ヲ講ズルモノトス

(1) 設備

イ.医学徒居室 (止ムヲ得ザル場合ハ診察室ト兼用ナルモ差支ヘナシ)
 ロ.寝具清潔ニシテ防寒充分ナルモノ⁽⁷⁶⁾

加藤淑子が「都側の注意の要点は、未だ医師の資格を取得前の身分を自覚して守備範囲を逸脱せぬように、に尽きた」⁽⁷⁷⁾と記したように、「医学徒配置要項並受入注意事項」は、「学徒医療隊」に「学寮嘱託医診療補助並ニ聯絡」の役割を課すと規定し、女子医専、学童疎開先などの対応も求めた。敢えて指摘するまでもなく、「職員健康検査」は「集団疎開学童ノ診察ノ補助並ニ健康指導ニ関スル業務」には含まれない。「簡易手当」の諸項目も「診療ノ補助」の域を超えている。

「配置地 別表」は、加藤淑子が、東京都が1944年10月の説明会で配付したと記している「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」,「帝国女子医学薬学専門学校学徒派遣場所」である。

東京女子医専「学徒医療隊」動員先一覧を記した資料は、管見の限り以下の4点が存在する。

①「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」(複写資料), 東京女子医科大学大学史料室所蔵。

学童集団疎開先県, 集団疎開学校所在区・国民学校名, 22ヵ所の学寮とその所在地(村名), 動員先までの交通機関・学寮への最寄駅の一覧表である⁽⁷⁸⁾。

②1944年10月8日付『毎日新聞』記事

「疎開学童巡回医療 女子医専生三百名が奉仕」と報じた記事中に, 22ヵ所の学校所在区・国民学校, 集団疎開先県・郡・村名を掲げている。

③「昭和十九年十一月七日 本科三年生集団疎開地ヘノ出動員 (第一班氏名及配置場所)」(複写資料), 東京女子医科大学大学史料室所蔵。

動員生徒氏名, 22ヵ所の集団疎開学校所在区・国民学校, 学寮(寺院など)とその所在地, 動員先までの交通機関・学寮への最寄駅の一覧表である⁽⁷⁹⁾。第一班(1944年11月11日~12月3日)の動員生徒名簿でもある。

『たんばば』(244~245頁)には,「昭和十九年十一月七日 本科三年生集団疎開地ヘノ出動員 (第一班氏名及配置場所)」と同一内容の「昭和十九年十一月七日 本科三年生集団疎開地ヘノ出動員 (一) (第一班氏名及配置場所)」が載っている。編集者は,「(一)」を付してタイトルが酷似している④と区別し, ④には(二)を付した可能性がある。

④「本科三年生集団疎開地へノ出動員（二） 第一班～第四班の出動期間」（『たんぽぽ』246～247頁）

22ヵ所の動員先（学寮所在地）、学寮（寺院など）、集団疎開国民学校、第一班（1944年11月11日～12月3日）、第二班（1944年12月2日～1944年12月24日）、第三班（1944年12月24日～1945年1月14日）、第四班（1945年1月14日～1月30日）毎の「学生氏名」が載っている。ただし、「学生氏名」欄には空欄があり、編集者は「この表の出動者名には実際の出動者と多少違っている場合があります。御諒承ください」と記している⁽⁸⁰⁾。

原資料の所在と「本科三年生集団疎開地へノ出動員（二） 第一班～第四班の出動期間」の作成経緯は未詳である。

いずれも動員先は22ヵ所である。また、②～④に記載してある動員先は同一であり、③④に記載してある第一班の動員先毎の出動生徒名も同一である。③④の作成時期は、①よりは後である。取り敢えず③④の記載内容にしたがって、東京女子医専「学徒医療隊」動員先一覧を、下記のように作成した。番号は便宜的に付した。事項は、動員先（学童集団疎開先）、学寮名（旅館・寺院など）、（東京都各区、集団疎開していた国民学校）の順である。

東京女子医学専門学校「学徒医療隊」動員先一覧

1. 茨城県久慈郡袋田村 長生閣（向島区、第一吾婦・向島中川）
2. 同 那珂郡神崎村 上宮寺（向島区、請地）
3. 同 新治郡斗利出村 法雲寺（京橋区、水上）
4. 群馬県群馬郡室田町榛名山町 吉本坊（王子区、岩渕）
5. 同 勢多郡黒保根村梨本鉾泉 了観寺（王子区、王子第一）
6. 栃木県那須郡佐久山町 明星院（本郷区、湯島）
7. 同 河内郡本郷村 満福寺（牛込区、早稲田）
8. 同 河内郡薬師寺村 満福寺（牛込区、早稲田）
9. 同 上都賀郡南摩村 勝願寺（牛込区、江戸川）
10. 同 芳賀郡須藤村 昌泉寺・長安寺（牛込区、山吹）
11. 同 足利郡三和村 山水楼（麻布区、筈）
12. 新潟県中頸城郡谷浜村 小林館（葛飾区、南綾瀬）
13. 同 中頸城郡名香山村 高田屋（葛飾区、本田）
14. 同 古志郡栖吉村 善照寺（世田谷区、松原）
15. 同 北蒲原郡菅谷村 会津屋（深川区、八名川）
16. 長野県東筑摩郡片丘村 企旅館（中野区、仲町）
17. 同 下高井郡豊郷村野沢温泉 常磐屋（足立区、千寿第二）
18. 同 小県郡青木村田沢温泉 たまり屋（豊島区、仰高北）
19. 同 東筑摩郡里山辺村湯原 寿美本旅館（世田谷区、三宿）
20. 富山県下新川郡内山村 宇奈月館（蒲田区、新宿）
21. 同 下新川郡大家庄村 光栄寺（蒲田区、西六郷）
22. 同 中新川郡三郷村水橋町 照蓮寺（荏原区、大間窪）

注1 ③④では

1. 茨城県久慈郡袋田村 長生寺
6. 栃木県那須郡佐久山町 明星寺

とあるが、「学童集団疎開先一覧表」（全国疎開学童連絡会編『学童疎開の記録』1，大空社，1994年）の記載にしたがって、それぞれ「長生閣」「明星院」と補正した。

注2 ③④では

「11.「栃木県足利郡三和村 山水楼」とあるが、①では「三和村診療所」とある。

注3 ①にあって、③④にない動員先は

富山県下新川郡宮崎村 明光寺（蒲田区，高島）
 福島県双葉郡広野村折木温泉 若松屋（中野区，上高田）
 である。

詳細は未詳だが，上記2カ所は「学徒医療隊」動員実行直前に

13. 新潟県中頸城郡名香山村 高田屋（葛飾区，本田）
21. 富山県下新川郡大庄村 光栄寺（蒲田区，西六郷）

へと変更されたと考えるほかない。

なお、「福島県双葉郡広野村折木温泉 若松屋（中野区，上高田）」は，後述する帝国女子医薬専「学徒医療隊」の動員先となっている。

文部省・厚生省は，東京女子医専生徒2人をもって1隊として22隊を編制し，東京都からの学童集団疎開先無医村22ヵ村へ，1944年11月11日～1945年1月末日までの間に4期（第1期は1944年11月11日～12月3日，第2期は1944年12月2日～12月24日，第3期は1944年12月24日～1945年1月14日，第4期は1945年1月14日～1月30日）にわたり，延べにして176人以上を動員した。

帝国女子医薬専においても，東京女子医専に対すると同様に説明会を開催し，「医学徒配置要項並受入注意事項」，「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」，「帝国女子医学薬学専門学校学徒派遣場所」を配布したのであろう。管見の限り，これらの資料は東邦大学額田記念東邦大学資料室には見当たらない。

帝国女子医薬専「学徒医療隊」動員先一覧は，20カ所の動員先を報じた1944年10月8日付『毎日新聞』記事が唯一の資料である。新聞報道は，加藤淑子が「帝国女子医専は千葉，埼玉，山梨，福島，宮城，山形，静岡各県下の二十学寮」⁽⁸¹⁾と記していることと符合している。同記事には神奈川県が含まれていないが，帝国女子医学薬学専門学校「昭和十九年度 日誌 教庶務課」（11月14日の条）では，下記のように教員の「附添出勤」（「学徒医療隊」引率）先に神奈川県も含まれていた。

11月14日（火）

医四 疎開学童附添出勤ノ件

11日—15日頃までに病院各部長

引率各地に出動

（出勤先）

↓

(千葉, 埼玉, 山梨, 福島, 山形, 宮城, 静岡, 神奈川)
50名ずつ三週間交代にて⁽⁸²⁾

また、「医専・疎开学童診療班を24ヵ所の無医村に2名ずつ派遣」(『東邦大学70年史』)との記述に従えば、帝国女子医薬専の動員先は24ヵ所となる。

そこで、1944年10月8日付『毎日新聞』記事の20ヶ所(1~20)と、『ここに道あり』所載回想から、『毎日新聞』記事にはない動員先4ヵ所(21~24)を特定して、帝国女子医薬専の動員先一覧を作成した。

番号は便宜的に付した。事項は、動員先(学童集団疎開先)、学寮名(旅館・寺院など)、(東京都各区, 集団疎開していた国民学校)の順であるが、学寮名(旅館・寺院など)・国民学校名を特定できなかった場合がある。なお、□には4ヵ所の動員先を特定した際に、根拠とした『ここに道あり』の記載箇所を摘記した。

帝国女子医学薬学専門学校「学徒医療隊」動員先一覧

1. 千葉県夷隅郡総野村字松野 長勝寺(本所区, 本横)
2. 埼玉県秩父郡 熊木公民道場(京橋区, 月島第一)
3. 同 南埼玉郡増林村 勝林寺(神田区, 佐久間)
4. 同 児玉郡青柳村 大光普照寺(神田区, 錦華)
5. 同 比企郡大岡村 妙安寺(日本橋区, 常盤)
6. 山梨県西八代郡富里村 下部温泉(四谷区, 四谷第二・四谷第三)
7. 同 南都留郡中野村(麴町区, 富士見)
8. 福島県石城郡大野村(中野区, 桃園第二)
9. 同 岩城郡江名町上神白(中野区, 北原)
10. 同 北会津郡大戸村芦牧(目黒区, 駒場)
11. 宮城県刈田郡小原村(浅草区, 新堀)
12. 同 刈田郡福岡村(浅草区, 富士)
13. 同 宮城郡広瀬村 作並温泉(浅草区, 浅草)
14. 同 名取郡秋保村(浅草区, 清島・松葉)
15. 同 玉造郡川渡村(浅草区, 石浜・田中・待乳山)
16. 山形県東村山郡山寺村(城東区, 第三砂町)
17. 静岡県榛原郡地頭方村(渋谷区, 富谷)
18. 同 駿東郡原里村(蒲田区, 相生)
19. 同 引佐郡奥山村 方廣寺(荏原区, 宮前)
20. 同 富士郡上野村 大石寺(荏原区, 第二延山)
21. 福島県田村郡船引町(荒川区, 第四・第六日暮里)〔私は第一回目が宮城県の作並温泉で、二回目は福島県の舟引とか言う所だったと思う, 122頁〕
22. 宮城県玉造郡鳴子町赤湯〈私に当てられた疎開先は、鳴子温泉をさらに川沿いに入った赤湯とかいう湯治場, 131頁〉
23. 神奈川県中郡大山村(川崎市, 玉川)〔玉川小学校の生徒達について行った先は、伊勢原の大山の下, 146頁〕

24. 福島県双葉郡広野町折木鉱泉（中野区，上高田）〔一回目の胸部線検査で落とされ，再診の結果漸く許可されて福島県は双葉郡字折木温泉と決まりました，191頁〕

注1 「学童集団疎開先一覧表」（全国疎開学童連絡会編『学童疎開の記録』1），「国民学校別疎開状況」（品川区立歴史資料館編『品川の学童集団疎開資料集』品川区教育委員会，1988年）によって，動員先地名・集団疎開学寮名を補ってある。

注2 1944年10月8日付『毎日新聞』記事と『学童疎開の記録』1とでは，下記の2ヶ所の記載内容が異なっている。

『毎日新聞』記事では，「埼玉県秩父郡熊木工民道場（京橋区，月島第一）」とあるが，『学童疎開の記録』1（406頁）では，月島第一国民学校の秩父郡における疎開先3カ所のうちの1ヶ所は，秩父郡秩父町公民道場である。

長谷川れい「当時の子供たちはたくましかった」（東京都中央区「中央区平和祈念バーチャルミュージアム」）には，月島第一国民学校の集団疎開は，「秩父町，高篠村，横瀬村の1町2村に入りました。秩父町では広見寺のほか天理教教会と公民道場，高篠村では湯屋旅館と常泉寺と新木公会堂の3カ所，横瀬村では天理教母巣教会と長興寺の2カ所で，合わせて8学寮に分散しました」とある。

（URLは<http://www.city.chuo.lg.jp/heiwa/shiryo/taikenki/gakudo/index.html>，閲覧は2015年3月24日）。

『毎日新聞』記事の「木工民道場」は「公民道場」の誤植である。

同様に，『毎日新聞』記事では「埼玉県比企郡大岡村妙安寺（日本橋区，常盤・十思）」とあるが，『学童疎開の記録』1（405頁）では，十思国民学校の疎開先は比企郡大岡村ではなく同郡野本村・西吉見村であり，大岡村妙安寺へ疎開したのは常盤国民学校となっている。

ここでは，『学童疎開の記録』1にしたがって，『毎日新聞』記事を補正した。

文部省・厚生省は，帝国女子医薬専生徒2人をもって1隊として24隊を編制し，東京都・神奈川県からの学童集団疎開先無医村24ヵ村へ——東京女子医専の「本科三年生集団疎開地へノ出動員（二） 第一班～第四班の出動期間」に相当する資料は見当たらないが，東京女子医専と同じだと仮定すれば——1944年11月10日～1945年1月末日までの間に4期にわたって，延べにして192人以上を動員した。

「東京都及神奈川県学童疎開地ニ対スル学徒医療隊派遣計画」においては，「学徒医療隊ヲ派遣スベキ疎開地ハ東京都及神奈川県関係ヲ合せ概ネ五〇ヶ所トシ東京女子医専学校報国隊及帝国女子医薬専学校報国隊ニ於テ各二五ヶ所宛ヲ分担スルモノトス」と定めていたにもかかわらず，東京女子医専の動員先は22ヵ所，帝国女子医薬専のそれは24ヵ所となった事情は未詳である。

4 女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村における「診療補助・健康指導」

(1) 東京都水上国民学校戦時疎开学寮（茨城県新治郡斗利出村大字高岡 法雲寺）

『たんぼぼ』による限り、水上小学校と水上小学校の全児童・全教職員が法雲寺1ヵ所に疎開している「全校疎開」について、東京都が東京女子医専関係者に事前にどのように説明していたのかは不詳である。『たんぼぼ』記載内容を把握するためにも、水上国民学校の法雲寺疎开学寮設置経緯を一瞥しておく必要がある。

水上国民学校は、自らを「船頭」と呼ぶ水上生活者（陸地に居住していない水上運輸労働者）と船上で暮らしては、その子弟の就学が困難であるとの理由で、就学者全員のための寄宿舎を備えていた。1944年4月現在、本校（京橋区月島西中通9丁目5番地）は初等科1・2年と高等科女子（3学級）、分校（深川区浜園町1番地）は初等科3～6年と高等科男子（5学級）、児童166人、教員12人、職員21人であった⁽⁸³⁾。

1944年3月以降、東京都は麹町区臨海学園（鎌倉市）・神田区健康学園（北多摩郡小平町）、上野中学修練道場（埼玉県北足立郡大和田町平林寺）など、都・区・学校報国団が有していた施設を戦時疎开学園に再編、あるいは寺院・旅館などを借り上げて戦時疎开学園とし、区毎に区内各校から希望を募って疎開させる方策を進めていた。ひとつの戦時疎开学園に区内全域の学校から少人数の児童を募って参加させるという構想である⁽⁸⁴⁾。

京橋区は、区内各国民学校初等科第4～6学年児童の希望者を、第1次（1944年3月29日～7月26日、120人）、第2次（1944年4月13日～7月21日、320人）にわたり、既存の「京橋区健康学園」（静岡県田方郡宇佐見村）を充てた「京橋区宇佐見戦時疎开学園」に疎開させることにしていた⁽⁸⁵⁾。

このような京橋区の戦時疎开学園の形態が、児童全員が寄宿舎に暮らす水上国民学校になじまないのは当然である。水上国民学校には学校全体を疎開させる措置が必要であった。

水上国民学校戦時疎开学園を法雲寺に決定した経緯は、「あちこち探しまして、茨城県の新治郡の斗利出村という所があり、法雲寺という由緒ある寺がありまして、その寺が貸してもいいということになったものですから引っ越したのです」との教員の証言⁽⁸⁶⁾を見出せたのみである。

東京都公文書館所蔵東京都教育局関係資料によれば、水上国民学校児童のみを入園させる戦時疎开学園開設経緯は以下のようであった。

①「㊦ 東京都国民学校戦時疎开学園設置予定表 教育局教育第一課学事係（昭和十九年四月二十二日現在）」（1944年4月27日「校外学舎等施設物ニ関スル件」添附）の欄外にある「（参考）聾哑学校（一七〇人） 水上学校（二五〇人） 光明学校（一〇〇人）アリ」との記載は、東京都が聾哑学校・光明学校とともに、水上国民学校の戦時疎开学園設置を検討していたことを示している。

②1944年5月3日、東京都は、「水上国民学校戦時疎开学園設置ニ関スル件」をもって、「水上国民学校ハ其ノ收容児童及経営ノ特殊性ニ鑑ミ保護者ノ希望ニ依リ同校児童ノミヲ收容スル戦時疎开学園ヲ設置シ疎開セシムルコトニ方針決定相成候条……可及的速ニ実施方可然御取計相成度」と、京橋区長に水上国民学校児童のみの疎开学園を設置するよう指示した。

③しかし、「戦時疎開学園調（一九・五・二五現在）」（1944年5月18日「戦時疎開学園ニ関スル計画調書供覧ノ件」）では、水上国民学校については「水上」とあるのみで、名称・所在・収容定員などは空欄であった。

④「疎開学園調（一九・五・二九現在）」（1944年6月4日「疎開学園設置ニ関シ関係当局ニ連絡方ノ件」）では、収容定員は250、「備考」には「（未定）」とあった。

⑤「疎開学園調（一九・六・一三現在） 教育第一課学事係」（1944年6月14日「疎開学園ニ関スル協議会開催ノ件」）には、水上国民学校の記載はない。

⑥「秘 疎開学園調（一九・六・一八現在） 教育第一課学事係」（1944年6月15日「疎開学園調供覧ノ件」）では、「水上」は「（未定）」のままであった。

⑦1944年7月12日付茨城県知事宛東京都長官依頼「東京都立戦時疎開学園開設ノ件」には、以下のようにあった。

本都江戸川区王子区ノ戦時疎開学園ニ関シ特段ノ御高配ヲ蒙リ居候処今般更ニ本都京橋区水上国民学校ノ疎開学園左記ニ開設致候ニ付キテハ食糧、燃料等ノ配給其他ニ関シ特段ノ御配意相煩度此段及御依頼候也

記

場所 茨城県新治郡斗利出村大字高岡字寺一、八九〇 法雲寺

開園予定日 昭和十九年七月十五日

人員 児童 八十二名

職員 二十名

この京橋区長の茨城県知事宛依頼文書は、7月12日以前に法雲寺から戦時疎開学園設置の了解を得ていた旨を、京橋区へ伝えていたことを示唆している。

上記①～⑦の過程と並行して、水上国民学校が法雲寺に戦時疎開学園を7月15日に開設する準備を進めていたのであろう、水上国民学校教員宮本秀夫は、1944年6月から便所の増設とシラミが寄生した衣服煮沸用竈の設置に取りかかり、本堂（100畳）・庫裏（40畳）を7部屋に仕切って、児童の居室を整えたと述べている⁽⁸⁷⁾。

⑧1944年8月25日、京橋区長は東京都教育局長宛に「水上国民学校全校疎開方ニ関スル件」を発し、高等科をも含めた「全校疎開」による戦時疎開学園の開設を求めた。

……〔3～6年生は〕数名ノ縁故疎開希望者ヲ除キタル八十名曩ニ御指示ヲ仰キ之ヲ茨城県斗利出村ニ疎開セシメ現在ハ分校内ニ於テ初等科一、二年生及高等科生徒六十六名ノミヲ収容シ教授致居候へ共本校ガ元来水上生活者ノ家庭ヲ離レ寮生活ヲ行ヒ来レル特殊性ニ鑑ミ且ツハ二ヶ所ニ分散経営スルノ不利益及低学年ノ残留ハ防空的見地ヨリスルノ困難性多ク尚父兄側トノ連絡上ニモ不便アルヲ以テ此際高等科児童ハ低学年児童ノ生活指導ノ補助者トナス立前ヲ採テ全校挙テ疎開シ之ガ経営ノ一体化ヲ計リ以テ教育ノ能率増進并ニ特殊教育ノ完璧ヲ計ルヲ適当ト思料セラレ候ニ付右実情御検討ノ上至急何分ノ御指示相成度候也

追而右全員収容ハ現在ノ規模ヲ若干拡充スル程度ニ於テ可能ノ見込ニ付為念申添候

上記京橋区長の稟議を受けた教育局国民教育課学事係は、8月28日に教育局長に「同校ノ収容児童及其ノ経営ノ特殊性ニ鑑ミ全校児童ノ疎開ハ却ツテ適切ト認ムルヲ以テ……承認指令相成可然哉」と上申し、8月30日、教育局長は「同校ノ伺出ノ通可及的速ニ実施相成度」と回答した⁽⁸⁸⁾。

1944年7月20日には水上国民学校初等科3～6年生児童78人が、9月7日には初等科1・2年生と高等科児童76人が、教職員とその家族ともども、法雲寺（水上国民学校戦時疎開学園）へ疎開した⁽⁸⁹⁾。

1944年9月27日、東京都教育局長は都長官宛に「旧戦時疎開学園収容児童ノ疎開先ニ於ケル教育及主要食糧等ノ生活物資配給方ニ関スル件」を發して、裁可を求めた。以下はその全文である。

今春以来本都ノ施設トシテ開設シタル戦時疎開学園ニ収容セル学童ニ関スル表記ノ件ニ付テハ疎開先県当局に対シ今次集団疎開ノ対象施設トシテ継承セシメタルコト不徹底ノタメ主要食糧等ノ配給ハ従前ノ儘ニシテ量的ニ不足ナルノミナラズ寮舎経営上支障不勘ニ付之ガ徹底ヲ図ルト共ニ改善方策左案ニ依リ関係疎開先県当局ニ依頼相成可然哉⁽⁹⁰⁾

文中にある「改善方策左案」は、10月2日に都長官の裁可を得て、同日付で東京都が長官名で發した「集団疎開学童ノ主要食糧等ニ関スル件」である。宛先は、戦時疎開学園を設置していた千葉・静岡・茨城・栃木・山梨・福島各県知事である。その全文は以下のとおりである。

貴県下ニハ今春以来本都ノ戦時疎開学園施設トシテ左ノ通集団疎開ヲ実施致居候処今次集団疎開実施ニ際シ防空総本部ヲ初メ関係当局ト協議ノ結果従来ノ本都ノ戦時疎開学園施設ハ全部其ノ儘当初計画タル対象児童二十万人ノ内ニ包含セシメ今次集団疎開ノ対象施設トシテ継承セシムルコトニ決定相成タルモノニ有之從テ今春来右施設トシテ貴県下ニ集団疎開セル学童ノ教育ハ勿論主要食糧等ニ付テモ防空総本部設定ニ係ル帝都学童集団疎開実施細目ニ基キ割当轉換ノ措置ヲ講ズベキニ付右御諒知ノ上爾今総テ今次集団疎開児童ト同等ノ御取扱方何分ノ御配慮賜度候也⁽⁹¹⁾

上記通牒には、「左ノ通」と、各区が開設した戦時疎開学園について、宛先県毎に施設区名・戦時疎開学園名・所在・疎開人員を付した。茨城県知事宛には、江戸川区が東茨城郡磯浜町金剛院内に設置した磯浜戦時疎開学園（110人）とともに、京橋区が新治郡斗利出村字高岡法雲寺内に水上国民学校戦時疎開学園（160人）を設置している旨記してある。

この措置によって、水上国民学校戦時疎開学園は、10月2日には「帝都学童集団疎開実施細目」にもとづく「今次集団疎開」に組み込まれることとなり、水上国民学校戦時疎開学園は、水上国民学校疎開学寮と称することとなった。

東京都は、1945年3月15日、千葉・静岡県に集団疎開していた児童と同様に、茨城県に集団疎開していた淀橋・向島区児童をそれぞれ群馬・秋田県へ再疎開させることを決定した。当時水上国民学校教頭であった小野勲は、「茨城地方は本土上陸の決戦場になる。秋田に再疎開せよとの命が下った。校長と私は再三にわたる調査の結果、秋田県田沢湖畔（仙北郡田沢村字春山）を選んだ。戦時中秋田地区の疎開校は向島区のお世話になった。昭和二〇年四月二十八日

移動、児童一三六名。此処は旅館が三軒、民家九軒という淋しい湖畔であった。蓬莱館という一番大きな旅館を借り受けて児童を収容した。他の旅館は職員家族で借り受けた」⁽⁹²⁾と回想している。

小野勲は、別の回想では再疎開について以下のように述べている。

……そうこうしていると、だんだん日本が負けてきましてね。近くに霞ヶ浦航空隊というのがありましてね、それがあるもんですから、しょっちゅうアメリカの飛行機が飛んでくるようになりましてね、艦載機が銃を撃ち出すようになりました。本土上陸の時には真先に霞ヶ浦航空隊がねらわれるから再疎開せよということになり、さあ大変だと、校長とあちこち探しまして、ついに秋田県の田沢湖畔の、民家が三軒という非常に不便な常呂ですが、そこへ行って、最後まで子ども達を守ろうじゃないかということになりまして、そこへいったのが昭和20年4月29日、昔の天長節でした。そこへ再疎開した訳です。

その蓬莱館という一番大きな旅館を借りまして、そこへ子ども達をいれて、炊事の労をとる人はおりますし、用務員もいるもんですから、全部学校の方で炊事や何かはやりました。しかし食糧には困りました、山奥で。茨城県の場合は、農村ですから、農産物は豊富でしたから、主食には困りましたが、さつまいもや、その他の副食にはあまり困らない生活ができたんですが、田沢湖は、山の中ですから困りましたね⁽⁹³⁾。

一方で、東京都教育局国民教育課学童疎開係「市町村別学寮調（昭和20年6月末現在）」では、秋田県仙北郡田沢村に集団疎開中の「水上」学校は京橋区ではなく、向島区に属している。これは誤記ではない。「秋田地区の疎開校は向島区のお世話になった」との上記小野勲の回想にあるように、向島区国民学校児童を茨城県から秋田県へ再疎開させたのを機に、同じく茨城県から秋田県へ再疎開する水上国民学校に関するさまざまな措置を、東京都は便宜的に向島区に担当させた。「市町村別学寮調（昭和20年6月末現在）」は、そのことを正確に記載したのであった⁽⁹⁴⁾。

水上国民学校が帰京したのは、1945年10月であった⁽⁹⁵⁾

(2) 女子医学専門学校生徒「学徒医療隊」の学童集団疎開先無医村における「診療補助・健康指導」——加藤淑子「戦中日記抄」を中心に——

加藤淑子は、加賀美道子とともに東京女子医専「学徒医療隊」第一班員として、東京都水上国民学校（京橋区）の集団疎開先である茨城県新治郡斗利出村法雲寺への動員に従うべく、1944年11月11日、上野駅8時15分発仙台行（常磐線）に乗車し、10時に土浦駅着、13時10分発の筑波鉄道に乗り換え、常陸藤沢駅に着いたと記している⁽⁹⁶⁾。

当時の『時刻表』によれば、上野駅8時15分発仙台行の土浦駅到着は9時53分、これに接続する筑波鉄道線岩瀬行は13時10分に土浦駅を発車し、法雲寺最寄りの常陸藤沢駅到着は14時03分頃であった。加藤淑子が乗車した列車は土浦駅到着が予定より遅れた。土浦駅—常陸藤沢駅間の距離は7.6km、所要時間は約53分である。常陸藤沢駅から法雲寺までの距離は約2km、徒歩で30分ほどを要した⁽⁹⁷⁾。

以下に加藤淑子「戦中日記抄」から摘記する。

◇1944年11月11日 疎开学寮派遣第一陣としての出発の日。

ス・フのリュックサックを背負ひ、仙台行きの常磐線列車にて加賀美道子さんと共に午前八時十五分上野駅発、列車は満員、ただし窓外の黄、紅葉は美し。十時十分土浦着。筑波鉄道の発車は十三時十分のため駅外に出る。……

着いた法雲寺は大へんな荒れ寺、古寺で、庭は洗濯物の満艦飾である。校長に面会。校長曰く、東京から昨日、女子医学徒二名派遣につき宿舎を用意せよとの簡単な電報が来、事情はよくわからぬまま、急ぎ近所の農家に宿舎を頼んだばかりとのこと。学寮側は我々の出現に（招かれざる客？）どうも困惑気味であるらしく心細くなる。中年の女性K訓導（現称教諭）と若いI看護婦及び来診中の同村国民学校〔斗利出村立斗利出国民学校〕のS校医に紹介され、薄暮の田舎道を、宿舎に宛てられたH家に案内された。リュックサックをおろし、再び法雲寺寮に引返して夕食。大きな井に白米山盛り、おかずは霞ヶ浦産のわかさぎ、南瓜の煮附であり、東京の粗食（雑炊）にくらべると別天地のやうで感に堪へず。夕食後校長より二人は学童一同に紹介され、再び女性訓導に案内されて暗い田舎道を宿舎に戻った。

◇1944年11月12日 朝H家でお茶を出され、法雲寺学寮に出勤後朝食。その後「治療室」とは名ばかりの、古寺のがたびし廊下の一隅に案内される。すでに行列して待つてゐた小患者の治療にいざ着手しようとしたところ、〔子どもが冷たくなっているからと呼ばれて行くと〕男の子が全身硬直し、冷たくなって横たはつてゐる。痩せ細った手首の脈は全く触れない。……瞳孔は散大し、反応は無い。心音もきこえぬ。硬直は全身に及び、死斑も型の如くはつきり現はれてゐる。カンフル注射を、とも思つたがもはや事切れてしまつて無効に決つてゐる。……隣村より寮医（開業医）が来て検屍が行はれ、約二時間前に心臓麻痺死と診断された。着任初日のこの椿事に二人ともすつかり魂消てしまつてが、校長以下教職員連も皆動顔の様子である。

一段落ののち例の治療室〔本堂廊下の一隅〕に戻つたが、疥癬、膿痂疹の多いこと多いこと。すっかり驚き入る。テールバスタ、スカボール、チンク軟膏、マーキュロクローム等の僅かな外用薬の備蓄で、ガーゼも繃帯も無いのに次から次へと治療をしなければならぬ。

……通夜の席で紹介された村長は温厚な村夫子で我々を「女医先生」と呼ばれた。

◇1944年11月13日 〔死去した男児の告別式でごった返しだが〕その間も診察。専ら皮膚病に軟膏等の塗布である。……昨夕東京から駆付けた父親の姿は一しは哀れであつた。

この学寮は隅田川に浮ぶ一葉の舟を住家とし、地上に住居をもたぬ水上生活者の子弟のための施設で、児童は東京でも寄宿舍生活を送り、週末のみ帰宅（舟）する由。

〔高学年男児は海洋少年団の制服を着し、リヤカーで柩を火葬場へ運んだ〕

◇1944年11月14日 午前中は皮膚病の処置。他に発熱の児童二人居り、寺内をあちこち駆け回りはり多忙。しかし、患児に親切にすると傍の児童は嫉妬する。仮病を使はれたり甘えられたり、その対処はなかなかむづかしい。水枕は漏り、油紙もタオル、手拭も無し。午後、故W少年の遺骨を一同と共に駅に見送る。さて、その後も、先生、ここに薬をつけてください、傷をしました、ここが痛い、等と間断なく云つてくるので終日寸暇無し。病児用の食を賄方に掛け合つたり、二人ともへとへとになつてしまつた。

◇1944年11月15日 皮膚科中村教授の出発前の注意の如く、疥癬実によく、これに対するスカボールの効力は目ざまし。しかし、忽ちスカボール払底。腹痛を訴へてくれれば、瓶入りの「わかもと」一錠を与へると喜んで立ち去る。アンギーナ〔扁桃腺炎〕、療痘の児それぞれ三、

四名あり。高熱のアンギーナには食塩水を作つて含嗽を指示し、湿布させる。瘰癧にはマキョクローム、イヒチオールを塗布。足に釘を刺し、一週間も放置し、化膿して相当ひどくなった乱暴児童あり。これは明日土浦へ連れてゆき切開してもらふやうに手配した。切開手術は我々には未だ許されない。

薬品箱を整理したところ膏薬類が大分出て来、それらを分類表示し棚に列べる。

夜寮母室にて、児童らに内緒の、とろろの夜食会に招かれ、十時頃宿舎に帰れば、諸をふかし、おばさん一人寝ずに待っていてくれた。

◇1944年11月16日 終日降雨、午前中は寒く陰気な廊下隅にて治療、疥癬に著効あるスカボール愈々欠乏す。午後は村の学校に行き校医の手伝ひにてマントウ反応皮内注射〔ツベルクリン検査〕。疎開学寮の児童と異り村童は皆生き生きとして居り、教師も穏やかである。……

〔夕食後〕肋膜炎のため部落の「集会所」で療養中の男性教師二人へのカルシウム静脈注射を頼まれ、雨の降る暗い田舎道に行くのは惨めであった。

〔助役の家人の腹痛診察に応じたが、まもなく隣村の開業医が来診して診断と投薬調剤〕

◇1944年11月17日 午前中肋膜炎のため療養中の二教師の静脈注射及び昨夜の腹痛老人宅をたづね、午後は村の国民学校に行き先日ツベルクリン反応の判定。……夕食後教師連の秘密夜食会に招かれ、今日配給になったといふ砂糖入りの紅茶の馳走になる。その分だけ砂糖が減る。児童に気の毒な気がした。

◇1944年11月19日 日曜も平常通り出勤し学童の治療。主として皮膚病、特に疥癬。

◇1944年11月20日 昨日曜も本日午後学童の疥癬治療、中食はふかし藪。午後より、農家に間借り中の校長宅へ行き、夫人にワイル氏病の予防接種をし、此处でもふかし藪を出された。そして、学寮に帰つてみると、大村〔重光〕教授が視察のため来訪されていた。同教授は茨城県の担当で、すでに長生閣学寮（久慈郡袋田村）〔向島区、第一吾妻・向島中川国民学校〕、上宮寺学寮（那珂郡神崎村）〔向島区、請地国民学校〕視察後当方に来られた由。校長と面会後、村役場、国民学校へ案内旁々経験、感想等報告した。此のあたりには謡曲で有名な桜川が流れてゐる筈と云われる。

今日の夕食は部落の集会所で、大村教授の歓迎と我等二人の慰労会との名目で、校長、教頭、村役場の助役、教師一同が集つて御馳走になった。酒と白米は助役の提供で、この白米飯の白さは恐れ程であつた。山芋のとろろ、鶏肉、茶碗蒸、砂糖入りの紅茶等。〔『女子医学研究』15巻1・2号（1945年10月9日、27頁）には、「都下国民学校児童の集団疎開地への集団疎開について、その保健管理のため、第三学年の学生が十一月七日より二月末日まで出勤、各二人づゝ疎開地へ向ひ、児童の健康指導に従事した。其出勤先は茨城、群馬、栃木、新潟、長野、富山の六県で、教授としては中村、岩崎、大村、田宮、岡、伊東各教授が一県づゝ分担して状況を巡視」とある。〕

◇1944年11月21日 朝食後大村教授を旅籠屋に迎へに行き、食後帰京を駅に見送る。他寮より待遇良かりしたため教授の御機嫌麗し。

二ヶ月前に自転車に衝突して以来、胸が痛いと言ひ、肋膜炎ではないかと疑はしい少年と、心臓不整で高熱の子が心配で、隣村医師の来診を頼んだが、「何ともない」と診断されて面目を失つた。

◇1944年11月22日 午後二時より区長宅にて腸チフスの予防接種に動員された。田畑で作業中の人々野良着のまま集まり、〔斗利出〕国民学校の児童も引率されて来て、「痛かつペー」

等と頗るうるさし。朝日新聞支局の記者が来て、土蔵の前の日当りで幼児に注射しているところを撮影し、疎开学童の健康状態について感想を求めらる。

夕空には雲が赤々と連なり、平野の涯には富士山が見え景観頗る華麗。夕食後も治療。

◇1944年11月23日 ……此处では日曜も祭日も無く全く無休。午後、注射器を持って田舎道を歩いてゆくと牛を引いた爺さんが「注射する先生かね。神経痛の注射を一本ぶつこんで貰へねえかね」と云つて通りすぎる。注射器を皆じろじろと眺めてゆく。

竹馬が大流行で、男児も女児も竹馬を作り、本堂前で乗り廻してゐる。パチンコも流行し、団栗の実を弾丸にしてぼんぼん飛ばしてゐる。夕食は集会所へ村のお歴々が集り、新嘗祭の心ばかりの御馳走の相伴にあづかった。そして六時から寺の前庭で映画会開催。戦争のニュースと「加藤隼戦闘隊」……

◇1944年11月24日 ……マリアナ基地より東京にB29来襲。家のことが心配である。夕焼空美し。地平線のあたりは野も空も茫々とし、空は紅色を呈す。

◇1944年11月26日 休日皆無。日曜日と雖も出勤。午後一時頃警戒警報。〔軍のトラックと衝突した警防団員の往診依頼に応じ、骨折部位を特定し副木をした。軍医・将校から負傷者の経過観察を依頼される〕……治療室を訪れる児童が最近少なくなったので、教頭から一同に話して貰ったところ、夕方から大ぜい押しかけて来た。

◇1944年11月27日 〔校長から、疎開児童のために派遣されているにもかかわらず、軍の依頼を引き受けたことは困ると指摘された。その後、警防団員と校長との談合の結果、改めて校長から村のため骨折警防団員を診に、法雲寺から約4 km離れた沢辺まで行くようにとの依頼に応じた〕。帰路部落長の宅に案内され、賢明そうな中年の夫人に應對され昼食の馳走になった。風邪をひいた教頭からは往診を乞はれ、毎日天手古舞である。

◇1944年11月28日 午後区長宅にて二回目のチフス予防接種。終つて役場で肉うどんの馳走になる。夕食は集会所で転任のA訓導の送別会。

◇1944年11月29日 沢辺の部落の骨折警防団員のところへは、学寮の勤務に支障の無いやうに毎朝六時半より出掛ける。道は泥沼の如し。

◇1944年11月30日 夜中に空襲警報。東京の空は真赤に見えたとのこと。一同の無事を祈る。明方降雨、寒し。廊下外れの「治療室」で終日ふるへてすごす。

◇1944年12月3日 従弟土浦航空隊入隊の日にて土浦よりバスに乗れず一時間余歩き航空隊へ到るも蜿蜒たる入隊者の列中に従弟も伯母も派遣できなかった。後任の高橋ミヤ、田口水井さんの二級友到着。引継。

◇1944年12月5日 空襲のため交通機関停りなどして漸く深更帰宅⁽⁹⁸⁾。

以下は、加藤淑子が日記に続けて記した「斗利出村再訪」3首。

三十年過ぎて來にけり沖といふ部落は入日の逆光の中
そののちの歳月を問ふ人と行く野の空朱に驚乱れ飛ぶ
たたかひの激しかりし日無醫村に醫の代りして下駄を貰ひし⁽⁹⁹⁾

加藤淑子が「学徒医療隊」として斗利出村に出動したのは1944年であった。第1首に「三十年過ぎて」とあるからには、再訪時は1974年である。「戦中日記抄」に謝礼の下駄を記してい

ないのに、眼科の医師として豊かな経験を積んだ後に、往時は「無醫村に醫の代り」であったと第3首を詠んだ。記憶の奥底に沈んでいた「下駄」こそは、斗利出村のひとつとが発した「醫の代り」の証明書であった。

1943年8月6日付『読売報知』（朝刊）は、「店に姿のない下駄／闇流しに断固摘発」と見出しを掲げて、警視庁経済警察部が、1足公定価格1円98銭の女物下駄を、5円で特定の客だけに売っていた履物業者を検挙した旨報じている。1944年8月19日付同紙（朝刊）は「下駄が街から姿を消し」、闇価格は公定価格の2～3倍と報じた。下駄と雖も既に入手は困難であった。

「戦中日記抄」によって、加藤淑子の茨城県新治郡斗利出村法雲寺（東京都水上国民学校戦時疎開学寮）における「集団疎開学童ノ診察ノ補助並ニ健康指導」（「女子医学学徒勤労働員要領」）を概括するなら、下記のようになる。

- ①東京都職員が東京女子医専に来校して「医学徒配置要項並受入注意事項」、「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」などにもとづいて「学徒医療隊」動員の説明を行った。その後、東京女子医専では、「各学科のそれまでの系統的講義」を打ち切られて「現地向きの速成講義」を課して準備教育を行った。加藤淑子も懸命にノートをとり「虎の巻」を作製した。
- ②「学徒医療隊」動員については、東京都水上国民学校戦時疎開学寮には、加藤淑子らが到着する直前に知らされた。とはいえ、斗利出村・水上国民学校は宿舍・食事の手配など懇切に対応したかの如くである。
- ③化膿外傷切開こそ「許され」なかったが、加藤淑子が要請に応じて行った引率教員とその家族、村民の疾病・傷害の診断と治療は「集団疎開学童ノ診察ノ補助並ニ健康指導ニ関スル業務」（「女子医学学徒勤労働員要領」）の範囲を超えていた。「斗利出村再訪」短歌3首が示しているのは、「醫の代わり」としての自負である。
- ④学寮所蔵医薬品の不足は眼を覆うばかりであった。
- ⑤児童の病死を確認した隣村在住医師は、「寮医」であり、東京都が疎開学寮に配した囑託医である。斗利出国民学校校医も疎開児童の診察に関与する局面はあった。
- ⑥加藤淑子は、巡回してきた東京女子医専教授に「経験、感想等報告」を行った。しかし、「医学徒配置要項並受入注意事項」に謳った「学寮囑託医」、「医学徒在籍教授其ノ他巡回指導者」による指導の痕跡は見出し難い。
- ⑦加藤淑子は、一日の休暇を得ることもなく、ありとあらゆる事態と求めに誠実に応じた。無医村に暮らす疎開児童・引率教員とその家族、村民には「女医先生」であった。贈られた「下駄」はその証しである。
- ⑧加藤淑子は、無医村における「集団疎開学童ノ診察ノ補助並ニ健康指導」の業務を、忍耐強く果たし、そして記録した。そのことを通じて水上国民学校の学童集団疎開をもよく記録した。換言すれば、加藤淑子は水上国民学校学童集団疎開を《観て記録した人》である。疥癬治療の効果、「児童らに内緒の、とろろの夜食会」、「教師連の秘密夜食会」を記録した人は稀である。

「戦中日記抄」には1944年11月18・25日、12月1・2日の条がなく、11月24・30日の条には医療活動の記載はないが、加藤淑子は11月11日から3週間にわたり、「学徒医療隊」の責務を十全に遂行した。

加藤淑子は、1945年1月14日には群馬県芳賀郡須藤村昌泉寺・長安寺（牛込区、山吹国民学校学寮）へ出動したが、「戦中日記抄」1月14日の条には「相棒加藤（現小倉）清子さん。前任者深町露子さん、福井信子さん。厳寒にて引継ぎは同夜新旧四人とも蒲団にもぐり、四つの首のみ出して行ふ。昌泉寺と長安寺に隔日勤務の件など」と記し、1月15日から1月30日までは「(中略)」とした。1月31日には、「虱（頭髮、身体）をみやげ」に帰京した⁽¹⁰⁰⁾。

群馬県芳賀郡須藤村昌泉寺・長安寺への同行した小倉清子が記録した加藤淑子の「談話」を摘記しておく。

〔長安寺の〕住職さんのところで結婚式があり、式後に新婦さんが胃痛を起こして苦しんでいるというので、同行の加藤淑子さんが診てくれた。このことを淑子さんに聞いたところ、あの時は真夜中に起こされ、厳寒の道を迎えの人について二人で出かけた。胃痛で、住職の娘の新婦さんが苦しんでいるということだったので、アッペ（虫垂炎）〔Appendicitis〕ぐらいなら分かって診たのだったけれど、特別な症状もなかったので、泊めていただき様子をみることにした⁽¹⁰¹⁾。

加藤淑子は、群馬県芳賀郡須藤村においても、茨城県新治郡斗利出村法雲寺（東京都水上国民学校疎開学寮）への出動時と同様に、村民の求めに応じて往診したのである。

彼女はまた、「昭和十二年七月、支那事変勃発後、学徒としてあちこちに勤労動員されたが、東京女子医専在学時の疎開学寮派遣に限り、後日東京都より報酬を支給された。その額は二回（五週間）分約五十円」と記している⁽¹⁰²⁾。管見の限り、女子医専「学徒医療隊」動員に対する唯一の「報奨金」支給記録である。

自身の日記にもとづいて往時に踏み込んだ東京女子医専「学徒医療隊」の当事者は、加藤淑子のみであった。刻苦精励と観察・客観化は、このひとに固有の資質に思える。

また、「Ⅲ 碧素」においては、東京女子医専附属病院に搬送された1945年3月10日大空襲被災者であふれたが、「日ごとに空床が殖えて行ったのは、九死に一生を得ながら、主に破傷風菌の感染に苦しみ落命する人が相次いだためである。救護に我々学徒も動員された」と述べ、10首中の第1首に「瘡笑といふ徴候をまさに見き被爆し次々死にゆく人に」と配している⁽¹⁰³⁾。

「碧素」は国産ペニシリンの和名、「瘡笑」は破傷風感染に特徴的な症状である「牙間緊急（開口困難ニシテ一指ヲモ通ゼザルコト多シ此ノ際患者ハ齒ヲ剥キ出シ笑ヒ居ル如キ一種ノ顔貌ヲ呈ス）」のことである⁽¹⁰⁴⁾。「Ⅲ 碧素」は、米軍空襲死傷者に関する稀有の記録でもある。

他の東京女子医専「学徒医療隊」従事者の回想から、「医療・保健指導」に関する箇所を摘記しておく。（）は「東京女子医学専門学校「学徒医療隊」動員先一覧」,「本科三年生集団疎開地へノ出動員（二） 第一班～第二班の出動期間」にもとづく動員先、東京都区名・集団疎開国民学校名である。

①相澤千代子「戦時下の学生生活」

任務は児童の健康管理だが、まだ医者のお卵なので、虫垂炎と診ても診断を下すわけには行かず、連れ立って松本病院へ行き診療していただく。手術に至ったのは二症例あった。昼生活なので、埃を目に入れて結膜炎になる子が多く、洗・点眼がおもな仕事であった。それと霜やけの手当。手の甲を腫らし、中には崩れる子もいた。クレゾール温浴を毎晩してあげた。……〔寮母が洗濯の際に、女兒全員の下着が汚れているのに気づいて、急性淋菌性尿道炎感

染がわかり], 松本市民病院から泌尿器科の先生に来ていただき, 一人ひとりを検診代に乗せて診察が行われる。その後隊列を組んで病院に通い, 治療を受ける。そんな子供たちの姿を痛ましく, 何ともかわいそうに思った。……重い結膜炎の子を診ていただきに, 私どもは市民病院によく通った。

(長野県東筑摩郡里山辺村, 世田谷区・三宿)

②石津澄子「学童疎開地への出動と戦後」

学童たちも先生方も養護関係の先生やその助手の方々も, すでにここの生活に馴れておられ, 私たちの出番はほとんどないほどであった。たまにお腹が痛いとか, 頭が痛いとか, 喉が痛いとかいう子はいたが, 保健薬を飲ませ, 少し静かにさせておくと, 翌日は先生, 快つた! と報告にきた……幸いなことに, 親元に帰した方がいいと診断された病人も発生せず, 好天の日曜日には大きな釜にお湯を沸かし, 学童たちの衣類を洗い消毒する虱退治の行事があり, 虱デーと呼んでいた。[地元女兒の黒部電鉄橋からの転落事故に立ち会い, 村民からの高血圧症診断要請に応じた]

(富山県下新川郡内山村宇奈月温泉, 蒲田区・新宿)

③尾城政子「戦前戦後のこと」

[動員先は] 長野県の崖の湯温泉でした。村井駅から山道を一時間以上〔距離は直線で4 km以上〕も登って行ったように思います。温泉旅館で長い外廊下を浴場から部屋に戻る間に, 手拭いがカチカチに凍ってしまうほど, 寒いところでした。でも児童たちは, 皆元気で頑張っていました。調子悪い子が出て, リヤカーに乗せて私たちも付き添って, 町〔松本町〕のお医者様まで行ったこともありました。

(長野県東筑摩郡片丘村, 中野区・仲町)

④小田原慶子「戦争とともにあった医学生時代」

「しもやけ」「あかぎれ」の子供たちが多く, その手当とか, 感冒で熱を出している子供の対応, 先生方の相談にのる程度の仕事でした。……一度お腹が痛いという子を村の開業医まで連れて行ったことがありましたが, 虫垂炎ではないことが分かり, ほっとして帰ってきました。

(栃木県足利郡三和村, 麻布区・筈)

⑤加藤泰子「想い出すこと」

午前中は, 学童の検診と簡単な治療, たとえば, 耳漏や鼻炎の処理, 湿疹や膿痂疹の処理などである。

(群馬県群馬郡室田町榛名山町, 王子区・岩淵)

⑥加藤泰子「想い出すこと」

子供たちは頭しらみも体むくみもなく, 清潔……しかし, 児童数は大変多く, 午前中は検診と耳鼻科, 皮膚科的処置に奮闘した。午後はおっぱら勉強と読書。

(長野県下高井郡豊郷村野沢温泉常盤家, 足立区・千寿第二)

『学童疎開研究』1 (469頁) によれば, 野沢温泉常盤家には千寿第二国民学校児童348人が疎開していた。1944年11月9日「学童集団疎開宿舍移転計画書」(『資料・東京都の学童疎開』336頁) によれば, 豊郷村野沢温泉には足立区から26の旅館に1,418人が疎開しており, 「収容過多, 一部要移転」対象となっていた。]

⑦柴田夫佐「かえりみて」

男児の一人の指に瘰癧発現，教科書を思いだしながら処置，完治，本当にホッとした。
(栃木県河内郡本郷村，牛込区・早稲田)〔他の動員先などは不詳〕

⑧角田智恵子「思い出すまに（東京女子医専時代）」

第二回目の疎開学童への訪問看護は，木下いうさんと一緒であった。茨城県土浦の近くで「新治郡」の農村へ疎開した学童は東京水上生活者の人たちで，高等科二年生までであった。（水上校は月曜～金曜日まで）都内で寮生活をしていて，土曜日に親が川の船上で待ち合わせていて帰船し，再び月曜日に送られて学校へ（全寮制）に戻る仕組みとのものであった。

上級生が下級生の面倒をよく見るので，私たちは楽であった。滞在中，結膜炎の子供を隣村の女医先生（帝国女子医専の先生）のところへ受診のため付き添っていったのを覚えている。

（茨城県新治郡斗利出村，京橋区・水上）

⑨勅使河原弘子「戦中医学生の忘れ得ぬこと」

昭和十九年十二月，医学生であるため工場等は免除され，いまだ学生ながら疎開学童の健康管理に行くことになり，佐藤いくよ教授等に特訓を受け，三週間単位で出発しました。一回目は……富山県中新川郡三郷村の信教寺へ行くこととなりました。このお寺には荏原区の児童，三年生から六年生までの四十五名と訓導一人が疎開していました。……私たちは終日子供たちの指趾の凍傷の手当に明け暮れておりました。

（富山県中新川郡三郷村，荏原区・大間窪）

⑩中村ミヨ子「戦争と医学生」

私は同級生の友人と二人で茨城県の袋田温泉に派遣され，当地は児童（小学校二年生～六年生）約千人以上が収容され，教員数も多く大所帯であった〔「当地」がどの範囲を指すのか不詳である。茨城県久慈郡袋田村長生閣へ集団疎開したのは向島区向島中川国民学校児童249人であった：『学童疎開の研究』1，473頁〕。しかし，医務室などというしゃれた部屋もなく，六畳ほどの一室で診療も宿泊もして，時には旅館の授業員（女中さん）も夜には泊まりに来て，横になるのがやっとという状態である。……ある日近所の人から往診を頼まれた。（そこは無医村地帯であった）事情を聞くと，患者さんはどうやら難産で，一向にお産が進まないで困っている由。助産婦さんからの依頼である。さあ，困ったことに私どもはゲブルト〔Geburt：分娩〕なるものを講義で習ったことはあるが，見たことは一度もない〔その後無事出産した〕。……他にも高熱患者の往診を頼まれ，アスピリン一袋で解熱，家族から大感謝され，大御馳走を受けてとても嬉しかった。

（茨城県久慈郡袋田村長生閣，向島区・向島中川）

⑪横田登喜「戦争はしたくない」

昭和十九年十二月からお正月にかけて三週間，小学生が疎開しているお寺へ医療保健面での奉仕のために新潟へ行った。学校の養護教員の看護婦さんもいたので，その手伝いをした。病気によっては長岡市の日赤病院を受診するために送って行くこともあった。

子供たちは広い部屋に布団を並べて寝ていたが，子供たちにはシラミが一杯ついていて，洗濯をする時は，まず衣類はお釜で煮てから洗濯した。

（新潟県古志郡栖吉村善照寺，世田谷区・松原）

⑫渡辺慶子「幾度の病をくぐり抜けて」

〔同行者は〕日赤卒業の看護婦で見解も診療も抜群でした。一度〔第三班、里山辺村への動員〕は脳炎の患者が発生し、二度目〈第四班、豊郷村への動員〉の時は、多数の淋疾が女子児童に発生しました。

（長野県東筑摩郡里山辺村湯原、世田谷区・三宿）・（同下高井郡豊郷村野沢温泉、足立区・千寿第二）⁽¹⁰⁵⁾

これらの記憶の断片を通覧すれば、東京女子医専「学徒医療隊」が直面した事態は、「午前中は検診と耳鼻科、皮膚科的処置……午後はもっぱら勉強と読書」から疎開児童以外の「高熱患者の往診」まで多様であった。そして、加藤淑子「戦中日記抄」——そこには「午後はもっぱら勉強と読書」に類する記載はなく、淋疾患児に悩んだとの記載もないが——は、同期生たちの記憶の断片と重なり合っている。

学童集団疎開先無医村に出動した帝国女子医学専生徒の回想から、「診療補助・健康指導」に関する記述を摘記しておく。○は〈帝国女子医学薬学専門学校「学徒医療隊」動員先一覧〉、『学童疎開の記録』1にもとづく動員先、東京都区名・集団疎開国民学校名である。

①杉原敏子「思い出」

学童疎開地へ派遣された時、私は今は亡くなられた小田原久子さんと、房総半島の中央部の方へ行ったのです……大多喜という駅でおりてかなりの田舎道を先生と三人で目的の村まで徒歩で行きました。

（千葉県夷隅郡総野村長勝寺、本所区・本横）

②市来フジェ「女子医専の思い出」

二十年一月無医村疎开学童の診療に、千葉の山の中に行った。二人ずつ一ヵ月位の交替で、東京の下町の五・六年の疎开学童の診療に行き居た。……私は福井葉子さんとペアで行った。凍傷、感冒、急性胃腸炎、急性中耳炎等が疾病だった。担任の先生が熱を出されて寝込まれた時は、福井さんと二人で授業をしたこともあった。……今のようによく効く抗生物質があるのでなく、よくやって来たものだと思う。村の人達にも急患で診てくれと頼まれて、往診に行った事もあった。そしてお礼に十糎×三十糎位の大きさののし餅を十枚位縄でくくったのや、干し芋（カンコロ芋）などを貰った。

（千葉県夷隅郡総野村長勝寺、本所区・本横）

③加納千秋「或る日の午後の長電話—学童疎開地での思い出」（1）

〔外房線大原經由木原線総元で下車して〕八キロほども歩きましたか、やっとのことで総野村松野の部落について長勝寺へ参りましたね。……古い本堂で私達も一緒に生活をしましたね。子供達のお勉強の間は寮母さんのお手伝い……幸いに健康管理とは名のみの毎日で、疥癬、タムシ、凍傷の処置などをして、少し離れた盛隆寺、妙満寺、真福寺と、三つのお寺を廻りましたっけ。

足が痛いという男の子をリヤカーにのせて、元気な子四、五人を連れて十キロある勝浦……の病院へつれていきましたね。

〔加納千晶と塩田友子の対談「或る日の午後の長電話—学童疎開地での思い出」を便宜的に（1）（2）に分けた〕

（千葉県夷隅郡総野村長勝寺、本所区・本横）

④塩田友子「或る日の午後の長電話―学童疎開地での思い出」(2)

子供達の肌着についたシラミやその卵とりもしました……〔往診を〕無理矢理頼まれて寒い冬の夜道を、たしか提灯をつけて行きました。一歳位の乳幼児でお腹がとても張っていたので、ない知恵を絞り、手持ち少ない学童の常備薬の中からピオフェルミンなんかあげて、大変な感謝のお言葉と、お餅、干し柿、乾燥芋など沢山頂いてホコホコと引き揚げて来た〔後に風間で「肺炎で町の病院へ入院」と聞いた〕

(千葉県夷隅郡総野村長勝寺, 本所区・本横)

⑤岡葉子「御遠慮同盟からのメッセージ」

〔橋口不二枝と〕疎开学童について千葉県へ……ある冬の夜、村人から往診を頼まれました。……二人は深い雪の中を出かけました。

(千葉県夷隅郡総野村長勝寺, 本所区・本横)

⑥岩宮豊子「学生時代の思い出」

私は永瀬さんと二人で越谷のお寺へ行きました。お寺の名前は忘れてしまいましたが、神田の学校の疎開先だった様です。二週間余り子供達と寝食を共にして、本当にのんびりとした時を過ごしました。幸い熱を出す子も怪我もなく、救急箱と聴診器だけで今思えば冷や汗ものです。……お寺の屋根裏部屋の様なところで寝泊まりしました。一日の仕事と言えば、子供達の虱のついたシャツを大釜でクタクタ煮たり、日だまりで耳くそをとってやったり、ハタケやタムシの薬をつけたり、爪を切ってやったり、穏やかな毎日でした。

(南埼玉郡増林村勝林寺, 神田区・佐久間)

⑦佐藤ち江「雪の夜の思い出」

三月も間近いというのに思いがけず大雪となった夜のこと、疎开学童とともに過ごした山名湖畔でのことが思い出されて来た。……夜になると「頭が痛い」「お腹が痛い」などと訴えて私たちの部屋を訪れる子供が引きも切らずということだった。女子医専の学生の勤労奉仕なのだから特別の手当も出来ずムンテラ〔病状説明〕も思う様にはいかないのに、ただ何となく話をし一緒にこたつにあたっているうちに気分がよくなってゆく。さびしさ、欲求不満から来る精神的な訴えだったのだろうか。

(山梨県南都留郡中野村, 麴町区・富士見)

⑧林信子「思い出あれこれ」

金子聖子さんとは山中湖の疎開児童の処へ二回行きましたね。……零下十五度位の部屋の中は、水気のあるものは全部凍ってしまい、リパノール液が凍って膨張しビンが次々と割れてしまいました。

(山梨県南都留郡中野村, 麴町区・富士見)

⑨渥美志津代「会津の思い出」

昭和十九年秋、疎开学童の医療奉仕の為第一班として、飯田節子さんと二人が駒場小学校の担当となり、疎開先の会津若松から更に奥に入った芦ノ牧温泉へ行くことになった。……燃えるような紅葉の中をのんびりと芦ノ牧温泉に到着したところ四年生の男子が朝から小便が出ないと言っている。発熱、嘔吐、激しい腹痛等の訴えもない。そこで導尿でもと芦の牧地区の開業医の先生宅へうかがったところ、会津の病院へ早く連れて行った方がよいと教えられ、急いで病院へ運んだ。診断は虫垂炎の穿孔で即手術ということになった。親が東京から来てからの手術だったかどうか覚えがないが、其の日から交替で病人に付添い看護した。

……薄暗い病室で心細く、一刻も早くと親の到着を待ちわびた記憶がある。抗生剤等なかった昔のこと故遂に恢復することなく病院で死亡した。

(福島県北会津郡大戸村芦牧, 目黒区・駒場)

⑩泰和子「私のこの頃」

学徒動員で宮本みち子先生と行った蔵王の南の小原温泉。

(宮城県荊田郡小原村, 浅草区・新堀)

⑪大山とし「思い出すままに」

昭和二十年の一月と二月だったと思う。集団疎開した学童のところへゆく勤労奉仕があった。二週間ずつ二回だったが岡田雅子さんと組んだ。行く先は宮城県の鎌ヶ先温泉で、浅草の富士小学校の四年から六年の子供達が、川に面して建ち並んだ旅館に分宿していた。……東京下町の子供達、深い雪の中でひどい霜やけとアカギレに泣いていた。頓服やマーキュロやチンク油位が、私たちに渡されていたように記憶している。風眼〈濃漏眼〉にかかった子は難儀して、里の開業医に通っていたが、ほかにヴァギナをうつされた女の子も居り、皆温泉客の置き土産であった。

(宮城県荊田郡福岡村鎌先, 浅草区・富士)

⑫今野英子「医専の頃の思い出」

私は第一回目が宮城県の作並温泉で、二回目は福島の船引とか言う所だったと思う。栗原英子さんとごいっしょだったが、二回ともそうだったのかは憶えてはいない。そちらこちらに分散して泊まっている子等を訪ねて雪の道を歩いた。しもやけの子が多く、あとちょっとした傷とか、下痢、かぜくらいで大した病人は出なかった。一度だけ何の病気のクランケか分からないが、仙台の大学病院迄送って行った記憶がある。……作並の時は、仙台から時々老医が見えて指導を受けたが、腸結核の鶏鳴下痢のことを教えて下さったのはこの先生だった。……子等の食事は貧しいのに、先生達は時々馬肉の鍋料理などを食べて居り、私達もよばれたことがあったが、馬肉のことを「ケットバシ」と呼ぶことをここで覚えた。船引での私達の食事はその頃としてはすごく良く、子供達に済まないと思いながら食べた記憶がある。

(宮城県宮城郡広瀬村作並, 浅草区・浅草)(福島県田村郡船引町, 荒川区・第四・第六日暮里)

⑬高橋千代「回想」

五年生の時石田さんと組んで、秋保温泉に浅草の疎開学童の巡回診療に行きました。

(宮城県名取郡秋保村, 浅草区清島・松葉)

⑭河合阿毘子「思い出すままに」

[1944年12月, 1945年2月に] 私は渡辺桃子さんと一緒に、仙台郊外の秋保温泉にある浅草の松葉, 清島国民学校(ともう一つの女子だけの学校名失念)に、第三班として診療に行きました。第一班に地元の石田洋子さんがいらしたので、女医先生(卵にもなっていないのに)と評判がよく、寒いけど空襲はなく、楽しい生活でした。……食事も、朝夕は御飯におつけものか、又は干葉のお味噌汁だけ、昼は御馳走といって、たまに大豆を一晩水につけたものをそのまま天プラにしたものが出る程度でした。その為下痢をする子が多く、シモヤケと共に子供達が可哀想でした。……時々、職員会議と称して、先生方と会食すると、御馳走が出るのです(襖越しに生徒がのぞいたり、聞いたりしていて気が気ではありませんでした)。……温泉地の事とて、学童に淋病が出て、仙台の市立病院の先生方が検査にいらしたり、病院につれて行ったりして、大騒ぎした事もありました。

(宮城県名取郡秋保村、浅草区・清島・松葉・正徳)

⑮植田セツ子

疎開先の無医地区を対象に、医療奉仕のため、二人組で出向くことになりました。三上さんと一緒でしたが、宮城県の鳴子の近くの川渡温泉地で二週間滞在し、学童の健康状態を把握することで、親とはなれた幼い子供達を目の辺りに見て、可哀想でなりませんでした。

(宮城県玉造郡川渡村、浅草区・石浜・山谷堀)

⑯里吉光子「思い出した四年半―我が医専時代」

私の当てられた疎開先は、鳴子温泉をさらに川沿いに入った赤湯とかいう湯治場……霏々と降りしきる北国の雪は美しかったが、現実には東北大学泌尿器科から処方をいただいて、毎日女の子の洗浄をするハメになった。淋菌の感染である。……町の外科医者から「急性虫垂炎」で夜中にトラックを呼んだ子の判断がよかったとほめられ……〔女中部屋への往診依頼に応じた〕

(宮城県玉造郡川渡村赤湯、浅草区・待乳山・田中・金竜)

⑰松井梅子「疎開学童と共に」

帝国女子医専の思い出の中に、北川さんと御殿場の疎開児童と過した二週間がある。昭和十九年十二月初旬、富士山麓の寺へ東京から疎開した児童の世話？をするために行きました。……子供達は主食が“すいとん”，先生方は白米の差別に憤慨して“すいとん”でがんばって白米は口にしなかった。震度六くらいの遠州灘の大地震〔1944年12月7日〕に遭ったのもこの時であった。大揺れの本堂から、子供達をかかえるようにして近くの竹藪に走ったのも、おそろしかった思い出である。境内に急ごしらえのドラム缶の風呂から上がってくる女の子の髪の毛のシラミを根気よく日溜まりでとるのも仕事であった。

(静岡県駿東郡原里村、蒲田区・相生)

⑱江塚笙子「疎開の子供達と二附病〈第二附属病院〉」

〔後藤律子と静岡県引佐郡奥山村方廣寺へ〕一班、二班に続いて私達が始めて行ったのは、昭和十九年十二月十日頃だった様に思う。お正月も子供達と一緒に過した。私達の居室は病室も兼ね、お寺の境内の一番奥にある半僧坊のお堂に続く建物で、八畳と六畳位の二部屋であった。夜は淋しがって泣く子供達によく添い寝をしてやったものだ。……二度目に奥山を訪れたのは三月であった。春の日射しが暖かく、お堂の縁先で日向ぼっこをしながら子供達とたあいなお饒舌をしたものであった。

この様なのかな日々の、突然不思議な病気が流行した。元気な子が急に倒れて呼吸困難を起こす。安静にして寝かして置くとすぐ治る。度々起こす子は東京の親元へ返したが、東京に帰ると発作は起らないと言う。私達は疎開病と名附けたが、一時期は病室が満員になる程で途方にくれたものであった。

(静岡県引佐郡奥山村方廣寺、荏原区・宮前)

⑲森千恵子「追憶」

二人一組で疎開学童の付添診療班とでもいうのか静岡の大石寺に行った。山門を挟んで両側に坊(坊さんの居住)が数戸建ちならんでいたと思う。その一坊に疎開学童と寝起きを共にした。早朝の冷気みなぎる山麓の生活も結構楽しかった。村医の往診について農家に行き、わけもわからずかしこまっていた……

(静岡県富士郡上野村大石寺 荏原区・第二延山)

⑳後藤律子「疎開学童のことなど」

国民学校疎開学童の医療奉仕で、私は江塚さんと組み、静岡県奥山方廣寺へ出かけました。あの当時東海道線で浜松へ行き、それから小さな電車で奥山に行きましたが、ずいぶん時間がかかったのを覚えています。

（静岡県引佐郡奥山村方廣寺、荏原区・第二延山）

㉑長野昌「思い出のかずかず」

疎開学童である玉川小学校の生徒達について行った先は、伊勢原の大山の下で、食糧が乏しかったせいか、子供達はよく地元の干してある乾燥芋を取って叱られていたり、服を裏返すと縫目にびっしりシラミがついていて、大きな釜で煮沸するやら、本当に可哀想でした。

（神奈川県中郡大山村、川崎市・玉川）

㉒山崎万里子「卒業四十周年の雑文」

学童疎開が始まり、一校に二名ずつ派遣されるという事になり、〈動員先は〉福島県は双葉郡折木鉾泉と決まりました。……時折訪れる父兄から東京の様子をきき、矢張り不安は隠せませんでした。然しリュックサックで背負って来たわずかな衛生材料と医薬品だけで、若い医学生二人には、アクシデントも起こらず、衛生室は子供達（五、六年）の溜り場となり……

（福島県双葉郡広野町折木鉾泉、中野区・上高田）

㉓山田二三子「思いでは今も」

昭和十九年の暮、四谷の学童疎開と一緒にいった福島県「折木」「谷地」の寒い僻地での明けくれ。でも学童達のあかるさは、なつかしい思い出となっております。

〔四谷区からの集団疎開先は山梨県、福島県「折木」へ集団疎開したのは中野区上高田国民学校〕

㉔朝日絢子「医専時代の思い出」

子供達の学童疎開で埼玉県のお寺で一カ月ほど診療に携り、村の肺炎の患者さん二人のお手当をしていろいろ苦労した……〔動員先などは不詳〕

㉕漆原利子「思い出」

二人で組んでの疎開学童診療は、亡き伊藤すみ子さんと東北へ行きました。御多聞に洩れず虱をとったり、疥癬の薬を塗ったりしました。実技を余り知らない時期でしたから、一寸切開して排膿するにも切開口が小さすぎて苦心しました。〔動員先などは不詳〕

㉖関多美子「四十年の歲月」

今考えると、よく何も知らないまま学生の身で、疎開学童の診療にあたったものでした。恐ろしくさえなります。東京世田谷の子供達だったと思いますが、彼等彼女等も親元を離れて淋しかったのでしょう、姉の様に仕立ててくれていた様子です。〔動員先などは不詳〕

㉗宮本佳子「卒業四十年の回想」

空襲が激しくなるにしたがい、学童も集団疎開して行きました。しかし、疎開先の保健衛生の指導がゆきとどかず、病人がかなり出て来たため、我々医学生が急きょ動員されて行くことになりました。

少人数で健康管理をまかされ、子供達と日常生活を共にしたことは、我々にとって有益な体験で、医療と福祉を考えてみるよい機会にもなったと思います。〔動員先などは不詳〕

②⑧門馬康子「想い出」

やがて学徒動員となり、地方に疎開をやむなくさせられて親元をはなれた学童達たちのために付添いました。栄養失調の子供達は本当に病気勝ちでした。〔動員先などは不詳〕

②⑨山本和子「焼跡に聞いたヴァイオリン」

〔空襲下で〕火傷で口唇の皮膚もない患者さんに竹を切って口にくわえさせて一生懸命治療したり疎開児童の診療の為に伊藤綾子さんと二人であちこちのお寺を歩きまわって、共に過ごしたりした事をちっとも苦しみとは感じていなかった……〔動員先などは不詳〕

③⑩折橋秋子〔タイトルなし〕

「疎開学童へ聴診器診療」という記事が、昭和十九年十一月十六日読売報知新聞に掲載されました。くわしい記事・写真は省略します。二週間ずつ二回箱根湯本温泉へ行きました。〔引用文中の記事は『読売報知』東京版による限り確認できなかった〕⁽¹⁰⁶⁾

上記の30編の回想は、東京女子医専「学徒医療隊」参加者の回想と、ほとんど重なっている。

むすび

集団疎開先における子どもの健康にたいする不安は、学童集団疎開を円滑に遂行するうえで隘路のひとつであった。しかも、それは教育上の措置によって打開可能な性質の問題ではなかった。まして、疎開先が無医村ともなれば、事態は暗澹たらざるを得ない。政治の言葉の操作だけでは、父母を安心させることはできない。女子医専生徒の学童集団疎開先無医村への動員は、東京都が文部省に要求したとの言に従えば、東京都教育長がようやく見出した方策である。

『東邦大学50年史』は、「次の出張医療班の番を待つ」、つまり学童集団疎開先無医村への動員の順番を待っている宮本佳子の手記「医療班奉仕の番を待ちつつ」（1944年12月8日）を載せている。以下はその手記である。

学校の正門や手摺の鉄も供出で何時しか木製にかわり、広かった校庭には私達の築上げた多くの防空壕があり、絹の靴下にスカートの姿も鉄カブト、モンペと凜々しく固められ、遠足の積立金も皆こぞって国防献金に致しました。また1年には宮城外苑の清掃、3年の夏には第1小隊三共製薬、第2小隊血液検査、第3小隊は陸軍省、冬には〔陸軍〕衛生材料廠、凸版印刷工場へと第一線を偲びつつ懸命な幾日かを勤務奉仕致しましたが、最も医専の学生として嬉しく、奉仕がいのあるものと思われるのは今回の国民学校疎開児童の医療奉仕でありましょう。24カ所の無医村に2名ずつ組になって参り、今まで先生より一つ一つ指導を仰いでおりましたものが自分一人で聴診し治療をするのだと思いますと、責任の重大なことに身が引き締まるのを覚えます。

これもまた間もなく卒業して世に出ようとしている私達にとっていろいろの方面によき試練となり、経験となることでしょう。既に第1班の方々は第1回の診療を終え、第2班の方がこれを引きつぎました。先生、お姉様、と慕いよる可愛い無邪気な子供達、次の時代を負うて立つ第二の国民に虚弱な子供を1人でも少なくすべく、今頃はもう既に雪の積

りしと聞く東北の2里、3里の道をあちらの子供達よりこちらの子供達へと巡回しつつ、冷たい聴診器を握りしめ診療にいそしんでいることでしょう。

私達最後の第3班の者は先発隊の報告を聞き、不足な薬品、用具を備えつつ交代の来る日を待ち望んでおります⁽¹⁰⁷⁾。

「医専の学生として嬉しく、奉仕がいのあるものと思われるのは今回の国民学校疎開児童の医療奉仕」と記したのは、「24カ所の無医村に2名ずつ組になって参」とあるとおり、学童集団疎開先無医村への動員である。工場などへの「勤労奉仕」と対比しながら、学童集団疎開先無医村への動員は「奉仕がいの」があるとの記述は、帝国女子医専生徒の気概、あるいは受容を示している。「交代の来る日」を待ち望んでいたと記す一方で、「不足な薬品、用具」は眼前の事実であった。宮本佳子の手記は不安と緊張に満ちてもいた。

東京都・神奈川県 of 集団疎開先中あわせて181カ所の無医村のうち、東京女子医専からは22カ村へ、帝国女子医専からは24カ村へ、約2ヵ月にわたって女子医専生徒を動員した意味はあったであろうか。

新聞各紙は、女子医専「学徒医療隊」員を「女医学徒」と記す一方で、「女医」と呼んだ。

例えば、1944年11月18日付『読売報知』（朝刊）は、帝国女子医専「学徒医療隊」の福島県岩城郡江名町上神白（中野区北原国民学校集団疎開先）への動員を報じ、「疎開地はお医者へ三里、部落の馬で迎へにいつてもらふという所なので子供たちも“お姉さんのお医者さんが来た”と腕にとり縋って甘える喜び方」と記した。また、同じ記事で「東北本線石橋駅から三里も奥に入りこんだ医師のない村」である栃木県河内郡本郷村（牛込区早稲田国民学校集団疎開先）への東京女子医専「学徒医療隊」の動員を報じ、「若い女医さんの声にヨイコの顔も明るくほゝゑむ」と述べている。

1944年11月24・25日付『茨城新聞』は、茨城県久慈郡袋田村（向島区中川国民学校集団疎開先）へ出動した東京女子医専「学徒医療隊」を、「東京女医専若き二学徒の訪れ」、「烈々たる女医学徒の意気」と見出しを掲げ、中川国民学校教頭が児童に「先生」と紹介したと記し、記者も繰返し「二人の女先生」と述べていることは先述した。

1944年11月21日付『毎日新聞』（茨城版）も、帝国女子医専「学徒医療隊」の福島県岩城郡江名町上神白（中野区北原国民学校疎開先）への動員を、「一月程前に六年生の女の子が急性腎臓炎で死亡したため父兄の間に総引揚げとまで騒いだこともある。それだけに女医の二人は重大な責任と一抹の不安を感じて来たのだった」と、「女医」と報じた。

水上国民学校学童集団疎開引率教員・宮本秀夫は、「心強かったのは女子医専の学生がインターンとして交替で泊り込んで診療してくださったこと」と回想している⁽¹⁰⁸⁾。1972年のことである。1944～1945年に茨城県新治郡斗利出村法雲寺の水上国民学校戦時疎開学園へ、交代で出動した加藤淑子・加賀見道子・高橋ミヤ・田口水井・大滝智恵子・木下いう・新井幸子・阿部和枝⁽¹⁰⁹⁾への、1972年のメッセージである。

茨城県那珂郡神崎村上宮寺へ集団疎開していた向島区請地国民学校児童酒井正道は、「手指のしもやけが酷く、指が膿でくっついてしまうほどで、女子医専の学生さんが慰問にきて、治療してもらったことが印象強く残っている」⁽¹¹⁰⁾と述べている。「慰問」した「女子医専の学生さん」は、上宮寺へ出動した東京女子医専「学徒医療隊」の川崎綾子・川村美代子（第一班、1944年11月11日～12月3日）、岡田佐紀・星加光江（第二班、1944年12月2日～12月24日）、氏

名不明の第三班（1945年12月24日～1945年1月14日）の2人、第4班（1945年1月14日～1月30日）の2人のいずれかである⁽¹¹¹⁾。

宮城県荏田郡小原村に疎開した神谷彰宏（東京都浅草区新堀国民学校5年生）は、1945年1月30日の日記に、それ以前のことを記してはいないのに、「今日は女医の先生におはかれした。おやつにみかん一つ。」と、帝国女子医専「学徒医療隊」出動の最後の日を書き留めた。日記は2009年に『新版 学童疎開下谷浅草の記録』の一部となった。それまでは伝わる事がなかった国民学校5年生の1945年のメッセージである。神谷彰宏が「おはかれ」した「女医の先生」は、小原村へ出動した延べで8人の帝国女子医専「学徒医療隊」の誰か——氏名が判明するのは泰和子のみだが——である⁽¹¹²⁾。

集団疎開児童や引率教員が記録し、記憶していたのは、「女子医専の学生」、あるいは「女医の先生」であり、文部大臣命令で出動した女子医専「学徒医療隊」の勤労働員としてではない。その当時においても女子医専「学徒医療隊」とは知らなかった可能性は高い。一方で、集団疎開先が無医村であったが故の、女子医専生徒との邂逅であったことに触れた回想を見出すことはなかった。

女子医専生徒の無医村動員を推進した文部・厚生両省は「学寮嘱託医補助」に止め、東京都は「医師の資格を取得前の身分」の自覚を求め、加藤淑子が「都側の注意の要点は、未だ医師の資格を取得前の身分を自覚して守備範囲を逸脱せぬように、に尽きた」と記していたことは先述したが、「戦中日記抄」や回想は、「学徒医療隊」の「診療補助・保健指導」が「医師の資格を取得前の身分」を逸脱していたことを示している。

加藤淑子の「斗利出村再訪」詠「たたかひの激しかりし日無醫村に醫の代りして下駄を貰ひし」は、学童集団疎開先無医村において、女子医専生徒が医師であったことを、静かな矜持をもって示している。集団疎開先無医村において、女子医専生徒は紛れもなく医師であった⁽¹¹³⁾。

注

(1) 「極秘 学童疎開促進要綱案」, 「学童疎開ノ促進ニ関スル件ヲ定ム」(1944年6月30日), 『公文類聚』第68編・昭和19年・第74巻・学事2・国民学校・雑纂(請求記号: 本館-2A-013-00・類02872100), 国立公文書館所蔵。

(2) 「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」(1944年7月10日付東京都国民教育課学事係起案原議「昭和十九年度都歳入出予算追加ニ関スル件」添付資料, 東京都公文書館編『資料・東京都の学童疎開』東京都情報連絡室都政情報センター管理部事業課, 1996年, 257～259頁)。

『資料・東京都の学童疎開』は、1944年7月11日付東京都国民教育課学事係起案原議「秘 学童集団疎開先県各区别割当ニ関スル件同」に、「参考」として添付してある「秘 帝都学童集団疎開実施細目(案)(一九・七・五)」は、「極秘 帝都学童集団疎開実施 細目」と「同一内容」と記している(258頁)。

『東京大空襲・戦災誌』第5巻(『東京大空襲・戦災誌』編集委員会編, 東京空襲を記録する会, 1974年)は、防空総本部が「帝都学童集団疎開実施細目」を定め、「七月一〇日防空総本部より閣議決定とともに発表された」(712頁)と述べ、〈資料53〉には「帝都学童集団疎開実施細目 昭和一九年七月一〇日 防空総本部発表」(214頁)とタイトルを付している。同書が出典とした『東京都戦災誌』(東京都編・発行, 1953年)は、「昭和19年6月30日閣議決定 7月10日防空総本部発表」と付した「学童疎開促進要綱」に続けて、「帝

都学童集団疎開実施細目」を載せている（225～227頁）。

「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」を添付した「昭和十九年度都歳入出予算追加ニ関スル件」には、防空総本部にかかわる記載はない。

1944年7月9日付『朝日新聞』（朝刊）は、「八日午後二時から内務大臣官邸に東京都長官、警視總監、神奈川県知事外十二県知事を招集、安藤内相、文部省藤野総務局長以下が出席して学童疎開の具体的方策について意見が交換されたのを機会に、同日別項の様な情報局発表が行はれ、わが学童疎開に関する政府の方途が明かにされた」と報じた。

「別項」は、「政府方途」の概要を記した「情報局発表」（囲み記事）のことである。「政府方途」は「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」の概要に符合している。

同日付『読売報知』は、「学童疎開はかねてから内務省防空総本部を中心にその具体化を進めてゐたが、いよ／＼成案まとまり実施することを決定、八日情報局から発表され学童疎開はここに本格的に推進されることになった」、「内務省では学童疎開の具体的方策について八日午後二時から内相官邸で関係都県の懇談会を開催大達東京都長官、薄田警視總監、近藤神奈川県知事はか十二県知事、本省側より安藤内相、唐澤次官その他各省係官が列席、京浜地方の学童疎開についてそれ／＼懇談を行つた」と報じた。同時に「実施方針 情報局発表（七月八日）」として、「具体的方策」の概要を記した。「実施方針」は「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」の概要に符合している。

以上を勘案すれば、防空総本部は1944年7月5日以前に「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」の案文を作成し、遅くとも7月8日には成案を得て、午後2時から内相官邸において、東京都長官・警視總監・東京都と神奈川県からの学童集団疎開先となる県知事を招集し、成案を示して趣旨を徹底し、その日のうちに情報局が「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」の概要を発表したと判断するのが至当である。

一般の人口疎開政策（参謀本部『国民防空指導ニ関スル指針』1940年5月）から学童集団疎開実施にいたる過程については、拙著『学童集団疎開史——子どもたちの戦闘配置』（大月書店、1998年、22～74頁）に詳述した。以下拙著『学童集団疎開史』と略記する。

- (3) 1944年7月22日付疎開地方長官宛文部次官通牒「学童集団疎開竝ニ之ガ経費ニ対スル国庫補助ニ関スル件」、文部省編・発行『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』44～52頁。
- (4) 学童集団疎開参加への強力な「勧奨」については、拙著『学童集団疎開史』（93～105頁）を参照されたい。
- (5) 1944年8月5日付『朝日新聞』は、東京都板橋区（現板橋区、練馬区）の上板橋第三・練馬・練馬第二・石神井東・石神井西・大泉第二国民学校児童198人が群馬県北甘楽郡妙義町へ、品川区城南第二国民学校児童159人が都下西多摩郡瑞穂町へ集団疎開したと報じた。しかし、1944年8月4日に板橋区から群馬県北甘楽郡妙義町に集団疎開したことを確認できるのは、上板橋第三国民学校児童（113人）のみである（「区内学校疎開一覧」、練馬区教育史編纂委員会編『練馬区教育史』第1巻、東京都練馬区教育委員会、1975年、790・793～794頁）。
- (6) 都府県毎の集団疎開児童数については、拙著『学童集団疎開史』の「〈表11〉学童疎開実施状況（1944年9月25日現在）」（115頁）、「〈表12〉沖縄県の集団疎開児童数（1944年9月20日現在）」（114頁）を参照されたい。
- (7) 文部省「疎开学童都道府県別受入ニ関スル調 一九・一〇・二六現在」,「文教協会（重田定正寄贈分）」（分類番号0305-24）、国立教育政策研究所教育図書館所蔵。以下「文教協会（重田定正寄贈分）」を「重田文書」と略記する。
- (8) 拙著『学童集団疎開史』169～170頁。集団疎開児童の保健衛生問題全般については、「Ⅷ 顔面蒼白にして精気を欠き……」（169～189頁）を参照されたい。

宮寄順子は、東京女子医学専門学校夏季無料診療活動を活写し、東京市における医師と医療の偏在、住民の経済的格差が、住民を医療から遠ざけ、且つ診療機会を渴望していたことを究明し、東京女子医学専門学校では「一九四四年、小グループに別れて東京から疎開地へ向かった児童の診察に赴くという活動も行っている」、「この活動は同時期、帝国女子医学薬学専門学校でも行われていた」と述べている（宮寄順子「女子医学生達の銚後——東京女子医学専門学校の夏季無料診療活動」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第101集、2003年3月、321・325頁）。

- (9) 東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会編『たんぼぼ 東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会文集』（東京女子医学専門学校昭和20年卒業クラス会（昭二十会）、2007年、以下『たんぼぼ』と略記する）、江塚笙子編『ここに道あり』（東京出版センター、1985年）の所在は、山本美穂子氏（北海道大学大学文書館員）の御教示による。両書の複写の提供も同氏に負っている。

大野芳『ふぞろいの夏』（光人社、1986年）は、主に『ここに道あり』に依拠したドキュメンタリーである。

- (10) 加藤泰子「思い出すこと」、『たんぼぼ』78頁。

「原画展」については、蓮田宣夫「学童疎開原画展 関係者に感謝」（全国疎開学童連絡協議会『かけはし』第59号、2007年5月15日）を参照されたい。

- (11) 野間正秋『医療制度改善論』ダイヤモンド社、1940年、92～94頁。野間正秋は、刊行時に厚生省衛生局医務課長に就いていた。全村数は、『大日本内務省第五十二回統計報告』（1944年、1頁）によった。

- (12) 中村康『無医村報告書』大新社、1944年、126頁。本書は、日本医科大学が行った無医村診療学徒隊による無医村診療（1940年12月～1942年12月）の報告書である。中村康は、医師在住隣村との距離の基準は「村役場の存在する所をとる故、此と離れた部落は其以上不便であり又医師の来訪も困難であると考へられる」（125頁）と述べている。

- (13) 東京帝国大学医学部医学徒報国隊埼玉班「埼玉班報告」、医学徒報国協会編発行『昭和十七年度 医学徒報国隊農村班報告』1943年、110頁。

- (14) 野間正秋『医療制度改善論』80・97頁。

- (15) 高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」 戦時期日本の「社会改革」構想』岩波書店、2011年、259～260頁。無医村問題に関連して以下の文献も参照した。

藤野豊「「無医村」問題の登場——ファシズム期富山の社会史（4）」（富山国際大学人文社会学部『人文社会学部紀要』第2巻、2002年3月）、小林輝行「太平洋戦争と「医学徒報国隊」——北安曇郡小谷村にみる東京帝国大学医学部生の無料診療活動を中心に」（長野県地方自治研究センター『信州自治研』第177号、2006年11月）、中静未知『医療保険の行政と政治』（吉川弘文館、1998年）、中静未知「書評と紹介 高岡裕之著『総力戦体制と「福祉国家」 戦時期日本の「社会改革」構想』（『日本歴史』2013年7月号）、高岡裕之「医師の近代化と地域分布——「医療環境の社会史」を考えるために」（『歴史科学』199号、2009年）、同「近代日本の地域医療と公立病院」（『歴史評論』第726号、2010年10月）。

- (16) 山梨県総務部調査課「県治概況」（山梨県編・発行『山梨県史 資料編17 近現代4』2000年、590頁）。「県治概況」は、山梨県「昭和十七年六月 戸田侍従御差遣関係 管内一班状況」（『山梨県史 資料編17 近現代4』583～586頁）の付属文書である。

「戸田侍従」は宮内省侍従戸田康英である（内閣印刷局編・発行『昭和十七年七月一日現在 職員録』17頁）。戸田康英は、「大東亜戦争下総力を挙げて聖業の完遂を翼賛し奉る一億民草の日常に深く配慮をそそがせ給ひ、このたび全国津々浦々はもとより草深き山間の僻地まで特に侍従を御差遣遣ばされ、雄々しく、たくましく総力戦をたゝかひ抜く生産戦士をはじめ国民銚後の活動、ことに一億一心協力奉公の誠をいたしつゝある実情を具さに視察せしめらる旨」の、天皇の「御沙汰」（1942年4月25日付『読売新聞』朝刊）

にもとづき、1942年6月13～15日に山梨県内20箇所を視察することになっていた（1942年6月4日付『朝日新聞』朝刊）。

1941年12月末日現在の山梨県の市町村数は、山梨県知事官房調査課編・発行『昭和十六年 山梨県統計書』（1942年、7頁）によった。『医療制度改善論』（93頁）では、山梨県の無医村は、1927年6月には102ヵ村、1930年3月には104ヵ村、1936年5月には115ヵ村、1939年5月には115ヵ村と記している。

- (17) 山形市医師会史編纂委員会編『山形市医師会史』後編、山形市医師会、1980年、52・70頁。
- (18) 「極秘 帝都学童集団疎開実施細目」、『資料・東京都の学童疎開』258頁。
- (19) 「国民学校長会議ニ於ケル指示事項」、『資料・東京都の学童疎開』267頁。
- (20) 1944年7月25日付集団疎開先各県衛生課長・日本医師会・東京医師会宛東京都教育局長名依頼状「学童集団疎開ニ関シ医師会等ノ協力方依頼ニ関スル件」、『資料・東京都の学童疎開』275～276頁。
- (21) 「学童疎開問答」、『都政週報』第48号、1944年7月29日、1・5～6頁。

岩城こ登は、1944年9月5日付葉書で、宮城県玉造郡鳴子町に集団疎開していた長男（東京都小石川区林町国民学校4年生）宛に、「病気をしないようにして下さい。お母さんは別に心配なことはありませんが、……マント反応が陽性になっているので、それだけが気がかりです。何度もいったことですから、わすれないでしょうが、くれぐれも気をつけてください」（岩城基之『学童集団疎開 記録と記憶を綴る』創英社、2013年、116頁）と書き送っている。1944年11月24日付葉書（『同上』、117頁）には、「〔引率教員に〕お願いしましたが、疲れるようでしたら、先生にお願いして、錬成は休ませて頂きなさい」とあり、引率教員に健康上の配慮を懇請していたことがわかる。

「疎開地には医師を囑託して置き、その上養護訓導や養護婦、又衛生に心得のある寮母等もついてゆく」としても、父母の心痛は解消しない。

なお、東京都小石川区から宮城県玉造郡鳴子町へ集団疎開した児童の健康状態については、拙著『学童集団疎開史』（173～175、185～189頁）を参照されたい。

- (22) 「集団疎開学童に関する緊急対策就中保健対策について 官房技監室 一九・七・二九」、『重田文書』（分類番号0230-18）。

「官房技監室」は不詳だが、厚生省五十年史編集委員会編『厚生省五十年史（記述編）』厚生問題研究会、1988年、410頁）は、「保健衛生の向上を図るとともに各局を通じて技術の一貫性を保持する技監の制度を設けた」と述べている。技監設置は1942年11月1日である（同書、51頁）。厚生省大臣官房に技監と医療課技師とを兼任している技師を配してあることは、内閣印刷局編・発行『昭和十八年七月一日現在 職員録』（1943年、161頁）によって確認できる。

技監については、山田敏之氏の御教示を得た。

- (23) 宮城県医師会編・発行『宮城県医師会史（沿革編）』1976年、409～410頁。平仮名表記は、原文のとおりである。
- (24) 『同上』410～411頁。
- (25) 1944年8月22日付地方長官宛文部省体育局長通牒「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」、『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』16～21頁。
- (26) 1944年8月29日付疎開先地方長官宛文部省体育局長・厚生省衛生局長通牒「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ニ関スル件」、『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』22～25頁。
- (27) 1944年9月6日付受入側地方長官宛厚生省衛生局長・文部省体育局長通牒「疎開学童ノ保健衛生ニ関スル件」、『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』27～35頁。配給するのは、アスピリン・リゾールなど58種類の「集団疎開学童用医薬品」と、注（18）と同じ「家庭薬」、「医薬品」、「衛生材料」、「医療衛生用品」

である。

- (28) 1944年9月6日付日本医師会長・日本歯科医師会長宛厚生省衛生局長通牒「疎開学童ニ対スル医療及保健指導ニ関スル件」、『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』36～37頁。
- (29) 1944年10月8日付国民学校長宛東京都荏原区長西谷多喜夫通牒「集団疎開学童用応急医薬品等特別配給ノ件」、『品川の学童集団疎開資料集』420～421頁。「特別配給」医薬品がいつ荏原区の集団疎開先へ届いたのかは不詳である。
- (30) 1944年9月7日付『朝日新聞』記事の所在は、台東区学童疎開記録刊行会（代表佐々木直剛）編『新版学童疎開下谷浅草の記録』（桜出版、2009年、569～571頁）に負っている。

東京都下谷区から福島県耶麻郡熱塩村・北会津郡東山村へ集団疎開した国民学校・児童数などは、全国疎開学童連絡協議会編『学童疎開の記録』1（大空社、1996年、415・416頁）によった。

- (31) 福島県警察部衛生課編・発行『福島県に於ける乳児の出生、発育、栄養方法並に死亡原因に就て』1938年、7・24～25頁。末尾欄外に「備考 昭和十年末日現在警察統計による」と付してある「無医村一覧表」（7～8頁）によれば、福島県耶麻郡熱塩村・同 北会津郡東山村は無医村である。

管見の限り、『福島県に於ける乳児の出生、発育、栄養方法並に死亡原因に就て』以外には、都道府県毎の無医村一覧を見出せなかった。

- (32) 「全国無医村調査 （昭和十四年八月現在）
（厚生省衛生局調査）」, 産業組合中央会編・発行『昭和十七年版 第十回 産業組合年鑑』1942年、307～308頁。
- (33) 野間正秋『医療制度改善論』92～94頁。
- (34) 田中守「疎開学童に対する当面の医療対策」、『日本医事新報』第1145号、1944年9月16日、5頁。
- (35) 『昭和十九年十月 学童疎開関係事務提要』37～39頁。
- (36) 「疎開学童都府県別受入地無医村数其他ニ関スル調 一九・九・二六現在」,「重田文書」（分類番号0305-25）。作成部署の記載はない。同調査を手許に保管していた重田定正が文部省体育局保健衛生課長であったことを勘案すれば、調査したのは文部省体育局保健衛生課であろうか。
- (37) 「疎開学童都府県別受入ニ関スル調 一九・一〇・二六現在」,「重田文書」（分類番号0305-24）。作成部署の記載はないが、注（36）と同様に、文部省体育局保健衛生課との推測は許されるだろう。
- (38) 「疎開学童都府県別受入地無医村数其他ニ関スル調 一九・九・二六現在」,「疎開 学童都府県別受入ニ関スル調 一九・一〇・二六現在」は、いずれも5,344人が福島県の無医村15ヵ村へ集団疎開したとある。

福島県全域の無医村名が判明する「無医村一覧表」（1935年12月末日現在）（『福島県に於ける乳児の出生、発育、栄養方法並に死亡原因に就て』）に、福島県への集団疎開先（「東京都学童集団疎開先一覧」,『学童疎開の記録』1）を重ねた結果、1944年9月7日付『朝日新聞』が「学童疎開の現地報告」と報じた耶麻郡熱塩村・北会津郡東山村を含め、福島県における集団疎開先無医村は下記の8ヵ村である。7ヵ村は不詳である。頁数は『学童疎開の記録』1の該当箇所である。

- ①信夫郡土湯村（荒川区、第六峡田・赤土・後田国民学校）463・464頁
- ②伊達郡睦合村（荒川区、瑞光国民学校）462頁
- ③安達郡岳下村（牛込区、鶴巻国民学校）411頁
- ④南会津郡江川村（目黒区、烏森国民学校）431頁
- ⑤北会津郡東山村（下谷区、台東・入谷・西町・谷中・山伏・大正・桜丘・根岸国民学校）415頁
- ⑥耶麻郡熱塩村（下谷区、金曾木・竜泉・東盛国民学校）416頁
- ⑦耶麻郡翁島村（下谷区、御徒町・忍岡国民学校）416頁
- ⑧岩城郡箕輪村（中野区、東中野国民学校）452頁

- (39) 「無医村・成瀬村の場合」, 松田解子『女の問題』モナス, 1940年, 64～65頁。
- (40) 指示事項「(一) 集団疎開児童の保健対策に関する件」②～⑩の無医村の状況は, 医学徒報国協会編・発行『昭和十七年度 医学徒報国隊農村班報告』(1943年, 66・68・74・75・104～105・118・201・222・223頁) によった。
- ②～⑤, ⑦～⑩の集団疎開学校名は「学童集団疎開先一覧表」(『学童疎開の記録』1) に, ⑥のそれは東京都国民教育課^{学童疎開係}「学童疎開市町村 別学寮調 (昭和20年6月末現在)」(『資料・東京都の学童疎開』) によった。それぞれ該当箇所を示した。
- ②東京都南多摩郡川口村 (東京都品川区, 鮫浜国民学校) 427頁
- ③東京都西多摩郡檜原村 (東京都品川区, 城南国民学校) 428頁
- ④神奈川県津久井郡佐野川村 (川崎市, 中原国民学校) 492頁
- ⑤神奈川県中郡北秦野村 (横浜市, 滝頭国民学校) 488頁
- ⑥群馬県利根郡池田村 (東京都板橋区板橋, 橋第一国民学校) 467頁
- ⑦山梨県南都留郡中野村 (東京都麹町区, 富士見国民学校) 403頁
- ⑧奈良県磯城郡多武峰村 (大阪市東成区, 今里国民学校) 514頁
- ⑨大阪府南河内郡千早村 (大阪市東住吉区, 田辺国民学校) 516頁
- ⑩大阪府南河内郡東條村 (大阪市東住吉区, 南田辺国民学校) 516頁
- (41) 東京都新宿区教育委員会編・発行『新宿区教育百年史』1976年, 519頁。
- (42) 1944年3月14日付「秘 疎開施設調」, 1944年5月18日付「疎開学園教職員備員調」, 1944年5月31日付「都立飯坂戦時疎開学園調書」, 1944年6月9日付「東京都国民学校戦時疎開学園設置予定調」は, それぞれ『資料・東京都の学童疎開』(8・99・145・158頁) によった。
- (43) 1944年6月7日付東京都長官宛福島県知事回答「東京都国民学校戦時疎開学園設置方ノ件」, 『同上』155頁。
- (44) 1944年6月20日付福島県知事宛東京都教育局長礼状「牛込区戦時疎開学園開設に関し種々配慮ありたる福島県知事宛礼状送付の件」, 『同上』183～184頁。
- (45) 1944年6月28日付東京都長官大達茂雄宛東京都視学官野口彰「復命書」, 『同上』195～196頁。
- (46) 大阪市「学童集団疎開実施状況調」, 赤塚康雄編著『大阪の学童疎開』クリエイティブ21, 1996年, 279～548頁。学校毎の学校長・派遣訓導・寮長・寮母・作業員・寮嘱託・寮医氏名, 児童(総数, 学年及性別), 寮舎(寮名:施設名, 所在地・管理者, 最寄駅及交通便), 学寮毎の寮名(施設名)・児童数(学年, 性別), 寮母・作業員・寮医あるいは嘱託医・寮嘱託氏名, 現地校名, 備考(疎開先府県地方事務所, 警察署), 電話欄からなっている。石原佳子は, 「おおむね一九四四年九月末前後の疎開状況を示すもの」だが, 収録されているのは1944年に疎開したとみなされる市内262校のうち222校分であり, 未収録のものは「学童疎開地一覧 (昭和二十年五月一日現在)」, 「学童集団疎開地一覧 (昭和二十年七月一日現在)」によって補足したと述べている(石原佳子「大阪市教育局「学童集団疎開実施状況調」解説——寮舎の配置と移動」, 『大阪の学童疎開』271頁)。「補足」は欄外に「昭和20年5月15日調」などと記してある。
- 「大阪市立国民学校集団疎開実施状況 (昭和19年9月末)」(新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第7巻, 大阪市, 1994年, 1040頁)では, 大阪市立国民学校寮舎数は1,659となっている。
- なお, 「学童疎開地一覧 (昭和二十年五月一日現在)」(「昭和二十年五月十五日調 学童集団疎開地一覧 大阪市教育局」)は, 大阪市史編纂所編『大阪市学童集団疎開地一覧』(上)(大阪市史史料第45輯, 大阪市史料調査会, 1995年8月), 『大阪市学童疎開地一覧 (付録) 瀬田寮の教育』(下)(大阪市史史料第46輯, 1996年2月)に翻刻されている。
- (47) 「集団疎開児童保健担当医師調 昭和一九・一〇 島医」, 1944年10月16日付大阪市長宛島根県内省部長

通知「集団疎開児童保健担当医委嘱方ノ件」別紙、『大阪市教育センター研究紀要 学童集団疎開史研究（Ⅰ）』第24号，1989年3月，221～222頁。

- (48) 「堀江国民学校疎開現地寮舎」、『大阪の学童疎開』483頁。
- (49) 「集団疎開児童保健担当医師調 昭和一九・一〇 島医」、『大阪市教育センター研究紀要 学童集団疎開史研究（Ⅰ）』第24号，222頁。
- (50) 「大阪市堀江国民学校疎開地（島根県） 昭和二十年五月十五日調」，「昭和二十年五月十五日 学童集団疎開地一覧 大阪市教育局」、『大阪市学童集団疎開地一覧』（上）』61頁。
- (51) 聖和・五條・真田山国民学校「現地寮舎」は，それぞれ『大阪の学童疎開』（268・269・270頁）によった。
- (52) 1944年10月26日付大阪市長宛奈良県医師会長「集団疎開学童並ニ職員等ニ対スル嘱託医任命ニ関スル内申」添付名簿，1944年12月23日付奈良県医師会長宛大阪市長回答「疎開学童ニ対スル嘱託医任命ノ件」，『大阪市教育センター研究紀要 学童集団疎開史研究（Ⅰ）』第24号，227頁。
- (53) 聖和・五條・真田山国民学校の嘱託医配置状況は，それぞれ『大阪市学童集団疎開地一覧』（上）（103・104・112頁）によった。
- (54) 「野口茂夫（当時先生）のお話」，『新版 学童疎開下谷浅草の記録』464～465頁。

「桂屋」については，佐々木直剛が「私も刺激されて学童疎開の記録に弾みがついた」（全国疎開学童連絡協議会『かけはし』第58号，2006年12月20日，3頁）と述べている永六輔「わが母校の名は桂屋旅館 次の世を背負ふべき身ぞたくましく——ある学童疎開の記録」（『文芸春秋』1966年8月号，242～248頁）がある。「わが母校の名は桂屋旅館」は，谷幹一・青島幸男・黒柳徹子・渥美清・新堀国民学校学童疎開関係者などが登場するおかしみと憤怒の文章である。

永六輔は「舞台化する」（243頁）と述べていることにかかわって，高瀬善夫が「永氏の上級生たちは，疎開地から帰るとき，上野駅で空襲にあい，迎えにきた家族もろともに全滅してしまったのだという。こんな事実を，当事者以外のどれだけの人が知っていよう。しかも，家族もろともに全滅している以上，この疎開集団のくわしい記録をつくることには，多くの困難があるにちがいない。ことほどさように，学童疎開について知らされていることは，まだ氷山の一角にしかならず，事は過去に属しつつも，なお新しいことといわねばならない。そしてその多くは，体験者の心の中で，いまでも煮えたりぎるように生きているにちがいない」（岡本博・福田定良『現代タレントロジー』法政大学出版局，1966年，419頁），「疎開について記録することは，過去に属することであるようでありながら，なお今日なまなましい問題であり，それをいかに書くかは，今日をいかに生きているかにもかかわってくるはずである」（420頁）と指摘している。

『現代タレントロジー』（420～422頁）は，「あとの発掘ではなく，当時の現場からの報道の一例」に，1945年7月6～7日に米軍が行った甲府空襲で，東京都目黒区月光原国民学校疎開児童2人が「戦死」と報じた1945年7月11日付『毎日新聞』記事（執筆は岡本博）を載せている。

岡本博は特派員として，同記事リードに「去る七日甲府市の空襲で二名の疎開学童が戦死した，当夜の状況から見て附添ひの訓導は最善を尽くしてゐる，子供らもまた実に勇敢だった，それは避難といふよりむしろ激しい戦ひだったのだ，師弟ともにB29の暴力に対して遺憾なく戦ひ続けたといへよう，しかも幼い二つの命は亡くならずにはゐなかつた，国家が万全の処置をもつて早くから護つてきた疎開学童が，このやうに散華したといふことはすでに本土決戦の仮借なき様相を教へる，同時に今更の如くこれら幼少の生命を護り通し得なかつたわれら父兄は，自らの非力に胸を噛む思ひを禁じ得ないとともに，おのづから勃々たる復仇の念の湧き上るのを覚えるのだ」と記している。

永六輔が述べた「舞台化」（ミュージカル）は未詳である。

- (55) 東淀川区大隅国民学校（大阪府三島郡見山村勸農道場），同区喜連国民学校（島根県邑智郡出羽村羽住屋

旅館), 浪速区敷津国民学校(滋賀県甲賀郡水口町), 西区明治国民学校(島根県簸川郡平田町妙寿寺)は, それぞれ『大阪の学童疎開』(307・335・443・484頁)によった。

- (56) 東京都教育局「学童集団疎開寄宿舎移転計画案」,「1944年11月7日付東京都教育局国民教育課学事係起案原議「学童集団疎開学寮移転ニ関スル件」,『資料・東京都の学童疎開』332~334頁。

同起案原議添付「移転又ハ分宿ヲ要スル疎開学寮調(二)」(『資料・東京都の学童疎開』334~337頁)には, 後に女子医専「学徒医療隊」の動員先となった下記の4ヵ所を見出せる。

() は学寮数・児童数・移転理由である。

群馬県勢多郡黒保根村梨本鉱泉(1学寮364人, 食糧難)

新潟県中頸城郡名香山村(13学寮700人, 厳寒地設備不完全, 交通途絶)

長野県下高井郡豊郷村野沢温泉(26学寮1,418人, 収容過多, 一部要移転)

宮城県玉造郡川渡村(1学寮176人, 腐朽多湿)

4ヵ所はいずれも移転理由に無医村であることを挙げていないが, 受入側の事情を斟酌せずに記すなら, 医師の不在以前に宿舎の暖房対策・食糧確保・冬期間の交通途絶が先決問題であった。移転が実施をみたかどうかは未詳である。

- (57) 東京都国民教育課学童疎開係「学童疎開 市町村別学寮調(昭和20年6月末現在)」,『資料・東京都の学童疎開』442・471頁。

杉並区新泉国民学校からは, 1944年度には4ヵ所(長野県北佐久郡小諸町・大里・小沼村, 南佐久郡野沢村)に375人が疎開していた。1945年度には上記4ヵ所に3ヵ所(北佐久郡伍賀村・志賀村, 南佐久郡岸野村)を加えた7ヵ所に542人が疎開しており(杉並区教育委員会編・発行『杉並区教育史』下巻, 1966年, 494頁), 大里村からの移転はなかったのであろう。

- (58) 大阪市東住吉区田辺国民学校集団疎開先である大阪府南河内郡千早村2学寮の「寮医」欄は空白(大阪市教育局「学童集団疎開先実施状況調」,『大阪の学童疎開』331頁)であり, 同市淀川区北豊崎国民学校疎開先である京都府天田郡金谷村2学寮・同三岳村1学寮の「寮医」欄には, 「無医村のため未定」とあった(『同上』400頁)。

石原佳子は, 「学童集団疎開先実施状況調」の解説において「おおむね一九四四年九月末前後の疎開状況を示すものではないかと推測される」(『同上』270頁)と述べている。

- (59) 「大阪府田辺国民学校疎開地(大阪府) 昭和二十年五月十五日調」,『大阪市学童疎開地一覧 (付録) 瀬田寮の教育』(下)95頁。

- (60) 「田辺国民学校養護日誌」4月18~24日, 4月27日, 5月7・8日・10日の条は, それぞれ『大阪市教育センター研究紀要 学童疎開史研究(Ⅱ)』(第32号, 1990年3月, 37・38・43・44頁)によった。

「田辺国民学校養護日誌」は, 大阪市教育センターが大阪市立田辺小学校および同校の養護教諭であった森本政子から寄贈を受けた1937~1950年度の14冊の「学校衛生日誌」, 「衛生日誌」, 「養護日誌」のうち, 1944年7月29日~1945年11月7日の日誌と「昭和20年 児童臨時身体検査統計表」からなっている。同紀要の編集を担当した赤塚康雄は, 「昭和一九年度, 二〇年度の日誌は, 当然, 学童疎開期の保健が扱われており, 養護日誌を通して学童集団疎開を把握することのできる資料として位置づけることができる。管見の限りだが, 現在, 日本唯一の資料ではなかろうか」, 「緊急時に拘らず, 医師の往診がなく, 養護訓導が医師がわりをしなければならないという戦時下の状況さえ浮かび上がらせている」(同書「解説編」36頁)と述べている。至当である。

赤塚康雄は, 千早第二寮における急性盲腸炎発症児童への森本政子の対応にも, 特に注意を払っている(同書「解説編」39~40頁)。

拙著『学童集団疎開史』（170～173頁）では、森本政子が、疎開先宿舍9カ所を間断なく巡回して、「医師の代替」を果たしたと述べてはあるが、南河内郡千早村を無医村と把握しないまま、「実質的無医地区対策」の事例としてしまった。

なお、筆者は2015年6月8日、南河内郡千早村（現千早赤阪村）の西恩寺（千早第一寮）・天理教千早分教会（千早第二寮）を訪ねた。西恩寺住職からは、隣接している土地に集団疎開児童宿舍を建てたと聞いていると、天理教千早分教会では、当時の建物は火災で消失し、集団疎開児童のことは知らないとの説明を得た。

(61) 「勤労奉仕」、『女医会』第365号、1943年8月1日、8頁。同記事では、「区内軍人遺家族二二四人に対し香典持参慰問」（1943年7月19・20日）、「校舎内外の掃除及び待避壕」掘削を「勤労奉仕」としている。

(62) 「昭和十八年四月 学校日誌 帝国女子医学薬学専門学校」東邦大学額田記念東邦大学資料室所蔵。

(63) 「昭和十九年四月 学校日誌 教庶務課」東邦大学額田記念東邦大学資料室所蔵。

東京女子医専における学童集団疎開先無医村への動員以前の勤労動員については未詳である。

(64) 岡田信六「東京都学童集団疎開と保健対策」、『日本医事新報』第1145号、1944年9月16日、8～10頁。

(65) 「疎開学童医療衛生対策協議会懇談事項 昭和十九年九月十七日」、『重田文書』（分類番号0305-21）。書き込んだのは、文部省体育局保健課長として疎開学童医療衛生対策協議会に陪席した重田定正である。なお、「書込」判読に際しては、井上高聡氏の御協力を得た。

(66) 「疎開学童医療衛生対策協議会規定案」、『重田文書』（分類番号0305-20）。

(67) 『資料・東京都の学童疎開』318頁。視察結果に関する資料は未詳である。

(68) 「㊦ 集団疎開学童ニ対スル保健指導関係学徒ノ動員要領（案）（昭和一九・九・二〇）」、『重田文書』（分類番号0305-27）。

管見の限り、この通牒にもとづいた「家政科系女子専門学校」生徒の動員が、実施にいたったかどうかは未詳である。

(69) 1944年11月5日付各地方長官・警視庁医監・各地方行政協議会長・各女子医学専門学校長宛文部省総務局長・厚生省衛生局長通牒「女子医学徒勤労動員要領ニ関スル件」、『文部時報』第820号、1944年12月10日、28頁。なお、「㊦ 集団疎開学童ニ対スル保健指導関係学徒ノ動員要領（案）（昭和一九・九・二〇）」には記載があった大阪女子医学高等専門学校は、動員対象となっていない。この間の事情は未詳である。

(70) 1941年8月8日付地方長官宛文部次官通牒「学校報国団ノ隊組織確立並其ノ活動ニ関スル件」、『文部省体育局編・発行『昭和十八年三月 集団勤労作業ニ関スル法令並ニ諸 通牒等類集』1943年、118～120頁。

(71) 学徒動員本部総務部編・発行『昭和十九年十月 学徒動員必携』第二輯、1944年、3～4頁。

(72) 『昭和十九年十月 学徒動員必携』第二輯、8頁。

(73) 「工場事業場等学徒勤労動員受入側措置要綱」（1944年5月3日付地方長官学校長宛文部省総務局長・厚生省勤労局長・軍需省総動員局長通牒）、「工場事業場等学徒勤労動員学校側措置要綱」（1944年5月11日付地方長官学校長宛文部省総務部長通牒）、「工場事業場学徒勤労動員ノ報償等取扱細目」（1944年9月3日付学校長宛文部省総務局長・厚生省勤労局長・軍需省総動員局長通牒）は、それぞれ『昭和十九年十月 学徒動員必携』第二輯（27～35頁、35～40頁、90～97頁）を参照されたい。

(74) 加藤淑子「戦中日記抄」、『たんぽぽ』89～90頁。

「戦中日記抄」の構成は下記のようなものである。

I 日記抄（昭和十八年十月二十一日より十九年三月二日）（80～87頁）

II 疎開学園被派遣記（日記抄）〔序、茨城県新治郡斗利出村、法雲寺学寮行き、栃木県芳賀村、昌泉寺・長安寺学寮行き〕（88～104頁）

Ⅲ 碧素〔碧素，卒業後〕（104～107頁）

加藤淑子の閨歴は、「加藤淑子略年譜」（『歌集 朱雲集』現代短歌社，2013年，114～116頁）を参照されたい。

ここでは、『山口茂吉』（乙骨書店，1971年），『斉藤茂吉と医学』（みすず書房，1978年），『歌集 朱雲集』（角川書店，1981年），『山口茂吉 斉藤茂吉の周辺』（みすず書房，1984年），『斉藤茂吉の十五年戦争』（みすず書房，1990年），『歌集 秋沙』（短歌新聞社，1994年），『歌集 さつき集』（私家版，1994年），『歌集 石黛』（不識書院，2000年），『山口茂吉日記』1～8巻（明治大学人文科学研究所，2002年），『歌集 落花風起』（短歌新聞社，2004年），『茂吉形影』（幻戯書房，2007年），『加藤淑子著作集』1～4巻（みすず書房，2009～2010年），『歌集 朱雲集』（現代短歌社，2013年）など，加藤淑子の歌集・著作を掲げておく。

2013年版『歌集 朱雲集』は，1981年版『歌集 朱雲集』とは配列が異なり，短歌にも推敲がほどこされている。特に「後記」は別の文章と見なすべきほど相異している。

筆者は『歌集 さつき集』，『山口茂吉日記』を未見である。

(75) 加藤淑子「戦中日記抄」，『たんぽぽ』103頁。

(76) 「医学徒配置要項並受入注意事項」（複写資料），東京女子医科大学大学史料室所蔵。本資料は，「医学徒配置要項並受入注意事項」を台紙に重ねて複写した資料である。台紙部分には「加藤淑子氏蔵」と書込がある。「十月東京都より係官来校し種々説明」した際に，「医学徒配置要項並受入注意事項」，「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」，「帝国女子医学薬学専門学校学徒派遣場所」を配布したと加藤淑子が述べている「医学徒配置要項並受入注意事項」の複写である。

『たんぽぽ』（240～242頁）は，現代の読者を念頭においたのであろう，「医学徒配置要項並受入注意事項」の片仮名を平仮名に，「町診除去」・「ビタミン」を「耳垢除去」・「ビタミン」に代え，「医学徒配置要項並に受け入れ注意事項」として載せている。

「医学徒配置要項並受入注意事項」の「2 受入側注意事項」には居室と寝具しか記載がない。やや不自然であり，執務時間・休憩・入浴・食事などを記した続きがあったとの推測は許されるだろう。

(77) 加藤淑子「戦中日記抄」，『たんぽぽ』89～90頁。

(78) 「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」（複写資料），東京女子医科大学大学史料室所蔵。本資料は，「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」を台紙に重ねて複写した資料である。旧蔵者氏名の記載はない。

(79) 「昭和十九年十一月七日 本科三年生集団疎開地へノ出動員（第一班氏名及配置場所）」（複写資料），東京女子医科大学大学史料室所蔵。本資料は，「昭和十九年十一月七日 本科三年生集団疎開地へノ出動員（第一班氏名及配置場所）」を台紙に重ねて複写した資料である。台紙部分に「長田清子氏蔵」と書込がある。

(80) 「本科三年生集団疎開地へノ出動員（二） 第一班～第四班の出動期間」，『たんぽぽ』246～247頁。

(81) 加藤淑子「戦中日記抄」，『たんぽぽ』89頁。

(82) 帝国女子医学薬学専門学校教庶務課「昭和十九年度 日誌」1944年11月14日の条，東邦大学額田記念東邦大学資料室所蔵。

(83) 小野勲先生の喜寿を祝う会編・発行『喜壽』1988年，118・126頁。

(84) 1944年3月10日付各区長宛東京都長官通牒「学童疎開勸奨ニ関スル件 極秘」，『資料・東京都の学童疎開』5～7頁。本通牒添付資料「疎開施設調」には25施設が載っている。

(85) 1944年3月23日付東京都教育局長宛京橋区長報告・申請「国民学校児童集団疎開ニ関スル件」，『資料・東京都の学童疎開』13頁。

(86) 「小野勲氏に聞く」（収録は1993年9月29日，聞き手は水野真知子），『東京都教育史年報』第3号，1995年6月，49頁）。

石井昭示は、法雲寺住職は「先代の住職のときのことで私はよく知りません。庫裏は改築されましたが、本堂は当時のままです」と語ったと記している（『水上学校の昭和史 船で暮らす子どもたち』隅田川文庫、2004年、120頁）。

法雲寺は1689年に勅願所（「勅命によって鎮護国家・玉体安穩・皇祖長久などを祈願する」、『日本史広辞典』1431頁）となっていた。一方、水上小学校は、高松宮の「御下賜金」を契機とした財閥・富豪からの寄付を得て、1930年9月に発足した。その後も高松宮は校長「拝謁」、 「台臨」、 「御下賜金」などを通じて水上小学校に関与した。高松宮は、定住する家を有していない水上生活者への侮蔑に対抗して、初等教育事業を実現するうえで重要な存在であった。

法雲寺については、土浦市立博物館編・発行『戦国武将小田氏と法雲寺 土浦市市制施行70周年記念復庵和尚渡元700周年記念 第32回特別展展示図録』（2011年）を参照した。

水上小学校と高松宮との関係については、寺岡徹「水上学校の歴史的位置」（1996年度横浜国立大学教育学研究科学校教育学専攻修士論文、72～80頁、未公開）を参照した。同論文の閲覧は寺岡徹・白取道博両氏の御厚意によっている。

筆者は、同論文（79頁）から以下の箇所を摘記しておきたい。

水上生活者の中には、「普通小学校」に通学していた者が存在していた。だが、彼等は水上生活者以外の者達から、差別されていた。差別から水上生活者を救う方法として、水上生活者子弟を水上学校と寄宿舎に収容するという方法をとった。水上生活者〔を〕寄宿舎に収容するという事業は、教育という営為であるが故に実現した……。……皇族による「思召」は、水上生活者を差別のまなざしから救った。救い方は、水上生活者を「特別な慈愛」を注ぐべき存在として把握することによって実現した。……その存在が「違和感」を持ってむかえられる水上学校が、社会に認知されるためには「特別な慈愛」を注ぐべき存在として水上生活者は存在する必要があった。その「慈愛」の具現は、水上小学校であり、体现者は高松宮であった。

「皇族の慈愛」が茨城県斗利出村・秋田県田沢村まで届くことはなかったかの如くであるが、「水上学校の沿革」（『喜壽』119・120頁）の記事は、上記例引を補う価値はあろう。

- ・1948年2月17日 佐藤校長は高松宮殿下に拝謁仰付けられ、水上民生館が設立せられたこと及び水上小学校の近況を言上する。水上民生館設立の趣旨を嘉せられ金一封御下賜遊ばされる。
- ・1948年9月7日 高松宮殿下芝浦港湾荷役改善協会御視察の後短艇を以て箱崎水上民生館及び深川の水上小学校を御視察遊ばされる。
- ・1951年10月10日 天皇皇后両陛下箱崎水上民生館を御視察遊ばされる。全児童艇内にて御下問遊ばされた。
- ・1954年9月6日 附属学寮改築竣工し落成式を行う。……高松宮同妃両殿下には三度目の御来校賜り、子供達の器楽合奏をお聞きになる。

(87) 宮本秀夫「疎开学園の思いで 茨城県斗利出村から秋田県田沢湖畔へ」、『喜壽』16～19頁。

(88) ①～⑧の出典はいずれも『資料・東京都の学童疎開』である。書名を略して頁のみを掲げる。

①「㊦ 東京都国民学校戦時疎开学園設置予定表 教育局教育第一課学事係（昭和十九年四月二十二日現在）」、1944年4月27日「校外学舎等施設物ニ関スル件」65～69頁。

②1944年5月3日「水上国民学校戦時疎开学園設置ニ関スル件」71頁。

③「戦時疎开学園調（一九・五・二五現在）」、1944年5月18日「戦時疎开学園ニ関スル計画調書供覧ノ件」

96～99頁。

- ④「疎開学園調（一九・五・二九現在）」、1944年6月4日「疎開学園設置ニ関シ関係当局ニ連絡方ノ件」146～150頁。
- ⑤「疎開学園調（一九・六・一三現在） 教育第一課学事係」、1944年6月14日「疎開学園ニ関スル協議会開催ノ件」162～165頁。
- ⑥「疎開学園調（一九・六・一八現在） 教育第一課学事係」、1944年6月15日「疎開学園調供覧ノ件」176～179頁。
- ⑦1944年7月12日「東京都立戦時疎開学園開設ノ件」218～219頁。
- ⑧1944年8月30日「水上国民学校全校疎開ニ関スル件」299～300頁。
- (89) 「水上学校の沿革」、『喜壽』118頁。

水上国民学校児童が法雲寺戦時疎開学園への移動が終了した9月7日の時点には、「学童疎開促進要綱」（1944年6月30日閣議決定）にもとづく学童集団疎開が展開していた。「戦時疎開学園調（一九・七・一四）」（1944年9月27日付国民教育局学事係起案原議「旧戦時疎開学園収容児童ノ疎開先ニ於ケル教育及主要食糧等ノ生活物資配給方ニ関スル件」（決裁は10月2日）、『資料・東京都の学童疎開』324～326頁）によれば、32ヵ所の戦時疎開学園中10ヵ所は中止または廃止となっている。また、都立富津疎開学園（千葉県君津郡富津町）のように、参加していた杉並区立国民学校26校中21校の児童142人は、杉並区の方針にしたがって学校毎にそれぞれ宮城・長野両県へ集団疎開し、杉並区桃井第一国民学校富津分教場へと移行した例もあった。

1945年7月2日、桃井第一国民学校富津文教場児童は、宮城県遠田郡南郷村へ再疎開した（東京都杉並区教育委員会編・発行『杉並区教育史』下巻、1966年、435頁）。

- (90) 『資料・東京都の学童疎開』323頁。
- (91) 1944年9月27日付国民教育局学事係起案原議「旧戦時疎開学園収容児童ノ疎開先ニ於ケル教育及主要食糧等ノ生活物資配給方ニ関スル件」、『資料・東京都の学童疎開』323～328頁。

生田目靖志「茨城県における学童集団疎開概要の一端」（『茨城県史研究』第81号、1965年3月、64～65頁）は、『茨城新聞』（1944年8月9日付）によって、向島・淀橋区からの疎開学校と児童数を示しているが、東京都水上国民学校戦時疎開学園・戦時疎開学寮には触れるところがない。生田目靖志「戦禍を避けて新聞にみる学童疎開」3・4（『茨城新聞』1990年8月9・10日付朝刊）も同様である。

『茨城新聞』1990年8月9・10日付朝刊のスクラップは、佐藤秀夫を介して参加した「不忘会」で知り合った松田重夫氏の御提供によっている。「不忘会」については、東京都台東区立精華小学校白石市かねまん学寮同窓会編・発行『不忘山』（1978年）を参照されたい。

- (92) 小野勲「水上小学校と私」、『喜壽』9～10頁。
- (93) 「小野勲氏に聞く」、『東京都教育史年報』第3号、50頁。
- (94) 1945年3月15日付国民教育局学事係起案原議「集団疎開地変更ノ件」・国民教育局学童疎開係「市町村別学寮調（昭和20年6月末現在）」は、それぞれ『資料・東京都の学童疎開』376・452頁。
- (95) 東京都中央区教育委員会編・発行『中央区教育百年のあゆみ』1974年、652頁。
- (96) 加藤淑子「戦中日記抄」、『たんぽぽ』90～91頁。

角田智恵子は、「私と佐分さんが班名簿を作成し、厚生省から切符が交付されたので、東京駅まで学校から徒歩でもらいにいった」と、他の誰も記していない回想を残している（『思い出すままに（東京女子医専時代）』、『たんぽぽ』156頁）。

- (97) 『時刻表 改正号』第20巻第9号、東亜交通公社、1944年10月1日、158・162頁。常磐線・筑波鉄道線

のダイヤは『時刻表 1月25日改正』(東亜交通公社, 1944年12月1日), 『時刻表 複製版 戦中戦後』(新人物往来社, 1999年)においても改正はなされていないので, 1944年11月のダイヤは『時刻表 改正号』と同じであった。

利用した列車のダイヤと経路の正確な記述は, 加藤淑子「戦中日記抄」の資料的価値の確かさを示している。

筆者は2014年10月3日, JR東日本常磐線(上野ー土浦)を利用して法雲寺を訪ねた。

(98) 加藤淑子「戦中日記抄」, 『たんぽぽ』90~102頁。引用中氏名のアルファベット表記は, 加藤淑子によるものである。

(99) 「斗利出村再訪」, 加藤淑子「戦中日記抄」, 『たんぽぽ』102頁。『落花風起』(2004年)では, 「低鼻」(2000年)7首(138~139頁)中に「たたかひの激しかりし日無醫村に醫の代りして下駄を貰ひし」を配している。『游塵』(みすず書房, 2009年)でも同様に「低鼻」(2000年作歌)7首(353頁)中に配してある。斗利出村再訪は1974年, 「斗利出村再訪」詠は2000年となろうか。

加藤淑子が拠った同人誌『青南』, 『ももんが』(いずれも日本近代文学館所蔵)を繙いたが, 「斗利出村再訪」3首を見出すことはかなわず, 同歌の初出は未詳である。

(100) 加藤淑子「戦中日記抄」, 『たんぽぽ』102~103頁。

(101) 小倉清子「疎開のことなど」, 『たんぽぽ』60~61頁。

(102) 加藤淑子「戦中日記抄」, 『たんぽぽ』103頁。

(103) 「Ⅲ 碧素」(加藤淑子「戦中日記抄」)の初出と見なし得るのは, 『短歌現代 昭和の記録 歌集 八月十五日』(2004年8月号別冊, 短歌新聞社, 2004年8月15日, 135頁)所載「碧素」であろう。『短歌現代』所載「碧素」は, 短歌10首と文章からなり, 配列と文章は「Ⅲ 碧素」とは異なっている。また, 『茂吉形影』(2007年, 208~209頁)所載「碧素」は文章と短歌12首からなる。

この間も「碧素」第1首は「瘡笑」詠だが, 『歌集 秋沙』題詞「緑の石」(1981年の詠とある)には, 「瘡笑といふ症状をまさに見き空襲ののち死ぬ人びとに」(187頁)とある。初出誌は未詳である。

(104) 陸軍軍医団編・発行『部外秘 軍陣医学提要』1943年, 106頁。

同書は, さらに続けて「全身的代間性痙攣, 後弓反張, 直立反張, 前方反張ヲ呈シ其ノ強烈ナル場合ニハ尿, 尿不随意的ニ排出スルコトアリ, 軽微ナル外来刺激例ヘバ人ノ足音, 風, 窓戸ノ音, 光, 接触等ニ因リテモ叙上ノ発作発来増強シ攣縮筋肉ニハ激痛ヲ発シ飲食物ノ摂取不可能トナリ時ニ痙攣ノ為呼吸困難或ハ窒息ス, 実ニ本症ノ死因ハ……窒息, 飢餓, 肺炎等ノ合併症ニ因ルモノ多シ, サレバ終末ニ至ル迄意識明瞭ニシテ真ニ同情ニ堪ヘザルモノ多シ」(106頁)と記している。

「牙間緊急」について, 安田和則氏の御教示を得た。

(105) いずれも『たんぽぽ』からの引用である。書名を略して頁を掲げる。

①相澤千代子「戦時下の学生生活」13~14頁

②石津澄子「学童疎開地への出動と戦後」30・31~32・33頁

③尾城政子「戦前戦後のこと」63頁

④小田原慶子「戦争とともにあった医学生時代」72頁

⑤加藤泰子「想い出すこと」76頁

⑥加藤泰子「想い出すこと」78頁

⑦柴田夫佐「かえりみて」128頁

⑧角田智恵子「想い出すまに(東京女子医専時代)」157~158頁

⑨勅使河原弘子「戦中医学生の忘れ得ぬこと」164~166頁

- ⑩中村ミヨ子「戦争と医学生」183～184頁
- ⑪横田登喜「戦争はしたくない」212頁
- ⑫渡辺慶子「幾度の病をくぐり抜けて」227頁

(106) いずれも『ここに道あり』からの引用である。書名を略して頁を掲げる。◇ は『学童疎開の記録』1の該当箇所である。

- ①杉原敏子「思い出」24～25頁〈419頁〉
- ②市来フジェ「女子医専の思い出」67頁
- ③加納千秋「或る日の午後の長電話——学童疎開地での思い出」(1) 220～221, 224頁〈419頁〉
- ④塩田友子「或る日の午後の長電話——学童疎開地での思い出」(2) 221・222頁〈419頁〉
- ⑤岡葉子「御遠慮同盟からのメッセージ」246～247頁〈419頁〉
- ⑥岩宮豊子「学生時代の思い出」74頁〈403頁〉
- ⑦佐藤ち江「雪の夜の思い出」230頁〈403頁〉
- ⑧林信子「思い出あれこれ」168頁〈403頁〉
- ⑨渥美志津代「会津の思い出」211頁
- ⑩泰和子「私のこの頃」315頁〈317頁〉
- ⑪大山とし「思い出すまに」85～86頁〈417頁〉
- ⑫今野英子「医専の頃の思い出」122頁〈453, 464～465頁〉
- ⑬高橋千代「回想」138頁〈417～418頁〉
- ⑭河合阿毘子「思い出すまに」95～96頁〈417～418頁〉
- ⑮植田セツ子〔タイトルなし〕79～80頁
- ⑯里吉光子「思い出した四年半——我が医専時代」131～132頁〈417頁〉
- ⑰松井梅子「疎開学童と共に」231～232頁〈438頁〉
- ⑱江塚笙子「疎開の子供達と二附病〔第二附属病院〕」215～216頁
- ⑲森千恵子「追憶」186頁
- ⑳後藤律子「疎開学童のことなど」229頁
- ㉑長野昌「思い出のかずかず」146頁
- ㉒山崎万里子「卒業四十周年の雑文」191～192頁〈452頁〉
- ㉓山田二三子「思いでは今も」194頁〈452頁〉
- ㉔朝日絢子「医専時代の思い出」39頁
- ㉕漆原利子「思い出」82頁
- ㉖関多美子「四十年の歳月」136頁
- ㉗宮本佳子「卒業四十年の回想」182頁
- ㉘門馬康子「想い出」187頁
- ㉙山本和子「焼跡に聞いたヴァイオリン」195頁
- ㉚折橋秋子〔タイトルなし〕248頁

(107) 宮本佳子「医療班奉仕の番を待ちつつ」, 東邦大学編『東邦大学50年史』東邦大学創立50周年記念事業委員会, 1978年, 79～81頁。「最後の第3班」とあるが, 4班編制であった東京女子医専と相違しているとは考えにくい。

1944年の「純真な学生」の手記は, 宮城県宮城郡広瀬村・福島県田村郡船引町へ出動した1985年の今野英子の下記の回想(「医専の頃の思い出」, 『ここに道あり』121頁)と通底している。

三年生になってからの勤労奉仕、四年生の時の疎開学童への医療奉仕……が思い出として残っているばかりである。……その思い出の糸を繰ってみると、勤労奉仕としては、住民の血液型検査に歩いたり、製薬会社とか凸版工場等へ分散派遣されたようで、私達ははじめ血液型検査に廻り、後に秋葉原の凸版工場へ行き、来る日も来る日も戦貯〔戦時貯蓄債券〕の校正をやらされていた。いつからいつ迄何カ月位やっていたものか。グループの方達の名前その他全く記憶がない。ただ机に向かって、債券の印刷の誤りを探すのに必死だったことだけが思い出される。そして同じ勤労奉仕でも、血液型検査の時は張り合いがあったが凸版工場のそれはつまらなく、いくらかでも医学生に関係のある製薬会社に行けた方々を羨ましく思っていたものだった。

(108) 宮本秀夫「恩師 小野勲先生」、小野勲『子らとともに』小野先生を励ます会、1972年、48頁。

(109) 「本科三年生学童疎開地へノ出動員（二）第一班～第四班の出動期間」、『たんぼぼ』246頁。

(110) 那珂町史編さん委員会編『那珂町史』近代・現代編、那珂町、1995年、590頁。同書の注（603頁）には、「町史編さん室が聴き取りをし、かつ回想文を寄せていただいた」とある。

(111) 「本科三年生学童疎開地へノ出動員（二）第一班～第四班の出動期間」、『たんぼぼ』246頁。茨城県那珂郡神崎村上宮寺へ出動した第三班・第四班の氏名は空欄である。

(112) 神谷彰宏「疎開日記」1944年1月30日の条、『新版 学童疎開下谷浅草の記録』489頁。

一方、「女医の先生」のひとは、「学徒動員で宮本みち先生と行った蔵王の小原温泉……思い出は尽きないのです」と記すばかりである。この回想には、宮城県刈田郡小原村への出動時期を特定できる記述はない（泰和子「私のこの頃」、『ここに道あり』315頁）。また、動員時期を示す資料は見当たらない。

(113) 女子医専生徒が無医村における医療をどのように考えていたのかを示す資料は見当たらない。見当たらないが、例引した加藤淑子「戦中日記抄」や回想に、「〔茨城県多賀郡高岡村は〕一般的に云つて医療、衛生に対する村民の関心は至つて薄く、口では医者居ない事を嘆じてはゐながら、内心ではそれ程にも思つてゐない様子であつた。例へば近々又県の出張医が来ることになつた相であるが、別にそれを嬉しくも思つてゐないらしかつたし、又村唯一の医療知識のある産婆を積極的に村の衛生向上の為に働かせる事も考へて居らず、食生活に対する無関心は、いくら吾々が説いても理解出来ず、又理解しやうとしない風であつた。要するに之は無医村と云ふより、……村としての気力が全く無いのである。従つて無医村として見る前に、先ず無気力村として取り上げらるべきものであると信ずる」（慶應義塾大学医学部医学徒報国隊茨城班「茨城班報告」、医学徒報国協会編・発行『昭和十七年度 医学徒報国隊農村班報告』1943年、91頁）との如き言説を見出すことはなかったのである。

《後記》

本論文は、教育史学会第58回大会（2014年10月4日、日本大学文理学部）において、「女子医学専門学校「学徒医療隊」の学童集団疎開先（無医村）派遣に関する一考察」として発表した際の口頭発表原稿に加筆したものである。

「はじめに」で述べたように、筆者を女子医学専門学校「学徒医療隊」の無医村動員に関する資料調査へと突き動かしたのは、加藤淑子氏が著した「戦中日記抄」である。

「戦中日記抄」引用の了解を得るべく、2014年秋に口頭発表草稿を加藤淑子氏へ送った。早速の返信には、「心強かったのは女子医専の学生がインターンとして交替で泊り込んで診療してくださったこと」との回想（水上国民学校教員・宮本秀夫）を知って、充足したという意味の言葉が添えられていた。

筆者は短歌には不案内だが、加藤淑子詠を求めて同人誌を漁ったのは、惑溺とでも表すべき時間であった。

白取道博氏が、筆者の要請に応じて口答発表原稿に多岐にわたる意見を寄せてくれたことも、忘れぬように記しておく。

山本美穂子氏、東京女子医科大学史料室、東邦大学額田記念東邦大学資料室による資料提供には改めて感謝申し上げる。

Medical Issues confronting Evacuation of Elementary School Children in Japan: Mobilization of Women's Medical College Students to Doctorless Area

Masaaki HEMMI**

Key Words

evacuation of elementary school children, doctorless area, women's medical college students, SUIJYO elementary school, Yoshiko KATOH

Abstract

The Japanese government ordered 400,000 children of national elementary school to collectively evacuate from 13 cities including Tokyo and Yokohama on July 22, 1944. In order to smoothly carry out evacuation of elementary school children, the health and sanitation problems were important issues, such as securing lodging, food and daily necessities.

As of October 26, 1944, 354, 937 children were evacuated from 8 cities including Tokyo and Yokohama to 1,751 municipalities. Among them, 52,006 (14.65%) children were evacuated to 354 municipalities (20.22%), which were doctorless area. Therefore medical problems of evacuated children emerged as a difficult task at once. For evacuated children in doctorless area, the Ministry of Education and the Ministry of Health and Welfare asked the Medical Association and the Dental Association for cooperation of medical treatment.

At the same time, they mobilized the students of the Tokyo Women's Medical College (present Tokyo Women's Medical University) and the Imperial Women's Medical and Pharmaceutical College (present Toho University) as "Medical Corps of Students" to 46 doctorless area.

While studying the following points, this paper prove that the mobilized students of the Tokyo Women's Medical College and the Imperial Women's Medical and Pharmaceutical College were doctors without confusion for evacuated children and local residents in doctorless area.

- (1) The medical issues in doctorless area where children evacuated and the countermeasures taken by the government and the prefecture against them
- (2) The mobilization planning of "Medical Corps of Students" to doctorless area where children evacuated
- (3) The mobilization situation of "Medical Corps of Students" in doctorless area where children evacuated
- (4) The actual condition of "medical assistance and health guidance" by "Medical Corps of Students" in doctorless area where children evacuated

**Honorary Professor of the Hokkaido University and Researcher of the Hokkaido University Archives